

英文学会誌

第45号

2017年3月

目次

宮城学院女子大学 130 周年記念小特集

英文学科の「現在・過去・未来」—過去 10 年間の歩み

1960 年代のMG 生 3
飯塚久栄

Miyagi Gakuin 130th Anniversary 6
Barbara Bourke

* * *

データでみる英文学科の 10 年間 (2007 年—2016 年)
東日本大震災 (2011 年 3 月 11 日) 当日の英文学科図書室
. 9
増富和浩

各種データ 12
1. 就職先、就職率、教員になった学生数、大学院進学者数
2. 海外研修参加者数
3. 留学生の推移
4. TOEIC600 点以上取得者数推移
5. ESL 利用者数
6. キッズえいごに参加した小学生数

英文学科関連年表 20

英文学科教員 21

制度改革

学部改組と新学芸学部の説明 22
遊佐典昭

新カリキュラムについて 22
田島優子、吉村典子

蒐集・分類された巡礼たち—《チョーサーのカンタベリーへの巡礼者》を読む 27
鈴木雅之

メアリ・セトン・ワッツとサリー州の「ギルド」—慈善から社会的企業へー	55
吉村典子	

エイルマーの掲げる「高貴な」目標—ナサニエル・ホーソンの「瘧」における精神と物質の問題をめぐって	75
田島優子	

Reading Activity Rollout: Year-One Implementation of the English Department's New Curriculum	93
Cory J. Koby	

英文学科生の活動

English Speaking Lounge	111
2年 菊田詩織 2年 三上紗季	
海外長期留学報告	114
クイーンズランド工科大学 3年 河野美咲	
リーズ大学 2年 後藤麻柚子	
ウィニペグ大学 3年 佐藤亜海	
リーズ大学 2年 佐藤唯	
カナダ研修報告	121
3年 橋本楓 2年 渡邊彩香	
英語ボランティア活動報告	124
4年 先崎りさ子 1年 村上野乃香	

2016年度英文学科活動報告

教員研究・教育活動報告	129
英文学科講義題目	141
英語英米文学専攻講義題目	144
卒業論文題目	145
英文学会活動報告	148

TOEIC—私の勉強法—	149
--------------	-----

宮城学院女子大学 130 周年記念小特集



英文学科の「現在・過去・未来」—過去 10 年間の歩み

1960 年代の MG 生

飯塚 久栄

私が大学生として過ごした 1962 年-66 年は、所謂、団塊の世代の若者が大学に押し寄せる数年前で、膨大な人口増加の影響は既に小学校において現れていました。小学校では児童数の急激な増加による深刻な教室不足から、授業は午前と午後の二部形式で行われていました。日本全体が経済的に貧しかったため、大学への進学率は 15~20%と低く、特に女子の場合、たとえ学力が高く経済的余裕があっても、「女に学問は不要」という古い考え方から、多くの女子は進学を断念して就職の道に進まざるを得ない時代でした。

そうした社会情勢のなかにあって、宮城学院はミッション・ボードからの経済的支援に加えて、随時派遣される教育宣教師が英語、音楽の教科と宗教教育を担当する人的支援によって恵まれた教育環境にありました。1960 年代に宮城学院で学んでいた学生には、世相を反映した暗鬱な悲愴感や閉塞感は感じられず、むしろ学べる喜びと新しい時代への開放感からくる屈託のない明るさがあったように感じました。中学、高校、短大、大学が混在する東三番町の手狭なキャンパスは、現在の桜ヶ丘キャンパスとは格段に見劣りのする校地でしたが、学院全体にはクリスチャン・スクールとしての一体感が漲っていました。毎朝の礼拝で讃美歌を歌い、聖書の言葉に耳を傾けることに新鮮な感動を覚え、大講堂で行われたクリスマス礼拝では、全校生が揃ってハレルヤ・コーラスを熱唱した時の喜びは印象深く記憶に残っています。

キリスト教主義の教育環境のなか、十代にしてキリスト教と出会い、大

学で英文学を学ぶ境遇にあったことは幸せでした。当時の英文科を振り返ると、英語を学ぶことは単なる技能（スキル）の習得にとどまらず、ツール（媒体）として文学、歴史、文化を理解し、ひいては人間がいかにかえ、いかに生きるかについて学ぶことを英文科の究極の目的に掲げていました。カリキュラムも英語の「読み・書き・話す」の三技能を軸に、実践的教科と専門的教科が学生の英語能力と知的段階に応じて習得できるよう、必修科目と選択科目がバランスよく開設されていました。選択科目の中に「古典文学」や「宗教学」などの科目が開設されていたことは、欧米の文学や文化の背景を理解するうえで大いに役に立ちました。文学に触れることによって目先の技能だけにとらわれない幅広い視野を得ることは、生きていく上での拠り所を手に入れることに繋がったのではないかと思います。

レジャーや娯楽が極端に少なかった時代に、充実した学生生活をおくることができた要因の一つに課外活動の存在がありました。当時の英文学会は、学生が自由に活動し、活躍する場を提供するうえで重要な役割を果たしていたからです。英字新聞・文学・ESSなどのサークル活動は、学生同志が互いに英語力を磨く場として多くの学生が熱心に参加していました。毎年秋には、学科主催による東北六県の女子高校生を対象とした「英語暗誦大会」（English Recitation Contest）が行われ、司会やレセプションなどを学科生が務め、英語力を披露し活躍していました。この大会には県内外から多くの女子高校生が参加出場しており、地域の英語教育向上のために英文科は尽力し、貢献していました。

こうした活動から、後に「宮城学院の伝統」と称されるようになった英語劇公演が生まれました。この行事は、宮城女学校の草創期、学業の成果を来賓に披露する目的で英語科と音楽科が合同でシェイクスピア喜劇の抜粋を演じたのをきっかけに始まりました。それ以来、この行事は毎年引き継がれ、1949年以降は、英文科の必修科目「戯曲」の総仕上げとして、シェ

イクスピアの四大悲劇（『ハムレット』『オセロ』『マクベス』『リア王』）の英語劇公演が行われ、1967年まで継続されました。卒業学年の学生全員が、教育実習を目前に控え、卒業論文研究を抱えての一大行事でした。担当教員の熱心な指導の下、キャスト、大道具、小道具、音響から衣装、プログラム、渉外に至るすべてを、クラス全員が一丸となって約四か月間必死に奮闘した結果、無事公演を終えた時の感激と達成感は生涯忘れることのできない貴重な体験でした。宮城学院で過ごした私の学生時代は、宮城学院の長い歴史の中のほんのひとこまにすぎませんが、その短い四年間に、学び、体験し、与えられた恵みの大きさは計り知れないものがありました。

今年、宮城学院は創立130年になります。東北の女子大学として宮城学院は目覚ましい発展を遂げました。近隣の学校が男女共学へと方向転換するなか、開学時の建学の精神を一貫して堅持し、地域の女子教育ために大きな役割を担って貢献している母校の姿を見ると、130年前神のご計画によって先人たちが蒔いた「小さな種」が深くこの地に根を下して成長し、見事に結実していることに深く感謝いたします。

（名誉教授、本学教員：1966年4月-2007年3月）

Miyagi Gakuin 130th Anniversary

Barbara Bourke

My first contact with MGU was when as Lecturer in Japanese at the Queensland University of Technology (QUT), Brisbane, Australia, I was searching for exchange partner institutions in Japan and was referred to MGU because there was another Australian teaching there—Dr John Morris. We were able to finalise an exchange agreement and as a result several Australian students went to study at MGU and many MGU students studied at QUT.

In 1998, it was my turn for exchange and I taught at MGU for two years as a Visiting Professor. During that time I taught English Listening, Speaking, Reading and Writing courses as well as an Australian Studies course. I enjoyed my time at MGU and living in Sendai and made some lasting friendships.

Then, almost ten years later, in 2009, I had the opportunity to return to MGU when the language department at QUT was closed down. I was fortunate that there was a vacancy in my previous position and promptly applied for it. I returned to duties similar to my previous teaching assignment but with the addition of the Overseas Studies unit. In 2009, it was planned to take a group of students to Canada but this trip had to be cancelled at the last minute due to the SARS epidemic that was threatening the world at the time.

In the summer of 2010, Kiguchi Sensei and I took 24 students to QUT in Brisbane where extra curricular activities included a visit to Stradbroke Island where we saw whales and dolphins and participated in Aboriginal cultural activities, a visit to the Gold Coast, participation in a Japanese class at a private girls' school and teaching Japanese culture to primary school children at a local state

school.

The following year, we again had the chance to go to Canada and in spite of the horrific events that took place in Tohoku in March of that year, and in August 2011, Kiguchi Sensei and I accompanied 32 students to the beautiful city of Victoria on Vancouver Island for three weeks. Highlights of the extra-curricular activities in Victoria were the dragon boat festival, whale-watching, high tea at the Empress Hotel and visits to the famous Butchart Gardens, the British Columbia Museum and government house.

At the time of the Tohoku earthquake and tsunami disaster, I was in Sendai. It was during the spring vacation and I had planned to go back to Australia for a brief stay on Monday 14 March. Some may say it was unlucky timing but I don't agree. It would have been much worse for me if I was watching the horrific images on television from my lounge room in Brisbane, not knowing what was happening to my friends and students. I was very touched by the care and concern people showed for those around them at that time. I personally experienced no real property damage or personal loss but as time went by, I heard many tragic stories of loss of loved ones and property from people I knew. I managed to get to Narita and leave for Australia on 15 March and soon after, broke my leg in a bicycle accident in Brisbane! Luckily the start of classes at MGU was delayed by a month, so I was able to return in time for classes, but with my leg still in a cast.

I finished teaching at MGU in March 2012 making five years in total. I treasure the memories of my time with you and the professional and personal opportunities afforded to me by the experience. Congratulations on your 130th anniversary!

(Visiting Professor :1998-2000, 2009-2012)



My Farewell March 2012

データでみる英文学科の10年間（2007年—2016年）

東日本大震災（2011年3月11日）当日の英文学科図書室

——2011年3月11日、その瞬間はあまりにも突然訪れた——

すでに春休み入っている3月中旬は、多くの学生は学外で思い思いに過ごしており、学内には教職員の姿が目立つ時期である。しかし、卒業式を間近に控えた3月11日は、卒業式で着用するガウンを借り出すために多くの4年生たちが登校しており春休みには学内には賑やかな声が響いていた。

人文館4階にある英文学科の図書室でも、卒論提出や学年末試験を終えて以来、久しぶりに再会する同級生たちとの団欒を楽しんでいる4年生の声が華やかな雰囲気を作り出していた。その雰囲気を近くに感じながら、年度末と新年度の狭間で相変わらずせっせと働いている教員や副手たちもいつになく居心地の良さを感じていたことだろう。

——2011年（平成23年）3月11日（金曜日）14時46分18秒、宮城県牡鹿半島の東南東沖130kmの太平洋の海底を震源とするマグニチュード9.0の地震が発生した——

その時、突然、奇妙な感覚に襲われた。それは、靴の下で床が小刻みに動いているような感覚、直感的に地震だと感じられた。しかし、いつもとは違う違和感とともに身体全体もゆっくりと揺すぶられたような奇妙な感覚だった。直後に、あたりの書棚や書類ケースが次第に転んだよ



うな音を立てて揺れ始め、その揺れは次第に強く大きくなった。この時、周辺にいた誰もが、明らかに地震だと気が付いただろう。

揺れは、さらに激しさを増し、至る所のものが揺れ始めた。尋常ではない感じがした。揺れ始めて数十秒が経過していただろうか。一向に振動が収まる気配はなかった。図書室から伝わってくる雰囲気が一変した。それまでの賑やかな声は、次第に不安に包まれ、悲鳴が上がり始めた。棚から物が落ち始めた。あちらこちらで、激しい物音がし始めた。床も壁も天井もすべてが揺れていた。書棚からも本が落ち、椅子が倒れ、机が動き、誰もが恐怖を感じ始めた。普段ならこの辺りで終息するはずの揺れが収まらなかった。1分以上が経過したように感じたころ、ようやく終息の気配を感じたような気がした。

——続いて14時47分00秒、宮城県のに沖合で2度目の断層破壊による巨大地震が発生した——

しかし、次の瞬間、その期待は一瞬にして打ち砕かれた。第一波の揺れをさらに上回るこれまでに経験したことのない大きな振動が図書室のある人文館4階のフロア全体を激しく揺さぶり始めた。パソコン、プリンターやスチール棚など、ありとあらゆるものが重さを無くしたように振り飛ばされ、床に散乱し、すべての書棚がひっくり返るように倒れ、図書室や大学院生室にいた学生たち、研究室や副手室にいた教職員たちが咄嗟に部屋を飛び出し、無我夢中で避難を始めた。人文館全体がガタガタと不気味な音を立てて土台から揺れ続けてい



た。突然、停電し、天井パネルがバラバラと崩れ落ち、照明器具がいくつも外れ宙吊りになった。辺り一面に粉塵が舞い始め、一挙に視界が悪くなった。柱や壁も体を支える助けにはならず立っていられなかった。壁が崩れ、床が抜け、人文館が倒壊する……そんな予感が頭をよぎり、死の恐怖を感じた者も少なくなかっただろう。

——幸いにして、一人の犠牲者も出なかった——

少なくとも2度の長く激しい揺れの後、英文学科の図書室は見る影もなく崩壊していた。すべての書棚が折り重なって倒れ、ほんの10分前までそれらの中に整然と収まっていた大量の本がまるで瓦礫の山と化したように床を埋め尽くしていた。そんな変わり果てた図書室の中に人の気配がした。なんと、逃げ遅れた数名の学生が倒れた書棚の下敷きになった机の下のわずかな空間で辛うじて難を逃れていた。幸い、その学生たちに怪我はなく、駆け付けた教職員たちと一緒に速やかに中庭の芝生スペースに避難し、他の学生たちと合流することができた。

——雪が舞う中、さらに何度も余震が続いた——

中庭の芝生スペースが取りあえずの避難場所となっていた。3月も中旬に差し掛かる時期であったが、2011年3月11日は午後から雪が舞う寒い一日だった。着の身着のまま避難してきた学生や教職員たちは、状況が把握できない不安と寒さの中で、何度も続く余震で揺れる校舎をしばらくただ見つめていた。ほどなく、大学の指揮系統が機能し始め、体育館が当面の避難所として整備され、その後1週間ほど続く学生、教職員合同の避難生活が始まった。

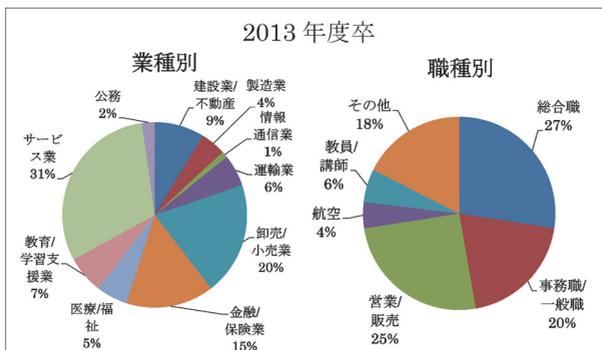
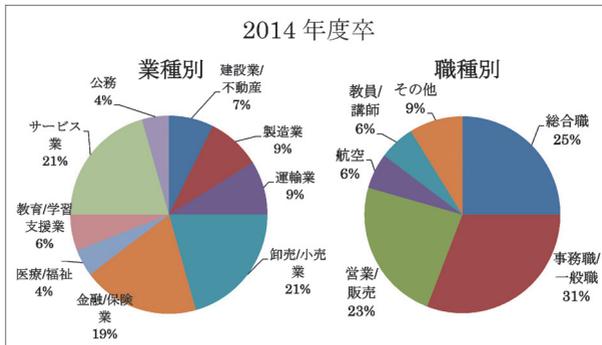
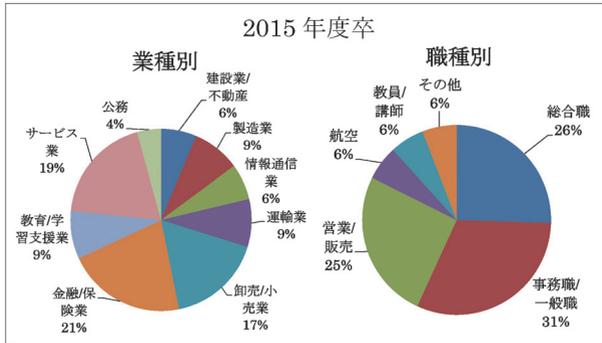
あれから6年近くが経過し、英文学科図書室は震災以前と同様の姿を取り戻し、震災後に入学した学生たちの賑やかな声に包まれ、再び英文学科の中核的な施設として利用されている。もう二度と……あの日のような光景を見ることがないように唯々祈りたい。

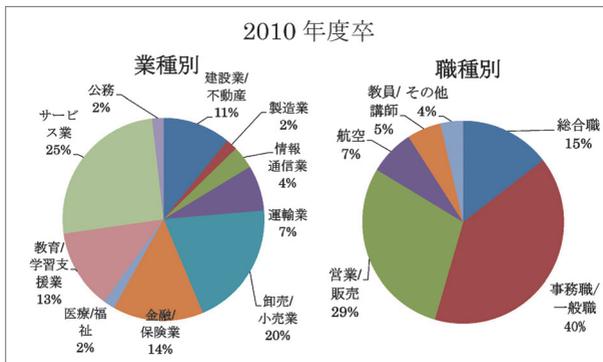
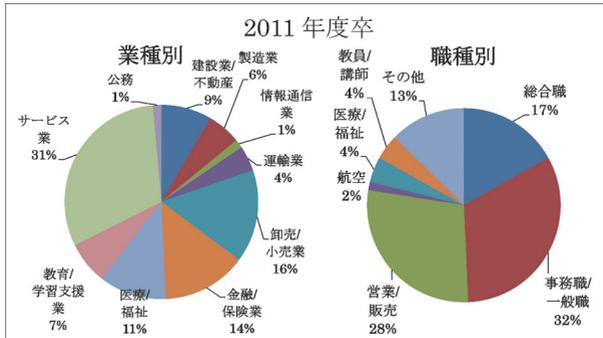
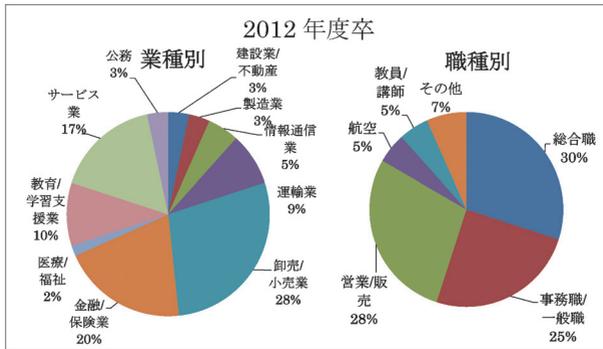
(英文学科 准教授 増富和浩)

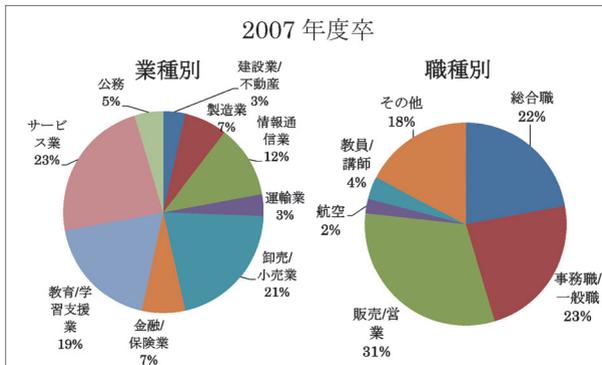
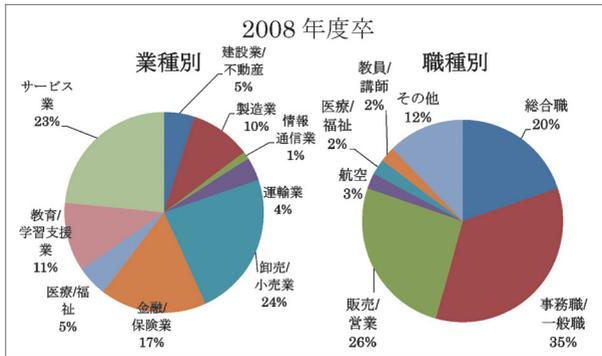
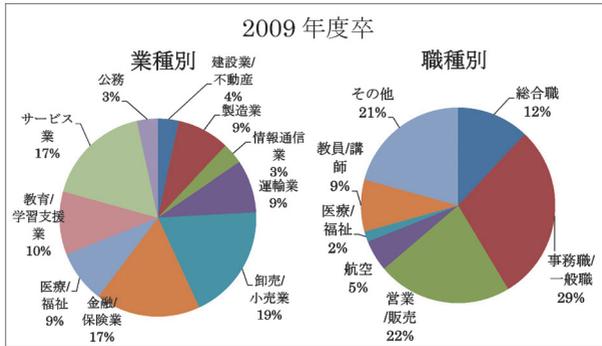
各種データ

1. 就職先、就職率、教員になった学生数、大学院進学者数

以下の円グラフは2007年度～2015年度卒業までの就職状況を表わしたものである。英語に関連した業界・職種だけでなく、様々な業界・職種にOGを輩出している状況が分かる。







卒業後の進路

卒業年度	卒業生数	進学希望者	大学院進学者		就職希望者	就職者	就職率
2007	109	4	(MG) 1		101	86	85.1%
2008	118	2	(MG) 2	既卒1を含む	99	81	81.8%
2009	102	4	0		76	58	76.3%
2010	103	2	(MG) 2	既卒1を含む	88	55	62.5%
2011	107	4	0		93	71	76.3%
2012	82	3	1		66	60	90.9%
2013	115	6	(MG) 2		96	91	94.8%
2014	83	1	0		72	68	94.4%
2015	67	2	0		56	52	92.9%

就職率は震災以降は90%以上をキープしている。進学希望者では、大学院以外に専門学校に進んだ者、留学した者もいる。

英文学科卒業生で英語教員になった人数（公立・常勤）

(中学)	新卒		既卒		(高校)	新卒		既卒	
	県内	県外	県内	県外		採用年度	県内	県外	県内
採用年度					採用年度				
2007	1		3		2007				
2008			2		2008				
2009			1		2009				
2010					2010				
2011			1		2011				
2012			3		2012				
2013			1		2013				
2014		1	1		2014				1
2015	1		3		2015			1	
2016					2016				

上記は卒業生より教職センターへ報告のあった公立・常勤の数のみで、この他にも報告のないもの、私立や非常勤などの英語教員になった者がいる。また、塾や英会話教室で英語を教えている者もいる。

2. 海外研修参加者数

年度	行先	語学学校	所在地	参加者数	費用	備考
2007	カナダ	Stewart College of Languages	Victoria	33名	362千円	期間を約1ヵ月から3週間に変更
2008	イギリス	EAC	Edinburgh	21名	547千円	
2009	カナダ	Stewart College of Languages	Victoria	(33名)	—	新型インフルエンザのため中止
2010	オーストラリア	QUT	Brisbane	24名	342千円	
2011	カナダ	Stewart College of Languages	Victoria	32名	396千円	
2012	イギリス	Milner School of English	Wimbledon	19名	455千円	研修地をEdinburghからWimbledonに変更
2013	イギリス	Milner School of English	Wimbledon	22名	489千円	
2014	カナダ	Stewart College of Languages	Victoria	43名	412千円	
2015	イギリス	Milner School of English	Wimbledon	33名	495千円	
2016	カナダ	Stewart College of Languages	Victoria	20名	378千円	

2007年度から研修期間を8月中旬から約1ヵ月実施していたのを約3週間に変更。

2009年度には新型インフルエンザのため、海外研修始めて以来、初めて研修の中止を決定。

2003年度よりイギリス研修とカナダ研修を隔年で実施していたが、2010年度には研修先をオーストラリアに変更して再開。

2011年には東日本大震災後ではあったが、予定通り海外研修を実施。以降、研修先をカナダとイギリスに戻す。

2012年度からはイギリスの研修地をエディンバラからロンドンのウィンブルドンに変更。

予算の制約のため研修期間を短縮したり、研修地を変更したり、病気の流行、社会状況の変化、それに伴うレートの変動等、数々の難題を乗り越えながら、1985年から始まった海外研修は今日まで継続している。

3. 留学生の推移

宮城学院女子大学協定校への英文学科生派遣数

派遣先	NAU	HBC	QUT	CCM	U of L	U of W	英語圏以外		
年度	北アリゾナ	ハイデル バーグ	クイーンズ ランド	マンチェス ター	リーズ	ウィニペグ	忠南大学	高尾大学	
	アメリカ	アメリカ	オーストラ リア	イギリス	イギリス	カナダ	中国	台湾	
2007	2		1	2		4月協定 締結 2			
2008	1	2		1		1			
2009	2	2		1		3	1		
2010	2					2	2		
2011	1	1				1			
2012					8月協定 締結	1	1		
2013		1	1		1				
2014	1	1	2						
2015	1	1			1		1	1	
2016			1		2	1			
合計	10	8	5	4	4	11	5	1	合計48名 派遣

2007年度から2016年度までの10年間に、英文学科から合計48名の留学生を送り出している。ウィニペグ大学（カナダ）とは2006年12月に宮城学院にて提携協定を結び、2007年4月ウィニペグ大学にて署名、提携協定締結を完了。

また、2012年8月にリーズ大学（英国）と提携協定を結び、新たな留学先を確保している。

4. TOEIC600 点以上取得者推移

年度	TOEIC600 点以上人数								合計	最高点	備考
	前期実施				後期実施						
	600～	730～	860～	計	600～	730～	860～	計			
2007	6	3	1	9人	14	6	2	22人	31人	935	
2008	11			11人	10	3		13人	24人	780	
2009	5	2		7人	11	4	1	16人	23人	900	
2010	9	2		11人	9	2		11人	22人	750	
2011	2			2人	3	3	1	7人	9人	900	
2012	1	3		4人	4	5	2	11人	15人	885	
2013	4			4人	8	1		9人	13人	775	
2014	3	2		5人	7	5		12人	17人	835	
2015			—		14	3		17人	17人	825	2015年度より 年1回実施
2016			—		22	3		25人	25人	855	

TOEICスコアはListeningセクション495点、Readingセクション495点の990点満点で評価する。自己学習によりTOEICのスコアが、600点、730点、860点を満たした場合、各4単位を認定する(合計12単位)。2016年度入学生からは600点、720点、830点に変更。

5. ESL 利用者数

年度	ESL 参加回数			備考
	前期	後期	計	
2010	77	97	174	
2011	197	206	403	
2012	441	382	823	
2013	364	379	743	
2014	364	369	733	
2015	417	381	798	
2016	489	288	777	2016年12月22日現在
合計	2349	2102	4451	

ESL (English Speaking Lounge) では、英語圏のネイティブ・スピーカーに1対1で英会話レッスンを受けることが出来る。予約制で英文学科生なら誰でも参加できる。事前に1人15分枠の予約表に記入して申し込み、学生が用意した話題 (topic) を基に英会話を行う。2010年度開設当初は週2日程であったが、今では担当者を増員して週5日対応できるようにしてきたので、アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリア等、学生はいろいろな国の先生と会話出来るようになった。

6. キッズえいごに参加した小学生数

キッズえいご小学生参加人数					
年度	1・2年	3・4年	5・6年	計	備考
2008	8	8	9	25	
2009	8	8	10	26	
2010	16	8	8	32	
2011	8	7	4	19	
2012	10	5	5	20	
2013	11	7	2	20	
2014	17	1	—	18	2014年度より1・2年生、3・4年生クラスに移行
2015	14	—	—	14	2015年度より1・2年生クラスのみに移行
2016	14	—	—	14	
合計	106	44	38	188	

「キッズえいご」では、本学の John Wiltshier 教授の指導の下、前期に「児童英語教育」の授業で学んだ英文学科学生が、講義で得た知識を基に、後期に地域の小学生を対象に英語教育のノウハウを実習する。英文学科図書室で、絵本やおもちゃでいっしょに遊んだり、学生お手製のカードでゲームをしたり、またハロウィーンやクリスマス等、楽しい行事も毎年行っている。2008年度当初は1年生—6年生までの小学生を対象に4時からと5時からの2回に分けて4グループを開講していたが、希望者が多すぎてそれでも参加できない児童が多かった。現在は開設クラスを絞って小学1・2年生のみの2グループとし、少人数のクラスで一人一人の児童と向き合うことが可能となっている。

英文学科関連年表 2007年4月—2016年3月

- 英文学科関係年表 2007年4月—2016年3月
- 2007年（平成19年） 2007年度入学者より定員100名
飯塚久栄氏に名誉教授称号を授与
カナダ ウィニペグ大学（U of W）と提携協定締結
- 2008年（平成20年） 子供英会話実践講座開設 以降毎年
話し方講座開設 以降毎年
エアライン講座開設 以降2015年まで毎年
- 2009年（平成21年） 両角千江子氏に名誉教授称号を授与
BAT（Basic Achievement Test）実施、2011年より
AT（Achievement Test）に改称、2015年よりGT
（Grammar Test）に改称 以降毎年
- 2010年（平成22年） 2010年度入学者より定員90名
カリキュラム改訂
ESL（English Speaking Lounge）開設 以降毎年
2011年3月11日 東日本大震災
- 2011年（平成23年） 1ヶ月遅れで5月授業開始
半年遅れの卒業式
- 2012年（平成24年） 英国 リーズ大学（U of L）と提携協定締結
- 2016年（平成28年） 学部改組 4学部9学科へ移行
学芸学部英文学科 2016年度入学者より定員70名
カリキュラム改訂
British Hills へ国内研修 以降毎年

英文学科教員 2007年—2016年

専任

両角千江子	(1973年4月)～2009年3月
遊佐典昭	(1985年4月)～
イレーヌ・ギルモア (Elaine Gilmour)	(1989年4月)～2010年3月
デヴィッド・ギルビー (David Gilbey)	(1996年4月～1997年3月、 2000年4月～2001年3月) 2007年4月～2008年3月
クリス・ヒューストン (Chris Huston)	(1997年4月)～2011年4月
バーバラ・バーク (Barbara Bourke)	(1998年4月～2000年1月) 2009年4月～2012年3月
吉村典子	(2002年4月)～
ジェラルド・ラッシュ (Gerald Lassche)	(2005年4月)～2009年3月
木口寛久	(2006年4月)～2016年3月 (2016年4月～ 一般教科へ異動)
増富和浩	2009年4月～2011年3月 2016年4月～(一般教科より異動)
鈴木雅之	2009年10月～2014年3月 2014年4月～
ジョン・ウィルトシア (John Wiltshier)	2010年4月～
田島優子	2013年4月～
ジョアン・サトウ (Joanne Sato)	2014年4月～2016年3月
コーリー・コービー (Cory Koby)	2016年4月～

出向

新免貢	2009年4月～2011年3月 (一般教科より)
桂啓壯	2011年4月～2013年3月 (一般教科より)
小羽田誠治	2012年4月～2013年3月 (一般教科より)
近松健	2013年4月～2016年3月 (一般教科より)

制度改革

学部改組と新学芸学部の説明

宮城学院女子大学は本年で創立 130 周年を迎えました。本学は、学芸学部 1 学部内に多種多様な 10 学科を備えていましたが、2016 年 4 月からは現代ビジネス学部、教育学部、生活科学部、学芸学部の 4 学部 9 学科体制となりました。英文学科は、日本文学科、人間文化学科、心理行動科学科、音楽科とともに、学芸学部を構成します。新学部開設にともない、英文学科の入学定員は 1 学年 70 名に変更しました。

学芸学部は、各学科の専門知識を学ぶと同時に、幅広い教養を身につけ、現代が直面する多様な問題を解決し、自分を表現し、地域社会および国際社会に貢献できる学生を育成することを目標とします。教科書に書かれたことを学ぶことで知識を得るだけでなく、自分で考える習慣を養うことで得られた知識が自分のものとなります。このように得られた知識を基盤として、新しい自分を創造し、大きく成長することを可能にするのが、学芸学部です。

(英文学科教授 遊佐典昭)

新カリキュラムについて

英文学科では、2016 年度以降の入学者を対象として、新カリキュラムを導入しました。本学科では、「英語基礎科目」を主に 1-2 年次に履修し、3 年次に「英語学コース」と「英米文学・文化コース」のどちらかを選択して専門の学習へと移行するという形式をとってきましたが、今回の改訂においては、このカリキュラム構成を踏襲した上で、あらたに「English Learner から English User へ」というスローガンを掲げて、以下の点の強化をはかりました。

まず、英語の 4 技能を鍛える「英語基礎科目」については、開講時期が

1、2年次に集中していたため、4年間の段階性と継続性の強化を目的として「Academic Reading」や「Academic Writing & Presentation」といった科目を新たに3年次に加えました。これらの科目は、その内容が専門科目と連携するものでもあり、専門的な領域での英語運用能力向上をめざす仕組みにしました。

専門の「英語学コース」と「英米文学・文化コース」については、これまで3、4年次に開講されてきた科目を2、3年次に移行するなどして、専門領域での知識、分析力、思考力が段階的に高められる科目配置にしました。これに加えて、学生それぞれが関心を持つテーマについて主体的に研究を行い、個別指導で個人々の能力を伸ばし、4年間の集大成をまとめられるようにとのねらいから、4年次の卒業論文を必修化しました。

また、学生の主体性を養うことのできるような英語に関する課外活動を奨励するため、海外留学やボランティア活動等に対して単位認定する「ERA (English Related Activity)」や、英語の運用能力を測る外部試験の結果を評価、認定する「English Certification」を新たに設置しました。後者については、単位認定のための学科独自の換算表を作成しました。

(英文学科准教授 田島優子・教授 吉村典子)

	1年次	2年次	3年次	4年次
カリキュラムの流れ	基礎科目を中心に学び、英語の「話す・聞く・読む・書く」の4技能を効果的に身につけます。	応用科目や海外に行くチャンスが増えます。	コースを選択し、ゼミに所属。専門性を高めます。	英語表現力を伸ばすと同時に、ゼミで深めた専門性を、卒業論文に結びつけていきます。
英語学コース	ことばと人間 1・2	英語音声学 1・2 生成文法 1・2 英語の歴史 I・II 心理言語学 1・2 英語教育(TESOL) 1・2	日英語対照研究 1・2 語用論 コーパス言語学 英語学研究セミナー I・II 社会言語学 1・2 外国語としての日本語 1・2 生成文法 3・4 英語教材研究 英語学基礎セミナー I・II	
英米文学・文化コース	イギリスの生活と文化 1・2 アメリカの生活と文化 1・2	文化交差論 1・2 英米文学講読(詩・演劇) 1・2 英米文学講読(小説・批評) 1・2 イギリス文化史 1・2 アメリカ文化史 1・2 英米文学の世界(15～18世紀) 1・2 英米文学の世界(19～21世紀) 1・2	文化研究(オーストラリア・カナダ) 1・2 英米マスメディア論 1・2 イギリス文学史 I・II アメリカ文学史 I・II 英米文学・文化研究セミナー I・II	
英語基礎科目	Reading Activity 1・2 Writing 1・2 Listening & Vocabulary 1・2 Speaking 1・2 Grammar 1・2 Intensive Reading 1・2	Reading Activity 3・4 Writing 3・4 Listening & Vocabulary 3・4 Speaking 3・4 Grammar 3・4 Intensive Reading 3・4 Overseas Study Preparation	英米文学・文化基礎セミナー I・II Academic Reading 1・2 Academic Writing & Presentation 1・2 Discussion Seminar 1・2	
キャリア科目	English Certification A・B・C ERA (English Related-Activity) I・II			
卒業研究	キャリアデザイン			卒業研究セミナー I・II 卒業論文

2016 年度 論文



蒐集・分類された巡礼たち
— 《チョーサーのカンタベリーへの巡礼者》を読む*

鈴木 雅之

ウィリアム・ブレイク (William Blake, 1757-1827) による個展カタログ (1809) の正式な題名は、『個展作品解説目録、ウィリアム・ブレイクによる創造的に選択された詩的および歴史的主題を描いた絵、水彩——古代のフレスコ画の手法が復活されたもの——による絵、および線描画、これらは公衆による検分に供し、個々の契約により売却に供する』(以下『解説目録』)である。『解説目録』¹の内容構成は、カタログ形式に従い、展示作品の売買条件を記した「売却の条件」に「序文」が続く。「カタログ索引」には展示された1番から16番までの作品名が並ぶ。

『解説目録』本文は、16点(すでにあったものを含めて9点のテンペラ画²と7点の水彩画)の展示作品についての長短入り交じった作品解説もしくは作品描写である。16点の作品は主として、ブレイクの主張に従えば「創造的に選択された詩的および歴史的主題」に基づく歴史画を意図したもの

* 本稿は第41回イギリス・ロマン派学会(2015年10月18日、奈良教育大学)での講演「て一ぶるとーく」に基づく。なお本稿は「ブレイクの『システム』考——『個展作品解説目録』(1809)を中心に」(『イギリス・ロマン派研究』第41号、イギリス・ロマン派学会、2017年3月刊行予定)と一部重複する。

¹ *A Descriptive Catalogue of Pictures, Poetical and Historical Inventions, Painted by William Blake, in Water Colours, Being the Ancient Method of Fresco Painting Restored: and Drawings, for Public Inspection, and for Sale by Private Contact.* London: Printed by D. N. Shury, 7, Berwick-Street, Soho, for J. BLAKE, 28, Broad-Street, Golden-Square. 1809 (E529). 以下 Blake からの引用はすべて *The Complete Poetry and Prose of William Blake*, ed. David V. Erdman with Commentary by Harold Bloom (1965; Berkeley: U of California P, 1982) に依り E と頁数で示す。

² Blake がフレスコ画と呼ぶものは油彩ではなく水彩やテンペラを用いた作品のことであろう。Viscomi, *Blake* 386n2; 潮江 204-05 頁。

であった。このことは、ブレイクが敬愛してやまない、アイルランド出身の歴史画家ジェームズ・バリー (James Barry, 1741-1806) が、工芸・製造業・商業振興協会のグレート・ルームの壁に描いた大作6点の解説、『アデルファイにある工芸・製造業・商業振興協会のグレートルームに描いた一連の絵画のための作品解説』(An Account of a Series of Pictures, 1783)³のなかで、「これらの作品のうち3点は詩的主題、他の3点は歴史的テーマである」(“three of these subjects are poetical, and the others historical”. Works II : 323) と述べていることに呼応するだろう。当時の英国画壇にあっては、肖像画が主流であり風景画派も勃興しつつあった。これに対して新古典主義の歴史画派はすでに時代遅れになりかけていた(潮江 175 頁)。ジョシュア・レノルズ (Sir Joshua Reynolds, 1723-92) なども歴史画の題材は詩的かつ歴史的であるべきだと述べており、ブレイクはそのような当時の歴史画観を反映させているわけだが、ことさらバリーを「歴史的・詩的芸術家」(“Historical & Poetical Artists”. Works II : 323) の一人と呼んでいるところに、ブレイクのバリーへの強いこだわりと『解説目録』へのバリーの影響を読み取ることができる。

以下の論考において、個展最大の作品のひとつであるジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer, 1340?-1400) の『カンタベリー物語』(The Canterbury Tales, c1387-1400) 「総序の歌」(“General Prologue”) への挿絵とその作品解説の双方を、巡礼の配置・位置関係にとくに注意を払いつつ詳細に読み解くことによって、ブレイクによるチョーサー理解と巡礼の分類の意図を探る。そしてその分類に際してブレイクが依拠したであろうシステムが何であったかを探り、それが果たしてブレイクにとって適切な選択で

³ An Account of the Series of Pictures, in the Great Room of the Society of Arts, Manufactures, and Commerce, at the Adelphi (London: T. Cadell and AJ. Walter, 1783). 本論でのこの作品からの引用は The Works of James Barry, ed. Edward Fryer. 2 vols. (London: T. Cadell and W. Davies, 1809) による。

あったのかを明らかにしたい。

I 個展と歴史画

歴史画の扱う対象は「聖書、叙事詩、古典古代の歴史、神話」であるとされる (Pressly 5)。しかしブレイクの歴史画観は必ずしもこれに同意しない。当時、歴史画の革命が、ベンジャミン・ウェスト (Benjamin West, 1738-1820) の《ウルフ将軍の死》(*The Death of General Wolf*, 1771; 図 1) によってもたらされたことを念頭に置く必要がある。この絵画作品は、カナダのケベックに駐屯するイギリス軍の若き総司令官ジェイムズ・ウルフ (James Wolf, 1727-59) が、戦場で苦痛に悶えつつ息を引き取った場面を描いたものである。臨終のウルフ将軍を囲む士官たちは、実際には彼の側にはいなかったし、画面左下で将軍を見つめるインディアン兵も敵陣にいたはずである。しかしこの作り話のなかで 1 点だけ真実が描かれていると、歴史学者リンダ・コリー (Linda Colley) は言う——「登場人物たちは、時代を超越した軍服や騎士風の甲冑のかわりに、同時代のイギリス軍の軍服を身につけている……ウェストは、犠牲や英雄といった古典風、または聖書風のポーズを、同時代のイギリスにそのまま置き換えた」(Colley 193)⁴。

エドガー・ヴァイント (Edgar Wind) の名論文「歴史画の革命」(“The Revolution of History Painting”)によれば、ウェスト作品は、ほんの 12 年前の出来事——1759 年にケベックという異境の地で起こった出来事 (*mirabilia*) ——を、時代を超越した服装ではなく「現代人」の服装 (軍服) を着せたまま描くことで歴史画の古典的規則を破った (Wind 119)⁵。

⁴ 訳文は川北稔監訳『イギリス国民の誕生』(名古屋大学出版局、2000) 188 頁を借用した。

⁵ Barry, *The Death of General Wolfe* (1776) は West 作品の影響を受けた。他に George Romney (1734-1802) は 1763 年、Edward Penny (1714-1791) は 1764 年にそれぞれ同じ主題で描いている。



図1 ベンジャミン・ウェスト《ウルフ特軍の死》, 1771. 152.6 × 214.5cm.
カナダ・ナショナル・ギャラリー, オタワ.

ウェスト同様、アメリカはボストン生まれの画家ジョン・シングルトン・コプリー (John Singleton Copley, 1738-1815、1775以降ロンドン在住) もまた、上院でアメリカ独立戦争を巡る議論の最中に死亡した初代チャタム伯ウィリアム・ピット (William Pitt, 1708-78) を描いた《チャタムの死》(*The Collapse of the Earl of Chatam in the House of Lords*, 1778) によって歴史画に革命をもたらしたという。コプリーは、歴史画の荘重体に集団肖像画の方法を取り入れたのである (Wind 120)。つまり群像画は容易に歴史画になった⁶。「コプリーの歴史画は、レノルズの肖像画よりもはるかに野心的であった」とヴィントは言う (Wind 120)。異境の地で起こった出来事 (*mirabilia*) を記録することと家族団欒の群像画であること——これらふたつの要素が、新しいタイプの歴史画の特徴として加わったことになる。

果たして「カンタベリー参り」をウェストのいう *mirabilia* のひとつと見なすことに異論があるかも知れない。しかしながら、戦場ならぬカンタベリーのトマス・ア・ベケット (Thomas à Becket, 1118?-70) の聖堂とい

⁶ 肖像画を限りなく歴史画に近づける試みは Reynolds にもある。Barry は歴史画家とは最高の肖像画家のことでありと述べている。Pressly 68 参照。

う聖なる空間への移動と考えれば、「カンタベリー参り」を *mirabilia* のひとつと見なすことはおかしいことではない。その意味で、「詩的および歴史的主題」に基づく、30名の巡礼からなる家族的集団肖像画としての1809年個展作品《サー・ジェフリー・チョーサーと29人の巡礼者のカンタベリーへの旅》(*Sir Jeffrey Chaucer and the Nine and Twenty Pilgrims on their Journey to Canterbury*) (以下《チョーサーのカンタベリーへの巡礼者》図2 [銅版画]) には、十分に歴史画の資格があると言えよう。実際ブレイク自身「第二趣意書」のなかで、《チョーサーのカンタベリーへの巡礼者》を「馬上の全身群像肖像画」(“whole Length Portraits on Horseback”, E568) と呼んでもいる。

チョーサーのカンタベリーへの巡礼者一行を描いたのは、ブレイクが最初ではない⁷。ジョン・アーリィ (John Urry, 1666-1715) の編纂になる『ジェフリー・チョーサー作品集』(*The Works of Geoffrey Chaucer*. London, 1721) の冒頭には、サザックの陣羽織館を馬に乗った巡礼者たち一行が、画面右手東の方向に進む光景が描かれている。ただしかなり離れた場所から巡礼を描いているため、個々の巡礼の顔や姿の細部はよく分からない。巡礼者全員の馬上の姿を描いたものとしては、ブレイクのライヴァルであったトマス・ストザード (Thomas Stothard, 1755-1834) の《カンタベリーへの巡礼》(*The Pilgrimage to Canterbury*, 1807; 図3) と本稿で取り上げるブレイク作品をもって嚆矢とするだろう。

⁷ 315年にわたる巡礼者の挿絵の伝統については、Betsy Bowden, “Visual Portraits of the Canterbury Pilgrims 1484 (?) -1809”, *The Ellesmere Chaucer: Essays in Interpretation*, ed. Martin Steens & Daniel Woodward (San Marino, California and Tokyo: Huntington Library and Yushodo, 1997) 171-204. 当時の英国におけるChaucer評価についてはCaroline F. E. Spurgeon, ed., *Five Hundred Years of Chaucer Criticism and Allusion 1357-1900*, Vol. 1 (New York: Russell & Russell, 1960) “Introduction”, esp. liv-lxxii 参照。

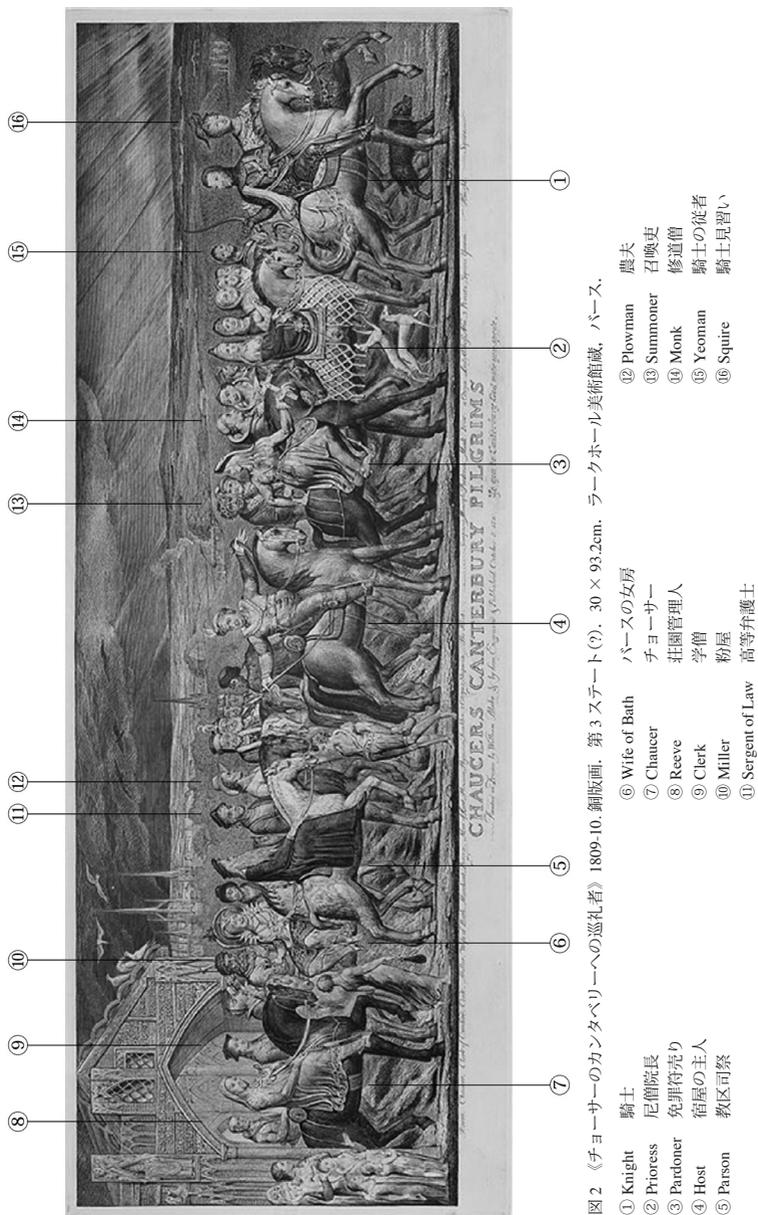


図2 《チョーサーのカンタベリーへの巡礼者》1809-10. 銅版画. 第3ステート(?). 30 × 93.2cm. ラークホール美術館蔵. パース.

- | | | | | | |
|------------|-------|-------------------|--------|------------|-------|
| ① Knight | 騎士 | ⑥ Wife of Bath | バースの女房 | ⑫ Plowman | 農夫 |
| ② Priores | 尼僧院長 | ⑦ Chaucer | チョーサー | ⑬ Summoner | 召喚吏 |
| ③ Pardoner | 免罪符売り | ⑧ Reeve | 荘園管理人 | ⑭ Monk | 修道僧 |
| ④ Host | 宿屋の主人 | ⑨ Clerk | 字僧 | ⑮ Yeoman | 騎士の従者 |
| ⑤ Parson | 教区司祭 | ⑩ Miller | 粉屋 | ⑯ Squire | 騎士見習い |
| | | ⑪ Sergeant of Law | 高等弁護士 | | |



図3 トマス・ストザード《カンタベリーへの巡礼》, ルイ・スキャヴォネッティ/ジェイムズ・ヒース刻, 1807-17. 26.9 × 95.8cm. テイト・ブリテン, ロンドン.

II 《チョーサーのカンタベリーへの巡礼者》——蒐集と分類

《チョーサーのカンタベリーへの巡礼者》が、1809年個展の目玉作品のひとつであったことは、この作品の詳しい解説が『解説目録』の半分近い28頁を占めていることから明らかだろう⁸。『解説目録』の他に「展覧会の広告類と目録」(1809, E526-28)や「ブレイクのチョーサーの趣意書」(第一趣意書、第二趣意書)(1809-10, E567)そして「公衆への訴え」(*Public Address*, 1809-10, E571-82)と、実に何種類もの宣伝パンフレットがあることから、この作品にかかるブレイクの意気込みは自ずと明らかだ。

ブレイクによる《チョーサーのカンタベリーへの巡礼者》の「解説」は、出立の朝の描写で始まる——「選ばれた時間は早朝、日の出前、陽気な一団は、丁度陣羽織館(Tabard Inn)を出ていくところである」。詩人チョーサーと29名合わせて30名の巡礼のおおよその構成を伝えたブレイクは続けて、「景観は、サザックの陣羽織館から東の方へ向かっての田舎家の眺めで、チョーサーの時代にそう見えただろうと考えてよいものである」(E532)と書く。画面右手、地平線の彼方からは朝日の光線が放射状に描

⁸ Charles Lamb (1775-1834) は書簡のなかで Blake の *Chaucer's Canterbury Pilgrim* 解説は "a most spirited criticism on Chaucer, but mystical and full of Vision" (1810/1824) と書く。Henry Crabb Robinson, *Diary Reminiscences and Correspondence of Henry Crabb Robinson*, 3 vols., 1869. Vol. II, p. 380, in Spurgeon, Vol. II, 49.

かれ、今まさに陽が昇る瞬間である。左手には陣羽織館のゴシック風玄関が描かれている。玄関に刻まれた文字は、この絵画作品（テンペラ画にせよ銅版画にせよ）の観者／読者には判読できないが、ブレイクは「陣羽織館、ヘンリー・ベイリー（Henry Baillie）の経営、カンタベリーの聖トマスの聖堂に旅する巡礼者の宿」と刻まれてあると説明する。陣羽織館の玄関は、右手にランプを持つロス（Los）がまさに踏みこもうとする『エルサレム』（*Jerusalem*, 1804）の口絵にも、また《死の扉》（“Death’s Door”, 1808）にも似ている。ここにブレイク神話を読み込み過ぎると思われる研究者たちは、巡礼たちを「西」に向かって進んでいると解釈する。しかし素直にこの絵を見れば、巡礼者たちは、ブレイク自身も明確に表現しているように東の方向を目指して進んでいるように思われる。

チョーサーの『カンタベリー物語』「総序」をテキストとする《チョーサーのカンタベリーへの巡礼者》において重要なのは、巡礼たちの配置・位置関係である。ブレイクは巡礼者たちの構成・順番を非常に重要視していたとして、カール・キラリス（Karl Kiralis）は、ブレイクがこの絵のなかでやろうとしたことは慎重に巡礼者たちを配列・配置することであったと指摘する（Kiralis 39-77）⁹。これは重要な指摘である。

「チョーサーのキャラクターはすべての時代に存在する永遠の原理のひとつの描写である」（“Chaucer’s characters are a description of the eternal Principles that exist in all ages”, E536）と語るブレイクは、基本的にはチョーサーに敬意を表しその意味するところを汲み取る。しかし巡礼者それぞれの解釈には、ブレイクの独自性が加えられグループ分けに反映される。ブレイクは先ず、詩人チョーサーを含めた30名の巡礼を2分する（“The Painter has also grouped…”, E533）。巡礼者の配置はチョーサーの記述に従っているわけではない。陣羽織館の主人を中心に¹⁰、右手に騎士（Knight）の息

⁹ 同じ主題による Stothard 作品の分類意識は極めて低い。

¹⁰ Blake が描く巡礼は Tabard Inn の主人 Henry Baillie が画面の中心に位置している。これは

子である騎士見習い (Squire) を先頭に騎士、騎士の従者 (Squire's Yeoman)、尼僧院長 (Prioress)、免罪符売り (Pardoner)、修道僧 (Monk)、托鉢僧 (Friar)、召喚吏 (Summoner) など 14 名の巡礼を、画面左手には、莊園管理人 (Reeve) を最後尾として、チョーサー、学僧 (Clerk)、料理人 (Cook)、粉屋 (Miller)、バースの女房 (Wife of Bath)、教区司祭 (Parson)、高等弁護士 (Sergeant of Law)、貿易商 (Merchant)、農夫 (Plowman)、医師 (Doctor of Physic) など 15 名の巡礼を配置する。2 つに分けた根拠をブレイクは、右手にいる「全員は人生の並みの身分以上であるかまたはそうであった人々の従者」であるからと言う (E533)。左手にいるのは下層階級の人たちであるとキラーリスも指摘する (141)。修道僧や尼僧院長を「第一級の身分」の人物とするのは、チョーサーがそのように描写しているからだとブレイクは付け加える (E533-34)。以上が左右ふたつにグループ分けした理由だ。

左右に分かれた巡礼たちは、さらに右は尼僧院長によって 2 分され、左はバースの女房によっても 2 分される。次に右半分の巡礼は、尼僧院長を挟んでその前後に「時代のならずもの」(E535) 免罪符売りと「真の英雄」騎士の 3 人がひとつのグループを形成し、左半分も画面手前のバースの女房を挟んで教区司祭と詩人チョーサーが、3 人一組のグループをなしているともみやすことも可能だ。

もうひとつの 3 人組は、高等弁護士と教区司祭とその弟 (ブレイクの自画像にそっくりの) 農夫である¹¹。これら 3 人をひとつのグループと見な

Blake 独自の解釈である。Blake の巡礼図を曼荼羅にたとえるなら中央にいる磔刑のキリストの姿に似た宿屋の主人は大日如来ということになる。曼荼羅もおそらく巡礼図も対称性の関係に基づく配置図である。巡礼図を二次元的平面図に納められた静的なものか、それとも主人を軸にした複雑な運動体と読みぬくかは観者の力量にかかっているのかも知れない。

¹¹ 梶井迪夫は農夫について次のように書く——「かれ (農夫) は兄の司祭 [教区司祭] と同じく、まず第一に全身全霊を以て神を愛し、つぎに隣人を愛するキリスト教徒。司祭が精神的な仕事に励むのにたいし、農夫は肉体的な仕事に精を出す……この農夫はまたチョーサーのえがいた

す理由としてブレイクは、チョーサーの高等弁護士は「時代の真の法律の大家」(E535)とみなされているので、教区司祭も農夫も法律家の助言を聞くことが望ましいと考えるからだと答える(E535)。さらに巡礼者一行の先頭3名——真の英雄で、立派で偉大で賢明な人物そして人々を抑圧者から護る人物(E533)としての騎士と騎士見習いとその騎士の従者——もその配置具合から3人ひとまとまりとみなすことができよう。こうしてみると、ブレイクの描く巡礼たちは、それぞれがなんらかの意味で3人グループを構成しているとみなし得る。

その一方でブレイクは、巡礼たちに様々なペアを組ませる。「総序の歌」冒頭でチョーサーは、巡礼者たちを「様々な身分の人たちが仲間となった」(24-25)¹²と書くが、「わたしの物語では、人々をその身分つまり本来の地位に応じては、配列していないのです」(744-45)と言うように、彼らは社会的階級等の違いを超えて呼応し合う。ペアは固定したものではなく、それぞれが他の巡礼とも別なペアを組むなどきわめて流動的である。どのような意図でペア(対立・対照・コントラスト)をなすのか、こういったことをブレイクは、言語的にも視覚的にもつまり解説の中でもまた絵画作品の中でも明らかにしようと試みている(ように見える)が、果たしてそれがどこまで成功したかは問題が残る。

例えば、右半分の巡礼者の前から2番目の騎士と左半分の巡礼者の最後から2番目の詩人=チョーサーがなすコントラストに注目してみたい。騎士と詩人チョーサーがコントラストをなす理由は、騎士は武力を行使し実利を求めるが、詩人チョーサーは「人間に関する偉大な詩的観察者」とし

最も理想的な抽象的人物像である。農夫は、チョーサーの描く人間の労働の象徴みたいな存在となる。彼は前に登場した修道僧や托鉢僧、後にくる召喚吏や免罪符売りと皮肉な対象をなす」(『完訳カンタベリー物語(上)』[1995; 岩波文庫、1999] 276頁注43)。以後訳文は本訳書による。

¹² Chaucer からの引用は Larry D. Benson, ed., *The Riverside Chaucer*, 3rd ed. (Boston: Houghton Mifflin, 1987) に依る。

て力を行使することはないところにある。騎士は、チョーサーによれば、「初陣の時以来、騎士道を学び」「忠義と名誉、寛大と礼節」の徳目を実践した「立派な人物」(43)である。これを受けてブレイクも騎士を「真の英雄、立派で、偉大で、賢明な人物」(E533)と讃える。しかしながら、騎士は「いつの時代にあっても、抑圧者から人々を守る守護者というキャラクターである」(E533)と描写することからも明らかなように、ブレイクは、いつのまにか騎士を一挙に守護者という原型(アーキタイプ)に仕上げてしまう。これに対応する詩人=チョーサーをブレイクは、「あらゆる時代にその時代の所業を記録しそして永遠化する」(E534)人物であると描写する。騎士と詩人はともに、時代を超えて人々を守り続ける存在であるというのがブレイク理解である。以上が、ブレイクによる騎士と詩人=チョーサーが対称性の関係を保つ根拠となる。

その他のペアとしてはチョーサーと学僧がある。「学僧は成熟した詩人(チョーサー)の監督のもとにある」という意味でペアをなす(Kiralis 143)。ブレイクは、チョーサーの脇にオックスンフォード(オックスフォード)の学僧を置く理由を次のように書く。

彼(学僧)の個性=キャラクター(character)は、チョーサーのそれとは異なって(varies)いる。ちょうど黙想的哲学者が詩的天才とは異なるように。つねにこれらふたつの種類(classes)の賢人つまり詩的な(賢人)と哲学的な(賢人)がいる。画家(ブレイク)は、彼らを並べて置いてみた。あたかも若き学僧が成熟した詩人の指導下にあるかのように。哲学者をつねに靈感の僕にして靈感を学ぶ者たらしめよ、そうすればすべてが幸せとなる。(E537)

ブレイクからの引用には、‘character’(特徴)、『varies』(変異する)、『classes』

(綱)など、後述する博物学(植物学)の用語が多用されていることに注目を喚起しておきたい¹³。

ペアに関してとくに注目すべきは、農夫と粉屋である。ブレイクは、粉屋を農夫の「幻霊 (spectre)」「影 (shadow)」であるとブレイク神話の用語を用いて解釈する (E536)。ブレイクによれば農夫の幻霊は、「あらゆる近隣を獣的な力と勇気で驚愕させ、人間の誇りに轡をはめるために富裕にかつ強力になろうとする恐ろしい男である」という否定的な働きをする存在である。農夫がブレイクの自画像なら、粉屋はさしずめここではストザードに匹敵しよう (Kiralis 147)¹⁴。ストザードは、ブレイクの《チョーサーのカンタベリーへの巡礼者》のデザインを盗み自らの霊的なものを抑圧し世間的成功と評判のみを求め、隣人たるブレイクを苦しめ自分だけが裕福になろうとした人物であった——そう考えると、粉屋=ストザードと考えてもおかしくはない。それにしてもしかし、なぜどうして粉屋を農夫の「幻霊」と分類できるのか、『解説目録』だけからはその根拠は余りよく見えてこない。

チョーサーは女性を二つの種類 (classes) つまり尼僧院長とバースの女房とに分けた (E537)。「この女性たちは男の時代のリーダーではないだろうか」(E537) とブレイクは言う。バースの女房は、ワイングラスを右手にすっかりリラックスしている。ローマ教皇の三重冠に似た帽子をかぶ

¹³ Blake は Chaucer の人物たちをギリシャ神話上の人物名で呼ぶこともある—— Franklin を Bacchus、Doctor of Physic を Esculapius、Host を Silenus という風に。Plowman は Hercules であり Chaucer はこの人物を Miller と Plowman とに分けたと Blake は解釈する (E536)。

¹⁴ “General Prologue” 挿絵の構図をめぐる Blake と Stothard の争いについてはこれまで多くの論文が書かれてきた。Dennis M. Read が自身の関連論文をひとつにまとめた、*R. H. Cromek, Engraver, Editor, and Entrepreneur* (Surrey, England: Ashgate, 2011) や Betsy Bowden, “Transportation to Canterbury: The Rival Envisionings by Stothard and Blake”, *Studies in Medievalism* XI (2001) : 73-101; G. E. Bentley, Jr., “They take great liberty’s: Blake Reconfigured by Cromek and Modern Critics—The Arguments from Silence,” *SiR* 30 (Winter 1991) : 657-84 は必須文献。

り、胸もはだけた姿と広い額は性的欲望の激しさを現す (Kiralis 148)。
チョーサーによれば「(彼女は) 教会の入り口のところで五人の夫を迎え
ました」(460)。腕も露わに(中世では禁じられている)馬上の彼女の両
足は右側に垂れており、これは女性の作法としてはあるまじきこと。ワイ
ンの杯を持つパースの女房は、ブレイク神話のラハブ (Rahab)、バビロ
ンの娼婦 (Whore of Babylon) あるいは「女性の意思」(Female Will) を想
起させよう。一方、尼僧院長は、馬の左側に両足を垂らしている(これは
正しい女性の馬上の姿勢)。手綱にはほとんど触れないが、馬は従順そう
な様子である。チョーサーによれば「彼女はそれはそれは慈悲深く、憐れ
み深い方でした」(143)。

Ⅲ ブレイクによる分類の基準は何か？

上述したブレイク独自の解釈に基づく解説と分類が、描かれた巡礼者の
人相に反映されることになる。しかし二分法であれ2人もしくは3人のグ
ループ分けであれ、その分類の基準がいまひとつ判然としない。巡礼たち
は、直線的な因果関係でつながっているのではなく、何か非因果的なつな
がりを通して結ばれ配置されているように見える。おそらくブレイクは、
30名の巡礼をそういった顕在化されていない関係で結ぶことによって、
より深いレベルでの動的な秩序を描こうとしているのかも知れない。こ
のような分類と配置にブレイクは何らかの意図を込めようとしているので
あり、おそらくそこにブレイクの独自性が見出されるべきなのだろう。

このようなブレイクのカテゴリ学的発想の原点は、一体、どこにあるのだろ
う。そのヒントのひとつが、ブレイクが力を込めて語るチョーサーの巡礼
たちの「性格」(character) とは何かという一節にある。

チョーサーの巡礼たちの性格はすべての時代と国民とを構成す
る性格である。ひとつの時代が衰えるにつれて、もうひとつの時

代が現れる。死すべき者の目には違って見えても、不死なる者たちの目には単に同じこと（と映る）。というのも我々は、同じ性格が繰り返し繰り返し反復されるのを見るからだ。動物、植物、鉱物において、そして人間においても、何らの新しいこともその固有の存在においては起こらない。偶然は絶えず変化するが、実体は決して変化も衰退もしない。

カンタベリー物語のなかでチョーサーが描いた性格のうち、名前または称号のあるものは時によって変えられるが、性格そのものは永久に変えられないで残る。それゆえにそれらの性格（人物像）は、普遍的人間生命/生存の人相または容貌であり、それを自然が踏み越えることは決してない。名前は変わるが、事は決して変わらない……ニュートンが星を数えたように、またリンネが植物を数えたように、そのようにチョーサーは人間の種類を数えたのである¹⁵。

(E532-33、下線筆者)

引用の最後でブレイクは、「ニュートンが星を数えたようにまたリンネが植物を数えたように、そのようにチョーサーは人間の種類を数えた」と書いている。「ニュートンが星を数えた」と言うときブレイクの念頭にあったのは、おそらく「恒星の目録・カタログ」(Chambers 170)であろう。「リンネが植物を数えたように」とあるのは、リンネの植物分類体系を念頭に置いた発言である。リンネは、1735年に出版の処女作といって良い『自然の体系』(*Systema Naturae*, 1735)の中で、自然の三界、すなわち動物界・植物界・鉱物界の体系化を試みた。その中でリンネは、当時行われていた自然物に関する分類方法あるいは体系のなかでもっともまとまりが悪く定

¹⁵ 訳文は梅津濟美訳『ブレイク全著作』第2巻（名古屋大学出版会、1989）に基づき適宜変更を加えた。『会報』とも一部訳語が異なる。

説というべきものがなかった植物について、植物の生殖器官にもとづく〈性の体系〉思想を中心に据えた植物界の体系化に成功した。さらに 1753 年刊行の『植物の種』(*Species Plantarum*, 1753) の中でリンネは、植物の二名式命名法 (binary nomenclature) を全面的に導入した。エラズマス・ダーウィン (Erasmus Darwin, 1731-1802) に挿絵 (*The Botanic Garden*, 1791) を付したブレイクであれば、リンネ的植物学に接する機会は十分にあったろう。

ブレイクは、チョーサーをニュートンやとくに植物を数えたリンネと並列して「チョーサーは人間の classes(種類)を数えた」人物と呼ぶ。“claseses”は植物学で「綱」を意味する。上記引用箇所が続けてブレイクは、“species”(種, E533) や “varieties”(変種, E533) といった植物学的分類用語を鍵語として「性格」論を展開していることに改めて注意したい。つまりブレイクは、チョーサーの人間(キャラクター)の認識の方法には、リンネ的植物学的分類思考との近似性あるいは共振関係があると見て取ったのである。チョーサーをニュートンと並列するということは、ニュートンを「一重のヴィジョン」(“Single vision”)の人物と考えるブレイクを念頭におくなら、ブレイクは必ずしもチョーサーの中に何か革新的で救済的な力を見ていたわけではなかったことを暗示する。

ブレイクによるチョーサー理解には、ジョン・ドライデン (John Dryden, 1631-1700) の影響が実は大きいこともまた指摘しておかねばならない。『古代と現代の寓話』(*Fables Ancient and Modern*, 1700) の「序文」のなかでドライデンは、「チョーサーは『カンタベリー物語』の世界のなかに彼の時代に見られる英国民の多様な風俗と気質(我々が今日そう呼ぶような)のすべてを取り入れた」とか「チョーサーの『カンタベリー物語』に登場する人物はすべて、彼等の顔の表情 (physiognomies) と姿そのものについても明確に描き分けられている」(Dryden 1455) と言う¹⁶。「チョー

¹⁶ Bowden によれば、Dryden 以前にも George Ogle (1739) や Sir John Hawkins (1776) とも巡礼を人間の類型 (type) と捉えていたという。“The Artistic and Interpretive Context of Blake’s

サーはいたるところで自然に従ったが、自然を超えるような大胆なことは決してしなかった」(Dryden 1452)ともドライデンは書く。一方ブレイクはドライデンの言葉に多少のひねりを加え、先の引用でも見たとおり「チヨースーが描いた……性格そのものは永久に変えられないで残る。それゆえそれらの性格(人物像)は、普遍的人間生命/生存の人相または容貌であり、それを自然が踏み越えることは決してない」と書く。「彼の時代」と「永久に」という違いはあるにせよ、ブレイクとドライデン双方の分類思考/志向は明らかだろう。

ブレイクによれば30名の巡礼者群像は、蒐集された「人間キャラクターの完全な索引」(“a Complete Index of Human Characters”)いわば「キャラクター大全」である¹⁷。従って《チヨースーのカンタベリーへの巡礼者》の中には、「すべてのキャラクター=特徴」が蒐集され分類されていることになる¹⁸。

では、ブレイクやドライデンの分類基準になっている「キャラクター」とは何か。この問いには、少なくとも四つの視点から答えが用意できる。一つは博物学(植物学)であり二つには観相学、三つめが「キャラクター・ライティング」そして四つめの視点は、銅版画師としての根幹に関わる。

①ブレイクの分類学的思考に博物学(植物学)の影響が濃厚であることは、本論第Ⅱ章において指摘した通りである。コリン・ミルン(Colin Milne)は、キャラクター=特徴とは「リンネが名づけた植物の属(Genera)の描写のことである。植物の属的特徴と属の定義とは同義である」と解説

‘Canterbury Pilgrims’, *BIQ* 13.4 (Spring 1980): 164-77 esp. 165 参照。

¹⁷ “every one is an Antique Statue; the image of a class, and not of an imperfect individual” (E536) という表現にも古代彫刻のような一人ひとりの巡礼の姿(個別)がclass=綱(普遍)を代表するというブレイクの考えが反映されている。

¹⁸ Thomas Warton (1728-90) は、Dryden 同様、Chaucer の超時代性と無限の多様性を強調した。Blake の Chaucer 観も同工異曲である。William Godwin (1756-1836) も多様性を強調する。Spurgeon, ed., Vol. II, 8 参照。

する (Milne 19)。博物学が「キャラクター＝特徴」の指標としてとりあげるのは、植物の生殖器官、葉、茎、根、葉柄等である。つまりブレイク好みの言葉を使うなら、ブレイクはキャラクターの分類に植物学的分類用語を「応用・利用」(“applied”, E543) してみせたのである。

②二つめの観相学的観点からみたキャラクターとは何か¹⁹。先の引用のなかでブレイクは、「(チョーサーの) 性格 (キャラクター＝人物像)」を「普遍の人間生命 / 生存の人相または容貌」(“the physiognomies or lineaments of universal human life”) と書いた。ここでいう「普遍の人間生命 / 生存」が何を指すかは不明だが、おそらく「キリスト」か「アルビオン」のことも知れない。いずれにせよ、その「人相または容貌」がキャラクターであるとブレイクは言う。このようにブレイクの解説には、顔の表情から人間を「分類」し「蒐集」する観相学のキー・ワードのひとつ「人相」(physiognomy, lineaments) が頻出することは注目しておかねばならない。リンネの植物学以上に観相学は、《チョーサーのカンタベリーへの巡礼》解説の理論的背景をなしているのである。

スイスの神学者ヨハン・カスパー・ラヴァター (Johann Caspar Lavater, 1741-1801) の『観相学的断片』(*Physiognomische Fragmente*, 1775-78) が、ヨーロッパ文化に及ぼした影響は計り知れない²⁰。「顔は魂の鏡・神の似姿」

¹⁹ Blake と physiognomy に関する最近の研究としては Sibylle Erle, *Blake, Lavater and Physiognomy* (Oxford: Legenda, 2010). physiognomy と *ut pictura poesis* に関しては John Graham, “Contexts of Physiognomic Description: *Ut Pictura Poesis*”, *The Faces of Physiognomy: Interdisciplinary Approaches to Johann Caspar Lavater*, ed. Ellis Shookman (Canada: Camden House, 1993) 139-43. Lavater 受容に関しては John Graham, “Lavater’s Physiognomy in England”, *JHI* 22.4 (1961): 561-72.

²⁰ *Physiognomische Fragmente* は 1780 年代には 12 種類の英語版、5 つの異なった英訳が存在し 1810 年までに 20 の英語版が存在した。1787 年の早い時期にブレイクは Lavater の横顔を観相学風に描いた 1 点を残してもいる。Lavater 論としては John Graham, *Lavater’s Essays on Physiognomy: A Study in the History of Ideas* (Berne, Switzerland: Peter Lang, 1979); Ellis Shookman, ed., *The Faces of Physiognomy: Interdisciplinary Approaches to Johann Caspar Lavater* (Columbia: Camden House, 1993) 参照。

(“the human face, the mirror of the soul, the image of the Deity”, “Appendix” 489) であり、身体の「輪郭線」(“lines”) とくに「顔」の表情がその人物の情念の形態、彼もしくは彼女の「ひととなり」(“characters”) の判断基準となるというのが「観相学」の基本である (“Appendix” 482)。観相学は「魂の観相学」(Bindman 92) にして人間の顔の表情を「蒐集」し「分類」する学問であった。ブレイクは、おそらく観相学の学問に内在する「個別性」の原理とこの原理にもとづく「多様性」につよく惹かれたと思われる。

③これまでの『解説目録』研究においておそらく言及されたことのなかったものに、17世紀以来の「キャラクター文学」(“Character-Writing”. Greenough; Huntley; Smeed) の伝統がある。ブレイクの《チョーサーのカンタベリーへの巡礼》とその「解説」への重要な影響源としては、これまでほとんど注意が払われたことがなかったと思われる²¹。ブレイクが直接言及した形跡もなさそうである。キャラクター文学の伝統は、アリストテレスの愛弟子にして博物学者でもあったテオフラストス (Theophrastus, c. 372-c. 287 B. C.) の『人さまざま』(Characters, c. 319 B. C.) に遡る (Smeed; Boyce)。本論との関連でとくに興味深いことは、キャラクター文学は、観相学同様、姉妹芸術理論に基づいていることである。17世紀英国におけるキャラクター文学の立役者ともいべきジョウゼフ・ホール (Joseph Hall, 1574-1656) は、キャラクターズを「物言う絵」「肖像画」「すべての美德と悪徳の本当の姿」と呼ぶ (Hall 143-44; Huntley)。「本当の姿」の「姿」(“lineaments”) とは観相学の鍵語のひとつであり、銅版画師として「線」の秘儀を渴仰し「線」の美に随喜したブレイクの鍵語「輪郭線」の謂いでもある。

キャラクター文学の系譜を継承するワイ・ソルトンストール (Wye

²¹ 「キャラクターズ文学」に関する刺激的な論考として、圓月勝博「萌えるキャラクターリズム——初期近代イギリスのテオフラストスとジェントルマン」『知の版図——知識の枠組みと英米文学』鷲頭浩子・宮本陽一郎編 (東京: 悠書館、2007) 139-68 頁がある。

Saltonstall, 1602-40) の作品は、もっと明確に『語る絵あるいはキャラクターズによって描かれた絵画』(*Picturae Loquentes or Pictures Drawne forth in Characters*, 1631) と題される。ソルトンストールは「読者に向けて」のなかで言う、「これらの絵は、色彩で描かれたものではなくキャラクターで描かれているのですよ、そして心の眼にさまざまな職業をお示しするので」と (Saltonstall v)。ホールの影響は、さらにサー・トーマス・オーヴァベリ (Sir Thomas Overbury, 1581-1613) やジョン・アール (John Earle, 1601-65) などにも受け継がれる。オーヴァベリは「キャラクターとは何か」のなかで、次のように明確に書いている。

学校教師面しているなら「キャラクター」とは「彫る」あるいは「刻印する」を意味するギリシャ語の不定法からきている。それ故、文字もキャラクターと呼ばれるのだ。……わがイギリス人に分かり易く説明するならば、キャラクターとはひとつの影によって際だたせられた多様な色彩で趣き深く描かれた (実物あるいは個人の) 絵のことである。(Overbury 92)

「キャラクター文学」とは、刻印・文字・絵・旋律というように視覚・聴覚領域を横断するジャンルであり、その意味で、輪郭線や線描を重視し言語テキストと視覚テキストの双方から成る「複合芸術」の実践者・銅版画師ブレイクにこそ相応しいジャンルであったといっても過言ではないだろう。

④「キャラクター」は銅版画師ブレイクの芸術の根幹に関わる問題であった。

ウレットやストレンジの衣装から出てきた彫版のイギリス・スタイルと呼ばれているものは、決してキャラクターと表情を生み出

し得ない。(E573)

B氏は繰り返し申しあげる。この版画（銅版画版《チョーサーのカンタベリーへの巡礼》）の中には、ティツィアーノ、ルーベンス、コレッジオ、レンブラントまたは誰であれ、あの部類の人の手法をもって生み出すことのできるキャラクターや表情はひとつもない。キャラクターや表情は、それらを感じる者によってのみ表現され得るものである。(E579)

上の引用から明らかなことは、ブレイクにとって「キャラクター」があるかどうかは、銅版画家としての力量、ひとえに彼のジュランの腕にかかっている。「キャラクター」とは、銅版画上の「刻印」のことでありそこに刻まれた線・輪郭線から「感じ取る」しかない何かなのだ。まさに「彫り込まれた印」(*OED* 'character'1.a)。「輪郭線のないところにはキャラクターもない」("I know there are no lineaments there be no character", E540)と言明するときのブレイクは、意識的にであれ無意識的にであれ、自らがキャラクター文学の伝統に連なっていることを自己証明していたのではないだろうか。

ブレイクの言うキャラクターには、すくなくとも上で述べた博物学、観相学、キャラクター文学そして銅版画家の線が生み出すキャラクター、これらのすべてが含まれているのだろう。『カンタベリー物語』「総序の歌」テキストの解説とその挿絵を付すに際してブレイクは、博物学からは蒐集と分類によって全体・普遍を表象する方法を、観相学からは本質、個別性、細部、人相の記述と視覚化の方法を学び、それらを銅版画家としての実践から得た洞察に照らし合わせ、重ね合わせたとと言えるだろう。

チョーサーのキャラクター（人物像）は、「あらゆる時代に存在する永遠の原理のひとつの描写」であり「普遍の人間生命 / 生存の人相または容

貌」であると言うブレイクにとり、恐らくチョーサーが描く 29 名の巡礼すべての人物像は全人類というひとつのおおきな家族であった。しかしブレイクの「詩的ヴィジョンの力」(E541)を通して見るならば、チョーサーの人物像は、おそらく墮落した人間の断片にすぎないのだろう。それらの断片は再び集められ救済されなければならない。その救済の「過程」を、おそらく観者／読者は、この《チョーサーのカンタベリーへの巡礼者》という絵の中にも読み取らねばならない。確かに、1804 年トルフセスの画廊 (Truchsessian Gallery of Pictures) で蘇り体験 (Paley 165-77) をした銅版画家ブレイクがここにはいる。「ブレイクの銅版画芸術における明確な方向転換を告げる記念碑的傑作」(潮江 220 頁) と称賛される《チョーサーのカンタベリーへの巡礼者》。実際、銅版画版への「第二趣意書」の中で、30 名の巡礼群像において「あらゆる性格 (Characters) とあらゆる表情が、頭手および足のあらゆる輪郭 (Lineament) が、衣服または衣装のあらゆる細かな点が、そこではあらゆる馬がその乗り手にふさわしく」仕上げられることになろう (E568) と、自らの作品の品質保証をしたのは、ライン・エングレーヴィングの銅版画家を自負するブレイクその人であった (Es-sick, *Printmaker* 189)。

銅版画作品をブレイクの解説から切り離して、それ自体「独自の存在理由を備えた独立性の強い」絵画作品 (潮江 225 頁) として扱うのであれば問題は無い。しかし視覚テキストと言語テキスト双方を合わせてひとつの作品とみなすブレイクをここに読み取ろうとするなら、銅版画作品の見事な仕上がりとその「独創性」(“Invention”) についての解説 (『解説目録』) をどう一体化させるか、双方の間の乖離 (?) をどう埋めたらよいか戸惑いを感じる (ブレイクはテンペラ画と銅版画の区別もしていたのだろうか?)。この絵は、果たして完成度の高い作品と呼べるのだろうか。ブレイク解説を読む限り、描かれた 30 名の巡礼の配置にブレイクの腐心を感じすることはできても、そうして配置された巡礼者全体を力の構造体とみ

なしそこに高次元的で複雑なマンダラ運動体を読み取ろうとしてもなかなか難しい。

IV 「表象」という「システム」の限界——分類学的知から生命の総合的な理解へ

ブレイクは、チョーサーにならって「時代とともに現れる人物像の完全目録としてのカンタベリーへの巡礼者たち」を、テンペラ画もしくは銅版画という一枚のタブロー上に蒐集し分類し範疇化し体系化した——まさにドライデンの言うごとく「ここに神の豊穡がある」(Dryden 1455) とブレイクは言いたいのかも知れない。蒐集し秩序化することは博物学の営みにほかならない。

アダム・スミス (Adam Smith, 1723-90) が「システム愛」(“love of system”) の時代と喝破したように、18 世紀から 19 世紀にかけて無数と言ってよいほどの「システム」論が登場した (Smith 185)。リンネの博物学や観相学がこの時代を代表する「システム」であったことは言うまでもない。ブレイクはロス (Los) に「わたしはひとつのシステムを創造しなければならない、さもなければ他人のシステムの奴隷にされるにちがいない」(E153) と決意させるほど、時代の「システム」が孕む問題に深刻な反応を示した²²。

《チョーサーのカンタベリーへの巡礼者》とくに巡礼の配置とその解説に使われた用語からも明らかなように、ブレイクが依拠したシステムは、基本的に博物学 (植物学) 的 분류のシステムであった。カンタベリー物語は 《チョーサーのカンタベリーへの巡礼者》 という一枚の銅版画に見事な

²² Blake が強い関心を寄せたであろう system として博物学や観相学のほかに Jacob Bryant, *A New System, or an Analysis of Ancient Mythology* (1774; in 3 vols. 1775-76), Sir Isaac Newton, *Sir Isaac Newton's Mathematical Principles of Natural Philosophy and his System of the World*. trans. Andrew Motte (1729). ロマン主義時代の system については Clifford Siskin, “The Year of the System” in 1798: *The Year of the Lyrical Ballads*, ed. Richard Cronin (Macmillan, 1998) 他参照。

再現を見たが、それにしても 30 名の固定化された不動の性格が暗示されているだけである。これは我々の知るブレイクの最良の姿ではないと感じるのは、わたしひとりではないだろう。分類し腑分けするだけの方法に限界があるのではないのか。

わたしはここに、ミシェル・フーコー (Michel Foucault, 1819-68) が指摘した 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて起こった古典主義的知から近代的知への断絶を見る²³。フーコーは、古典主義時代の知の深層の基本形は「表象」(Foucault 60) であるという。古典主義期には比較・分類・演繹、あるいは計算と分析が知のモードとなるが、この時代の知の深層構造 (エピステーメー) を「タクソノミー」(Foucault 86ff.) つまり「分類による知」と呼んだ。古典主義期を代表する学問としての博物学とともに、蔵書目録やカタログによって図書館の整備が行われたのも、この時期の「分類」による「システム」の意思がその背景にあったからだ。しかし、やがて古典主義時代を代表する学問である博物学とタクソノミーの優越性が崩壊の危機にさらされたという。フーコーによれば、記号の表象作用による古典主義的認識構造は、18 世紀末から 19 世紀初頭において「労働」「生命」「言語」を知の基本形とする認識構造に取って変わられた。「われわれがそれを下地として思考している秩序は、古典主義時代の人々の秩序とけっしておなじ存在様態を持つものではない……物とそれらを類別して知にさしだす秩序との存在様態が、根本的に変質してしまったのである」(Foucault 13)。これまでのジョゼフ・ピトン・トゥルヌフォール (Joseph Pitton de Tournefort, 1656-1708) やリンネやビュフォン伯ジョルジュ＝ルイ・ルクレール (Georges Louis Leclerc, Comte de Buffon, 1707-88) の博物学による分類学的特徴の探求にとってかわる、有機体の研究の時代が始まったのだとフー

²³ Foucault からの引用は *Les mots et les choses: Une archéologie des sciences humaines* (Gallimard, 1966) により訳文は『言葉と物——人文科学の考古学』渡辺一民・佐々木明訳 (新潮社、1974) より借用した。

コーは分析する(Foucault 13; 281)。そのときから固定した不動の性格(キャラクター＝特徴)を記述することではなく、たえず変化する生理学的プロセスが問題となったのである。

ブレイクの《チョーサーのカンタベリーへの巡礼者》はまさにフーコーが、この分類学的知から生命の総合的な理解へと移行していくと分析した時代のものであった。もはや固定した不動の性格(キャラクター＝特徴)を記述する/描くことではなく、たえず変化する生理学的プロセスが問題となったのである。形態から機能への、あるいは、古典主義時代の分類学的で博物学的な着想から近代のより総合的な生命の理解への転換点に時代が達していたことを、他ならぬブレイクが感じ取らなかったはずはない。アリストテレスからジョン・ウィルキンズ(John Wilkins, 1614-72)そしてリンネにいたる分類学的論理は、フランシス・ベーコン(Francis Bacon, 1561-1626)やニュートンの原子論的数学的論理とおなじ記号論的基盤を共有するものとしたら(Essick, *Language* 42)、おそらくそのような分類学的格子からの脱出を試みたのが『エルサレム』(1804)ではなかったかと思う。

引用・参考文献

“Appendix to the *Monthly Review*”. *Monthly Review* 66 (June 1782) : 481-98.

Barry, James. *An Account of the Series of Pictures, in the Great Room of the Society of Arts, Manufactures, and Commerce, at the Adelphi*. London: T. Cadell and A. J. Walter, 1783 .

-----. *The Works of James Barry*. Ed. Edward Fryer. 2 vols. London: T. Cadell and W. Davies, 1809.

Bentley, Jr., G. E. “They take great liberty’s: Blake Reconfigured by Cromek and Modern Critics—The Arguments from Silence”. *SiR* 30 (Winter 1991) : 657-84.

- Bindman, David. *Ape to Apollo: Aesthetics and the Idea of Race in the 18th Century*. Ithaca: Cornell UP, 2002.
- Blake, William. *The Complete Poetry and Prose of William Blake*. Ed. David V. Erdman with Commentary by Harold Bloom. 1965; Berkeley: U of California P, 1982.
- Bowden, Betsy. "Visual Portraits of the Canterbury Pilgrims 1484 (?)-1809". *The Ellesmere Chaucer: Essays in Interpretation*. Ed. Martin Steens & Daniel Woodwar. San Marino, California and Tokyo: Huntington Library and Yushodo, 1997. 171-204.
- . "The Artistic and Interpretive Context of Blake's 'Canterbury Pilgrims'". *BIQ* 13. 4 (Spring 1980): 164-77.
- . "Transportation to Canterbury: The Rival Envisionings by Stothard and Blake". *Studies in Medievalism XI* (2001) : 73-101.
- Bryant, Jacob. *A New System, or an Analysis of Ancient Mythology*. 1774; in 3 vols. 1775-76.
- Chambers, Ephraim. *Cyclopaedia or, an Universal Dictionary of Arts and Sciences*. 1728.
- Chaucer, Geoffrey. *The Riverside Chaucer*. 3rd ed. Ed. Larry D. Benson. Boston:Houghton Mifflin, 1978.
- Colley, Linda. *Britons: Forging the Nation 1707-1837*. New Haven: Yale UP, 1992.
- Darwin, Erasmus. *The Botanic Garden*. London: J. Johnson, 1789-91.
- Dryden, John. "Preface". *Fables Ancient and Modern, Translated into Verse, from Homer, Ovid, Boccace, & Chaucer. With Original Poem* (1700) in *The Poems of John Dryden*. Ed. James Kinsley, Vol. IV. Oxford: Clarendon P, 1958.
- Earle, John. *John Earle: Microcosmography*. Ed. Alfred W. West. Cambridge:

Cambridge UP, 1920.

Erle, Sibylle. *Blake, Lavater and Physiognomy*. Oxford: Legenda, 2010.

Essick, Robert N. *William Blake Printmaker*. Princeton: Princeton UP, 1980.

----. *William Blake and the Language of Adam*. Oxford: Oxford UP, 1989.

Foucault, Michel. *Les mots et les choses: Une archéologie des sciences humaines*.

Gallimard, 1966.

Graham, John. "Contexts of Physiognomic Description: *Ut Pictura Poesis*". *The Faces of Physiognomy: Interdisciplinary Approaches to Johann Caspar Lavater*. Ed. Ellis Shookman. Canada: Camden House, 1993. 139-43.

----. "Lavater's Physiognomy in England". *JHI* 22.4 (1961) : 561-72.

----. *Lavater's Essays on Physiognomy: A Study in the History of Ideas*. Berne, Switzerland: Peter Lang, 1979.

Greenough, C. N. *A Bibliography of the Theophrastan Character in English*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1947.

Hall, Joseph. *Heaven upon Earth and Characters of Vertues and Vices by Joseph Hall* (1608). Ed. Rudolf Kirk. New Brunswick: Rutgers UP, 1948.

Huntley, Frabank Livingstone. *Bishop Joseph Hall 1574-1656: A Biographical & Critical Study*. Cambridge: D. S. Brewer, 1979.

Kiralis, Karl. "William Blake as an Intellectual and Spiritual Guide to Chaucer's *Canterbury Pilgrims*". *BS* 1. 2 (Spring, 1969) : 39-77.

Lamb, Charles. "Conversation with Lamb". Henry Crabb Robinson, *Diary Reminiscences and Correspondence of Henry Crabb Robinson*. 3 vols. 1869. Vol. II. 380.

Lavater, John Kaspar. *Aphorisms on Man* (1788). Trans. Henry Fuseli. Ed. R. J. Shrohyer. New York: Scholars' Facsimiles & Reprints, 1980.

Linné, Carl von. *Systema Naturae*. Leiden: 1735.

----. *Species Plantarum*. 2 vols. Stockholm: 1753.

- Milne, Colin. *A Botanical Dictionary: or Elements of Systematic and Philosophical Botany*. London: 1770.
- Newton, Sir Isaac. *Philosophiae naturalis principia mathematica* (1687); *Sir Isaac Newton's Mathematical Principles of Natural Philosophy and his System of the World*. trans. Andrew Motte (1729).
- Overbury, Sir Thomas. *The Overburian Characters to which is added A Wife by Sir Thomas Overbury*. Ed. W. J. Paylor. Oxford: Basil Blackwell, 1936.
- Paley, Morton D. "The Truchsessian Gallery Revisited". *SiR* 16 (Spring 1977): 165-77.
- Pressly, William L. *The Life and Art of James Barry*. New Haven: Yale UP, 1981.
- Pulteney, Richard. *A General View of the Writings of Linnaeus*. London: 1781.
- Read, Dennis M. *R. H. Cromek, Engraver, Editor, and Entrepreneur*. Surrey, England: Ashgate, 2011.
- Saltonstall, Wye. *Picturae Loquentes or Pictures Drawne forth in Characters* (1631). Oxford: Basil Blackwell, 1946.
- Shookman, Ellis, ed. *The Faces of Physiognomy: Interdisciplinary Approaches to Johann Caspar Lavater*. Columbia: Camden House, 1993.
- Siskin, Clifford. "The Year of the System". *1798: The Year of the Lyrical Ballads*. Ed. Richard Cronin. Macmillan, 1998. 9-31.
- Smeed, J. W. *The Theophrastan 'Character': The History of a Literary Genre*. Oxford: Clarendon P, 1986.
- Smith, Adam. *The Theory of Moral Sentiment*. Ed. D. D. Raphael and A. L. Macfie, *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith*, Vol. I. Oxford: Clarendon P, 1976.
- Spurgeon, Caroline F. E., ed. *Five Hundred Years of Chaucer Criticism and Allusion 1357-1900*. Vol. 1. New York: Russell & Russell, 1960.
- Theophrastus. *Characters*. Ed. and Trans. Jeffrey Russten, et. al. Loeb Classical

Library, LCL 225. Cambridge, Mass. : Harvard UP, 1993.

Viscomi, Joseph. *Blake and the Idea of the Book*. Princeton: Princeton UP, 1993.

Wind, Edgar. "The Revolution of History Painting". *Journal of the Warburg Institute* II (1938-39): 116-27.

圓月勝博「萌えるキャラクターリズム——初期近代イギリスのテオフラストスとジェントルマン」『知の版図——知識の枠組みと英米文学』鷲頭浩子・宮本陽一郎編．東京：悠書館、2007. 139-168 頁．

梅津濟美訳『ブレイク全著作』第2巻．名古屋大学出版会、1989.

潮江宏三『銅版画師ウィリアム・ブレイク』京都書院、1989.

ジェフリー・チョーサー『完訳カンタベリー物語』榊井迪夫訳上・中・下．1995；岩波文庫、1999.

ミシェル・フーコー『言葉と物——人文科学の考古学』渡辺一民・佐々木明訳．新潮社、1974.

リンダ・コリー『イギリス国民の誕生』川北稔監訳．名古屋大学出版局、2000.

メアリ・セトン・ワッツとサリー州の「ギルド」 —慈善から社会的企業へ—

吉村 典子

はじめに

1. メアリ・セトン・ワッツとアーティスト・サークル

1-1 「フレッシュウォーター・サークル」

1-2 「リムナースリース・サークル」

2. 慈善から社会的企業へ

2-1 「ホーム・アーツ・アンド・インダストリー」の活動

2-2 「ワッツ・チャペル」の建設

2-3 「ポターズ・アーツ・ギルド」の結成と展開

おわりに

はじめに

ヴィクトリア時代のイギリス、殊に、19世紀後半は、社会改良の時代であり、芸術家やデザイナーがその中核にいたことが指摘できる。「改良」にいたる引き金は、産業革命後の商工業主義社会の成立と発展にともなう弊害にあり、モノの生産において普及しはじめた機械量産システムとその製品への批判、人間の尊厳を無視した労働環境と労働の価値を問い直そうとするところにあった。労働者および労働へのまなざしから、その育成や改良が意識された組織、例えば、「ギルド」¹や「セツルメント・ハ

¹ ジョン・ラスキンは、実用と美が手仕事の中に統合されていたゴシック時代のギルドにみるような社会や労働を理想とし、セント・ジョージ・ギルド (The Guild of St. George) のような共同体をつくった。この構想のはじまりの一つは、「イギリスの労働者・勤務者への手紙」(letters to the workmen and labourers of Great Britain) にみることができる。これは書簡形式で1871-78年にわたって87通、1880-84年に9通を月刊で公開し、それらを単行本化し『フォルス・クラヴィゲラ (Fors Clavigera, 1871-1884)』としても出版している。それ以前からラスキンの著作を読

ウス」²が各地で設立され、やがては、アーツ・アンド・クラフツ運動やセツルメント運動と総称されるように、社会の大きな動きともなっていく。

ウィリアム・モリス (William Morris, 1834-1896) は、そうした運動に影響を与えた人物の一人であり、労働の問題を論じるなかで、「芸術は労働におけるよるこびの表現」³という言葉を残し、社会主義運動へと展開してくのであるが、一方で、文字通りの「芸術」をもって労働者や貧困層の生活を改善していく動きが見られるのは、同じくモリス等が言うように「商業主義のために労働者のすべての芸術が滅び、必然的に、労働者がより高度な芸術を鑑賞する能力やそれに付随するかたちを生み出す機会を奪われた」⁴という意識が広がりつつあったこともあるであろう。手工芸を中心とした制作活動の他に、図書館や美術・博物館に行く機会や、芸術家の家で作品鑑賞や週末を過ごす機会をつくる団体⁵が、1870年代から徐々に増加

んでいたモリス等は、実際のものづくりや講演を通して、生活の美の有りようを提示した。同様の意識で1880年代を中心に多くの組織(本文1-2で言及)も結成された。

² バーネット夫妻 (Samuel Augustus Barnett, 1844-1913; Henrietta Octavia Weston Barnett, 1851-1936) は、ロンドンの下層民地区イースト・エンドで初期のセツルメント・ハウスにあたるトインビー・ホール (Tynbee Hall) を1881年に設立したことで知られる。その活動の一つに、現在、ロンドンの現代美術を牽引する美術館で知られるホワイトチャペル・ギャラリー (Whitechapel Gallery, 1901～) の周辺で、作品を借りて展示し、芸術を鑑賞する機会を提供したことが挙げられる。本稿で取り上げるメアリは、この地域の靴磨きの少年たちに、バーネット夫妻に協力して塑造クラスを開いた。

³ ラスキンの1853年出版『ヴェネツィアの石』(the Stone of Venice) の第2巻第6章「ゴシックの本質」(The Nature of Gothic) を、モリスはケルムスコット・プレスで1892年に印刷刊行し、それに書いたモリスの序文にこの言葉が明記されている。原文は次のとおり。"For the lesson which Ruskin here teaches us is that art is the expression of man's pleasure in labour"

⁴ William Morris and E. Belfort Bax, *Socialism; Its Growth and Outcome* (London: Swan Sonnenschein & Co., 1893), p. 229.

⁵ ミランダ・ヒル (Miranda Hill, 1836-1910) が中心となったカール協会 (The Kyrle Society) は、慈善家ジョン・カール (John Kyrle, 1637-1724) に因んで、貧民地域の環境改善のために1876年設立された。ミランダの姉は、下層労働者の住宅改善運動やナショナルトラストの設立メンバーの一人としても知られるオクタビア・ヒル (Octavia Hill, 1838-1912) である。

している。

イギリスでは慈善活動の歴史は長く、古くは貴族の伝統としても、高い身分の者はそれに応じて社会的責任や義務を果たしていくという道徳観がある。それは、経済的・物質的「施し」が中心であったが、この時代の前述のような動きの詳細をみると、共に活動しながら、知識や技能の習得、そして意識改革と自立を促すようなヴィジョンがみられるのである。今日という「社会的企業」に等しい。

その一例が、イングランド南部サリー州コンプトン村 (Compton, Surry) にある「ポターズ・アーツ・ギルド」(The Potters' Arts Guild) にある。今日の社会的企業やソーシャル・デザイン等を議論する上でも、そのはじまりとも考えられる事例をみる意義はあるであろう。本稿では、この「ギルド」を主宰した美術家メアリ・セトン・ワッツ (Mary Seton Watts, 1849-1938) の活動に焦点をあて、「芸術」および「美術家」による社会改良の動きの一端を明らかにしてみたい。

1. メアリ・セトン・ワッツとアーティスト・サークル

1-1 「フレッシュウォーター・サークル」

ポターズ・アーツ・ギルドの創設者メアリ・セトン・ワッツは、画家ジョージ・フレデリック・ワッツ (George Frederic Watts, 1817-1904) の二人目の妻でもある。二人が結婚した頃は、夫ジョージ (以下「ワッツ」と表記する) は既に国内外で名を馳せた画家であり⁶、芸術家や知識人たちが集う

⁶ ロイヤル・アカデミー・スクールズに短期間ながら通い、その後、コンクール等で賞金を得るとイタリアへ赴き、絵画の研究を進めた。やがてイギリスに戻り、女優のエレン・テリー (Ellen Terry, 1847-1928) と出会い 1864 年結婚する。ロイヤル・アカデミー会員となり、フランスの官展(サロン)でも展示される。新進のグロウヴナー・ギャラリーの展覧会では、最も多くの回数、最も多くの作品を出展した画家の一人であった。1881 年には、大回顧展が企画され、200 点以上が出品された。1884-5 年にかけては、ニュー・ヨークのメトロポリタン・ミュージアムで 50 点が展示された。

ロンドンの「ホランド・パーク・サークル」⁷の一人にまず名前があがる人物であった。メアリも幼い頃から芸術家サークルと接点があったことは、メアリの姉妹との写真（カルト・ド・ヴィジット）⁸からもわかる（図1）。写真家ジュリア・マーガレット・カメロン（Julia Margaret Cameron, 1815-1879）による作品で、カメロンが住んでいたワイト島のフレッシュウォーター（Freshwater, Isle of Wight）で撮影されたものである。うら若い娘たちの、静かで軽やかな様相を捉え、被写体のもつ雰囲気を引き出された、この写真家⁹の典型ともいえる作品である。カメロンも、かつては「ホランド・パーク・サークル」の一人であり、同じくそのサークルの一人で桂冠詩人アルフレッド・テニスン（Alfred Tennyson, 1809-1892）がワイト島に移転することになると¹⁰、彼女も同地が気に入り、近隣に居を構えることにしたのであった¹¹。やがてテニスンやカメロンの友人や知り合いもこ

⁷ このサークルの詳細は拙稿「家とは何か —イギリス 19 世紀後半のアーティスト・ハウス—」（『英文学会誌』第 44 号、宮城学院女子大学学芸学部英文学会、2016 年 3 月）で論じた。

⁸ カルト・ド・ヴィジット（carte-de-visite）は、名刺判写真とも呼ばれる小型写真を指す。本書掲載図もその一つで、サイズは縦 79mm 横 56mm である。19 世紀中葉に安価で身近な所有物として大流行した。また、カメロンは、サイズの大小問わず、手描きでサインを入れている。本書掲載写真には“From Life Copy Right Julia Margaret Cameron”とある。「フロム・ライフ（From Life）」とは、生きた実在する人物を撮影したもので、絵画や彫刻の複写ではないことを示す、カメロン特有の記述である。

⁹ 東インド会社の官吏の父とフランス人の母のもとカルカットで生まれた。フランスで教育を受けたが、1834 年にカルカットに戻り、38 年にチャールズ・ヘイ・カメロン（Charles Hay Cameron, 1795-1881）と結婚する。チャールズは、インドにある英国の法律委員会のメンバーであり、セイロンで農園の事業も進めていた。二人の間には、子供が 11 人おり、そのうち 5 人が実子、5 人が養子（親戚の子供達）、残る 1 人が孤児であった。その孤児が成人し、キャメロンに写真機を贈ったことが、彼女の写真家となる切っ掛けとなった。クローズアップでソフトフォーカス（軟焦点）の効果を用いながら、人物の内面性を醸し出すような表現が特徴である。

¹⁰ ネオ・ゴシック様式の屋敷「ファリングフォード」（Farringford）を 1853 年に借り、56 年には買い上げた。

¹¹ カメロン家がセイロン（現スリランカ）で農園を営んでいたことに因み、その地のディンブラ（Dimbula）の名を使って、ワイト島の家を「ディンボラ」（Dimbora）と呼んだ。今日、カ

の地に入入りするようになり、ロンドンの「ホランド・パーク・サークル」如く、ワイト島の「フレッシュウォーター・サークル」(The Freshwater Circle)とも呼ばれるようになった¹²。そこに、メアリ達も訪れていたわけである。この姉妹の肖像写真のタイトル《娘子の薔薇の蕾の園》(The Rosebud Garden of Girls)は、テニスンがこの頃書いた詩「モード」(Maud)¹³から引用されたものである。その詩に描写されているような「伏し目」にしている人物がメアリ(右から二人目)である。



図1 ジュリア・マーガレット・カメロン、《娘子の薔薇の蕾の園》, 1868年(左からネリー、クリスティーナ、メアリ、エセル)
©National Portrait Gallery, London

メアリの父はインド駐在の行政官であったため、彼女はインドのアフマドナガル(Ahmednagar)で生まれた。カメロンと同様、所謂「アングロ・インディアン(インド生まれのイギリス

メロンの美術館として一般公開されている。

¹² ワッツの最初の妻エレン・テリーと出会ったのも「ホランド・パーク」であった。結婚した1864年に二人は、ワイト島を訪ねており、その時カメロンが撮影したエレン・テリーの肖像写真はカメロンの代表作の一つに数えられている。二人の結婚は一年と続かず(正式には1877年に離婚)、やがてワッツは、フィリップ・ウェブに設計を依頼し、ワイト島に家(The Briary)を建て、住んでいた時期もある。また、小説家ヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf, 1882-1941)は、カメロンの作品にもよく表れた姪ジュリア(Julia Stephan, 1846-1895)の娘にあたり、ウルフの戯曲『フレッシュウォーター』は、「フレッシュウォーター・サークル」をモチーフにしたものである。

¹³ テニスンは1850年桂冠詩人となり、1855年の46歳の時、詩集『モードおよびその他』(Maud, and Other Poems)を出版した。「モード」はその主要詩編であり、モードという名の女性に対する青年の独白で構成されている。

人)」である。しかし、メアリ誕生後母親が亡くなったため、二人の姉とともに、父の故郷で、祖父母の住むスコットランドのネス湖北東岸のアルドゥリー城 (Aldourie Castle, Inverness-shire)¹⁴ に移り、幼少期を過ごした。一方、父はインドに残り、再婚し、誕生した子供達と暮らしたが、引退後は、全員帰国し、メアリ達とともに、スコットランドのフォレス (Forres) で揃って暮らした。

幼少期から造形の世界に関心を寄せていたメアリは、1870年にロンドンの美術訓練学校¹⁵に、1872年にスレイド・スクール・オブ・アート (The Slade School of Art) に入学する。スレイド・スクールは、法律家・慈善活動家フェリックス・スレイド (Felix Joseph Slade, 1788-1868) により1871年に設立された美術学校である。初代校長ポインター (Edward John Poynter, 1836-1919) は、「フランス式」に基づく美術教育を導入したことでも知られる人物である。つまり、生きたモデルを前に人体デッサンを行うこ

¹⁴ アルドゥリー城は、1626年に遡る屋敷である。1754年にフレイザー一家 (the Fraser family) に売却され、メアリの祖父ウィリアム・フレイザー＝タイトラー (William Fraser-Tytler, 1777-1853) が継承し、暮らしていた。メアリは実母の死後、二人の姉 (Etheldred 'Ethel', 1844-1919; Christina Catherine Liddell /née Fraser-Tytler, 1848-1927) と、この城で過ごし、父は再婚し、五人の子 (Charles, 1854-77; Eleanor 'Nelly', 1855-1909; Edward, 1856-1918; Eva, 1857-1859; William, 1861-1935) を儲け、引退後はメアリらとともにフォレスで暮らした。

メアリは、ワッツと結婚後、イングランド南部のコンプトン村に住み、陶制作を開始するが、それと同じ頃、このアルドゥリー城の近くのドリズ (Dores) で、コンプトン村からスタッフや土を送り、「アルドゥリー・ポタリー」を運営していた。ワッツの彫刻制作とワッツ・チャペルの制作助手として欠かせない人物であったデューカーズ (Louis Deuchars, 1870-1927) が、「アルドゥリー」の運営を担った。デューカーズは、スコットランド生まれで、グラスゴー美術学校に通った経験ももつ。「アルドゥリー」での制作については、コンプトンの土が、スコットランドの気候風土に合わないこと等から、5年程で終止符を打った。

¹⁵ 1837年官立デザイン学校 (the Government School of Design) に設立されたのがはじまりで、以降、数回改称され、メアリが通った頃の名は、美術訓練学校 (the National Art Training School) であった。今日の名称ロイヤル・カレッジ・オブ・アート (the Royal College of Art) になるのは、1896年のことである。

とを重要視した¹⁶。一方、ロイヤル・アカデミー・スクールズのような伝統あるイギリスの美術学校では、古代ギリシアやローマの彫刻デッサンにまずは専念し、その後、生きたモデルのデッサンに進み、最後に実践的な絵画制作に向かうという方式をとっていた。また、裸体の生きたモデルのデッサンは男子学生にのみに開かれていたが、スレイド・スクールは、女子学生にも同等¹⁷の機会を与えた。従って、美術教育において、新たな機軸を打ち立てた学校でメアリは学んだことになる。さらにメアリは、絵画制作を進める一方で、フランス人彫刻家エメ＝ジュール・ダルー(Aimé-Jules Dalou, 1838-1902)にも師事した。ダルーは、後のイギリスの「ニュー・スカulptureチャー」(The New Sculpture)¹⁸に影響を与えたといわれている人物である。

やがてメアリは、こうした学びを活かして、貧しい子供達を対象に、粘土の塑像制作の教室を開くようになる。

1-2 「リムナーズリース・サークル」

結婚後の二人は、はじめはワッツのロンドンの自邸「リトル・ホランド・ハウス」¹⁹に住み、作品展示の場を含むその住まいでは、前述のような「美

¹⁶ 美術教育についてポインターが公衆に語った内容は、次の雑誌に記載されている。

“London University College,” *Art Journal*, vol.XI, 1872, p. 269.

¹⁷ しかしこの時はまだ、男女が同じ部屋で裸体デッサンをすることはなかった。

¹⁸ ダルーは、フランスを拠点としていたが、1871年のパリ・コミューンに関わっていたことから、その崩壊後、イギリスに亡命していた(1879年にフランスに帰国)。当時イギリスでは、古典主義の形式化した表現に対し、肉体表現にリアリズムとダイナミズムが表れてくるようになるが、ダルーはこの動きに多大な影響を与えていたと言われおり、詩人で批評家のゴス(Edmund Gosse, 1849-1928)は、この傾向を「ニュー・スカulptureチャー」と名付けた(Edmund Gosse, “the New Sculpture,” *Art Journal*, 1876)。

¹⁹ ワッツは、コッカレル(Frederick Pepys Cockerell, 1833-1878)の設計で1875-76年にかけてロンドンのホランドパーク(6 Melbury Road)に自邸を建設し、長きにわたって居候していたプリンセス家の「リトル・ホランド・ハウス」と同じ名前を付けた。1881年には、ジョージ・エイチソンの設計で、作品の展示公開用のギャラリー等が増設された。

術鑑賞」の場を提供していたが、やがて、ワッツの年齢（結婚時はワッツ 68 歳、メアリ 34 歳）や体調のこともあり、ロンドンより温暖で安らかな場を求めるようになる。友人のヒッチェンズ夫妻（Andrew Hitchens, 1833-1906; May Hichens / née Prinsep, 1855-1931）²⁰ の住む、閑閑なコンプトン村で過ごしたことをきっかけに、同地が気に入り、制作の場と居住空間を備えた建物を建設するに至ったのであった。アーネスト・ジョージ（Ernest George, 1839-1922）²¹ に設計を依頼し、ワッツ夫妻はその屋敷を「リムナースリース」（Limnerslease）²² と名付け、はじめは秋冬を中心に過ごしたが、やがてロンドンの住まいを完全に引き払い、この地を拠点とした。

ワッツ夫妻は、多くの芸術家たちとの交流があり、リムナースリースに

²⁰ 妻のメイは、ワッツがロンドンの自邸建設前に居候していた「リトル・ホランド・ハウス」の主人ヘンリー・プリンセプ Henry Thoby Prinsep, 1792-1878) の姪、具体的にはヘンリーの兄 (Charles Robert Prinsep, 1789-1864) の娘にあたる。メイも「アングロ・インディアン」である。メイは両親が亡くなったあと、叔父ヘンリーに引き取られ、「リトル・ホランド・ハウス」で育ったのだ。ワッツとの交流もそこから始まる。メイは、ロンドンの株式仲介人アンドルー・ヒッチェンズと結婚し、コンプトンのモンクスハッチ (Monkshatch) と呼ばれる屋敷に住んでいた。この屋敷に一時的にワッツ夫妻が滞在し、ヒッチェンズ夫妻の勧めもあり、コンプトンに家を持つことを決めたのだ。メイは、カメロンの被写体としてもよく登場していることから「フレッシュウォーター・サークル」とも交流があったことがわかる。夫アンドルーの死後、1918 年にテニソンの長男ハラム・テニス (Hallam Tennyson, 1852-1928) と結婚している。ハラムは、妻が亡くなった (1916 年) 後の再婚にあたる。ハラムの父で詩人アルフレッド・テニソンの時代から住み始めたワイト島の「ファリングフォード」が二人にとっての終の棲家となった。

²¹ 建物は 1890 年 7 月 20 日に施工開始となった。アーネスト・ジョージは、建築家で水彩画家でもあり、1908-10 年まで王立建築家協会 (the Royal Institute of British Architects) の会長も務めた人物である。

²² リムナースリース (Limnerslease) という名は、画家を意味する「リムナー」(Limner) に、収穫を意味する古語「リース」(lease) を組み合わせて、「最盛期」となることを祈念してワッツ夫妻が考案した造語である。また文字通り、ワッツ夫妻はヒッチェンズ夫妻から土地と借り受ける「リース」(lease) のかたちを当初とっていたことにもよるが、1899 年には完全に買い上げた。

は、デザイナーとしても活躍していたクレイン (Walter Crane, 1845-1915)、マクマードウ (Arthur Heygate Mackmurdo, 1851-1942)、アシュビー (Charles Robert Ashbee, 1863-1942) 等もよく訪れていた。いまや「リムナス・サークル」と呼んでよいかもしれない²³。それぞれが、アート・ワーカーズ・ギルド (The Art Workers' Guild)²⁴、センチュリー・ギルド (The Century Guild)²⁵、手工芸学校・ギルド (The School and Guild of Handicraft)²⁶ の創設と実際の運営に関わった人物である。制作のこのみならず、組織づくりにおいても意見が交わされたことであろう。

リムナスリースに集まってきたのは、こうした芸術家ばかりでない。コンプトンの村人達である。メアリは、リムナスリースの部屋の一部を開放して、村人達に塑造の教室を開始したのであった。

2. 「慈善」から「社会的企業」へ

2-1 「ホーム・アーツ・アンド・インダストリー」の活動

リムナスリースの教室は、メアリが1880年代に関わるようになったホーム・アーツ・アンド・インダストリー協会 (The Home Arts and Indus-

²³ この中には、ヴァージニア・ウルフの異父兄のジョージ (George Duchworth, 1868-1934) と、姉のヴェネッサ (Vanessa Bell / née Stephen, 1879-1961) もいた。ヴェネッサはヴァージニア・ウルフとともに後のブルームズベリー・グループ (Bloomsbury Group) を形成することになる画家でデザイナーのヴェネッサ・ベルである。

²⁴ 1881年にウォルター・クレイン等を中心に結成したザ・フィフティーン (the Fifteen) が加わるかたちで、1884年にアート・ワーカーズ・ギルドを創設。建築家、工芸家、芸術家、デザイナーらが集い、制作活動とともに、垣根をこえて意見交換や講演会を行った。活動は今日まで続いている。

²⁵ マクマードウ等により1882年に設立。テキスタイル、家具、金工等を制作し、1884年機関誌『ホビー・ホース』(the Hobby Horse) 創刊した。

²⁶ アシュビーにより1888年設立。工芸の復興とともに教育機関としても展開した。私設印刷工房エセックス・ハウス・プレス (the Essex House Press) も設置し、モリス没後にはケルムスコット・プレスの設備の一部を購入し、継承する。1902年にチップング・カムデン (Chipping Camden, Gloucestershire) へ移転し、村をギルドの共同体に変容させようとした。

tries Association) (以下「ホーム・アーツ」と記す)の活動の一つであり、教室で完成した作品展示運営等も行った。この協会は、社会改良家エグランティン・ルイーザ・ジェブ (Eglantyne Louisa Jebb, 1845-1925)²⁷が、夫の地盤の北部シュロップシャーのエレスメア (Ellesmere, Shropshire) から展開させた組織である。アルコールやギャンブル依存者、貧困層等に、技能取得や余暇の楽しみとして、手工芸に取り組む機会をつくり、受講料は集めず、ボランティアで指導にあたった。各地で展開し、1885年から作品発表と基金を集めるために始まった展覧会は恒例化し、1888年からは、ロンドンのロイヤル・アルバート・ホール (The Royal Albert Hall of Arts and Sciences)²⁸で毎年開催された。メアリは、ワッツと結婚した1886年に「ホーム・アーツ」の幹部委員に就任し、ワッツは協会の運営を経済的にも精神的にも支えた。

ワッツ夫妻の家リムナースリースの内装は、メアリによるジェッソ (gesso) 装飾が主要な場所に施されている。ジェッソは、石膏等を膠と混ぜ合わせた下地のことであるが、それを用いたレリーフ装飾のことも指す。やがてメアリは、ジェッソや粘土等の塑造技法を、地元の人々にリムナースリースの部屋を開放して教えるようになる。そして、それを人々の余暇や趣味のためだけでなく、過疎化とアメリカからの廉価な農作物で脅かされていた地域の人々の自立の道を確認するため、生産的な場とする構想を持つようになっていく。折しも、コンプトン村では共同墓地用の土地購入

²⁷ ジェブは生涯にわたり慈善活動に携わり、それは娘たち (Eglantyne Jebb, 1876-1928; Dorothy Frances Buxton, 1881-1963) に引き継がれていく。彼女らは1919年に、児童救済基金 (the Save the Children Fund) を設立し、姉のエグランティンは、1922年児童権利宣言を起草し、それが翌年の世界児童憲章の宣言 (the Declaration of the Rights of the Child) となった。

²⁸ 音楽等のイベント・ホールとして計画されたこのホールの名称は、当初は「芸術と科学のホール」 (the Central Hall of Arts and Sciences) であったが、ヴィクトリア女王は、芸術振興に尽力した亡き夫アルバート公の名を加え、基石が置かれた1867年に「ロイヤル・アルバート」の語を加えることを宣した。



図2 ワッツ・チャペル、1898年

が決定し、メアリは、その墓碑だけでなく、中心に聳えるチャペルを、塑造教室の生徒たちと一緒に、地元の土を使ったテラコッタでつくることを提案したのであった。こうして完成したのが、今日まで残る「ワッツ・チャペル」(The Watts Chapel)と呼ばれるコンプトン村の記念堂である(図2)。

2-2 「ワッツ・チャペル」の建設

チャペルの設計については、建築家のジョージ・レッドメイン (George Redmyne, 1840-1912)²⁹ の協力を得て、1895年には構想が固まり、メアリのデザインのもと、彼女の「テラコッタ・ホーム・アーツ」の教室に集まってきた村人達とで作り上げていった。メアリの塑造とその教授経験が活か

²⁹ レッドメインは、マンチェスター市庁舎やロンドンの自然史博物館の設計で知られるウォーターハウス (Alfred Waterhouse, 1830-1905) のもとで設計を学び、その事務所のあるマンチェスターを拠点とし、1886年にはマンチェスター建築家協会 (Manchester Society of Architects) の会長に就任した。1896年には、出身地のロンドンに近いサリー州に移り、ワッツ・チャペルの建設にも関わった。正面扉はレッドメインのデザインである。

されたわけであるが、この時に建造物の、特に外壁を飾り、かつ、保護するものとして、塑造を「焼き締める」という特有の技術と、建物の設計に合う形状を確実につくる製品としての安定性が求められた。その指導と実際の焼成窯の設計に協力したのが製陶家のウィリアム・ド・モーガン (William De Morgan, 1839-1917) であり、最初の窯が、リムナースリースの敷地内につくられた。焼成は、当時既に普及していた石炭を用いるのではなく、薪を使う方法をとった。薪焼成の方が、テラコッタの素朴な質感と色を引き出すことができるという考えに基づくものであり³⁰、この地域の鉄分を多く含む土は³¹、焼成により特有の明るい赤茶の色彩を発したのであった。また、建築家で、ド・モーガンの工房の一時期は共同経営者でもあったリカードは、釉薬の使用の有無等について相談にのり³²、無釉を薦めた結果、今では部分的に生す苔の緑が、周囲の自然と溶け込む表情もみせている。

チャペル完成までの過程で仕上がった祭壇やパネルの一部は、ロイヤル・アルバート・ホールで展示され、コンプトンでの活動とチャペル建設の過程をも示し、話題となった。チャペルの装飾は、メアリのデザインをもとに、内装はジェッソ (図3)、外装は赤煉瓦とテラコッタで構成されている (図4)。ケルト文様を思わせるその装飾デザイン (図5) は、メアリが幼少期に過ごしたスコットランドと関係しているであろうが³³、大英博物

³⁰ Mark Bills, *An Artists' Village: G.F. Watts and Mary Watts at Compton* (Compton: Watts Gallery, 2011), p. 103.

³¹ サリー州のギルフォード (Guildford) とフォーナム (Farnham) の間の丘陵地帯のホッグズバック (the Hog's Back) の南側にあたる。

³² Bills, *op.cit.*, P.75.

³³ 父方のフレイザー一家には、全九巻の『スコットランド史』を著したパトリック・フレイザー・タイトラー (Patrick Fraser Tytler, 1791-1849) のような高名な歴史家たちがおり、メアリが過ごしたアルドゥリー城は無数の歴史書や写本を有していた。また、彼女が過ごしたインヴァネス州を含むスコットランド北東部には、スコット族以前にいたピクト人による様々な凶像を彫った「ピクトの石碑」が今日まで丘や道路脇、教会の敷地等に残っている。

館等の国内の研究機関や海外旅行先³⁴で見た文物を、丁寧に分析したあとがメアリの画帳に克明に残されている³⁵。キリスト教のシンボリズムはもちろん、ヒンズー、ユダヤ、仏教等の各宗教にみられるモチーフ、エジプトやアッシリアの神々等の多様なシンボルが、散りばめられ、かつ、結び付けられて特有の造形言語をつくり出している。そこに託した象徴的意味を、メアリは『文様の言葉』³⁶ (*The Word in the Pattern*) と題した書物にまとめ、「エグラントイン・ルイーザ・ジェブに捧ぐ」として1904年に出版した。ジェブは、前述のとおり「ホーム・アーツ・アンド・インダストリー協会」の創設者である。そして同書には、メアリのクラスに集まり、チャペルをつくりあげた74人の名を連ね、最後の頁を飾っている。ものづくりを通して社会改良に尽



図3 ワッツ・チャペル (内部装飾「生命の木」)



図4 ワッツ・チャペル (南西壁面)

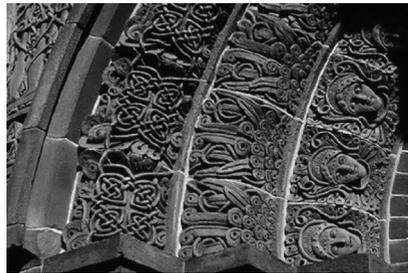


図5 ワッツ・チャペル (入口アーチ)

³⁴ 学生時代には、ドレスデンとローマに赴き、ワッツとの新婚旅行では、エジプト、トルコ、ギリシア、イタリア、シチリア等を周っている。

³⁵ Mary Seton Watts Chapel Notebook, c.1886-1904, Watts Gallery Archive.

³⁶ Mary Seton Watts, *the Word in the Pattern: A Key to the Symbols on the Walls of the Chapel at Compton by Mrs George Watts*. London, Hilbeon House, 1904.

力したジェブにこの本を捧げ、かつ、実際に制作に携わった人々の名を記載している点は、地域住人たちと作り上げた協働の賜物としてのそれに意識が置かれていることがわかる。

2-3 「ポターズ・アーツ・ギルド」の結成と展開

この成功と経験から、メアリの次の構想が具体化する。人々が技術をもって経済的にも自活する道筋である。技術と表現を市販用の製品となりうるよう計画し、やがて「ポターズ・アーツ・ギルド」の名のもとに、実際に制作販売するようになった。屋外用の鉢（図6）、日時計、記念碑等のセラコッタの製造所である。工房をつくり、人々を雇い入れ、住居も建設した。やがて、ワッツの作品を展示するワッツ・ピクチャー・ギャラリー（The Watts Picture Gallery）が、クリストファー・ハットン・ターナー（Christopher Hatton Turner, 1873-1940）³⁷の設計により完成するが（図7）、その建物の一部は、若い見習工たちの宿舎「ホステル」も含んでいた。

こうした経過をみると、メアリの「ギルド」は、前述のように今日でいう「社会的企業」に等しい。また、地元の労働の問題を扱い地域の土を活かして製造ラインにのせていく手法は、「コミュニティー・ビジネス」の早い例といえるかもしれない。メ

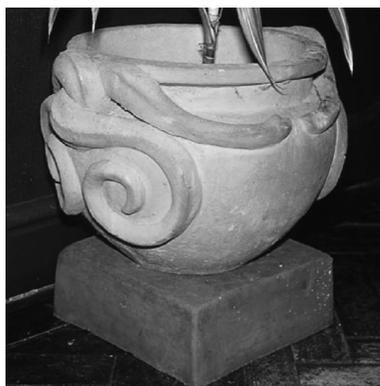


図6 植木鉢（H53.34 × W50.8cm）、ポターズ・アーツ・ギルド、1903年頃。リパティーフ百貨店では、北欧神話の竜の名に由来する「ファブニール」（Fafnir）という商品名がつけられた。

³⁷ ターナーは、コンプトン村に住む建築家で、ジーキルとの共同制作で知られる建築家ラッチェンズ（Edwin Landseer Lutyens, 1869 -1944）に学んだ経験をもつ。ワッツ・ピクチャー・ギャラリーは、1904年4月に開館し、同年7月にワッツは亡くなった（享年87）。開館前年にはロンドンの「リトル・ホランド・ハウス」にあったワッツの作品を全て移し、1906年にメアリは同ハウスを売却した。ホステルには12人が住んでいた。ギャラリーは開館して間もなく増築となり、1906年に再び開館した。

アリは、市場への載せ方にも新しさがあった。以前から関わっていた「ホーム・アーツ」展は、「チャリティー・バザー」に近い³⁸という位置づけも見られたが、メアリのギルドの製品はそれに加え、地元郵便局や



図7 現在の「ワッツ・ギャラリー」。かつては「ピクチャー・ギャラリー」と「ホステル」で構成されていた。クリストファー・ハットン・ターナーによる設計、1903年。

様々な店舗を通して市販されるようになったのである。

こうした中で、19世紀後半に顕著となるガーデニング・ブーム³⁹も手伝って、植木鉢や小鳥の水飲み用水盤等のテラコッタが、主要製品となっていた。ガーデン・デザイナーのガートルード・ジーキル (Gertrude Jekyll, 1843-1932)⁴⁰のデザインに基づいて作られた「ジーキル・ポット」の例に

³⁸ 「ホーム・アーツ」の展示は、手工芸の展示という意味では、アーツ・アンド・クラフツ展示協会の展示に等しいが、後者がロンドンの目抜き通りのリージェント・ストリートにある「ニュー・ギャラリー」で開催されたことに対し、前者は大衆的イメージの強い「ロイヤル・アルバート・ホール」の大ホールで展示された違いがある。また、創造的かつ美的要素が意識された後者に対し、作り上げた「成果の発表」という色彩が前者は強い。後者は図録があり前者はなかった。こうした理由から前者が「チャリティー・バザー」に近い印象を強めることになったという指摘もある。Bills, op. cit., p. 60.

³⁹ 19世紀後半、とりわけ社会経済的にも台頭してきた中産階級の住宅建設ブームにおいて、庭は主たる要素であった。ガーデニング関係の書籍も急増する。1871年創刊の週刊誌『ガーデン』(The Garden)もその一つで、創刊者のロビンソン (William Robinson, 1838 -1935) は、外来種を珍重する傾向に対し、地域に自生する植物で庭を構成することを推奨した。それに関する専門書『ワイルド・ガーデン』(The Wild Garden, 1870) 等も出版している。ジーキルの活動を高く評価した一人でもある。

⁴⁰ メアリと同様に、サウスケンジントンの美術訓練学校で学び、ラスキンやモリスの影響をう

みるように、様々な受注にも応じる体制をとっていた。その他、室内用の彩色陶器や彫像等にも取り組んでいる。

さらに、ギルドの製品の中でも、ワッツ・チャペルにもみられるようなケルト文様を展開したデザインは、同時代のケルト復興⁴¹と共鳴し、「ケルト」を商品化したリバティー百貨店⁴²を通しても販売された。リバティーは、ケルト文化の伝統あるマン島で生まれ育ったアーチボルド・ノックス (Archibald Knox, 1864-1933)⁴³のデザインを基に、「クムリック (ウェール

け、工芸制作に携わっていたが、1870年代中頃から庭園に関心を寄せ、幼い頃に育ったサリー州に戻ると、作庭やそのデザインに本腰入れるようになる。ロビンソンが推奨するような自生植物を主に用い、建物や周囲の風景との融合性や色彩表現に重きを置いた。建築家ラッチェンズとの共同制作は主要活動の一つに挙げられるが、ラッチェンズの設計する石造りの建物に合うように、ポターズ・アーツ・ギルドでは、グレー系の色彩が出るよう、それ専用の土を使用した。

⁴¹ 19世紀中頃、アイルランドでケルトの遺跡発掘や研究および出版が進んだことが復興文化に展開する要因の一つといえる。また、アイルランドの作家イェイツ (William Butler Yeats, 1865-1939) の『ケルトの薄明』(*The Celtic Twilight*, 1893) 等が、ケルト民話を広く世に伝え、復興文化をさらに鼓舞することに繋がった。

⁴² リバティー百貨店は、アーサー・ラセンビィ・リバティー (Arthur Lasenby Liberty, 1843-1917) が、19世紀後半のオリエンタリズムを背景に、東洋のテキスタイルを扱う店をつくったことにはじまる。1875年に百貨店となり、今日に至る。イギリスの「アール・ヌーボー様式」を発信したことで知られるが、「ケルト」から展開した豊かな曲線文様は、その典型の一つとして主要な位置を占めている。

⁴³ アーチボルド・ノックスは、マン島のダグラス美術学校で学び、1897年にはロンドンに出て、キングストンやレッドヒルの美術学校で教えながら、様々なデザイナーや工房に関わり、デザインの仕事に取り組んだ。ノックスは学生時代から地元のケルト文様を研究していたことから、「ケルト」を意識しはじめたリバティーと接点をもつようになり、1899年には最初の「キムリック」の銀製品が発表された。1900年にはマン島に戻り、そこを拠点にリバティーにデザインを提供することになる。リバティーの創設者アーサー・リバティーが1917年に亡くなると、ケルト十字のスタイルの墓石制作にあたった。この間、ノックスは、アメリカやイングランドで過ごし、キングストンでは、自身の名のついたギルド (The Knox Guild of Design and Crafts) が結成されたが、最終的にマン島に戻り、教鞭を執るも、心臓疾患により、69歳でこの世を去った。

ズのケルトを指す語)」シリーズ⁴⁴として調度品等を販売し、それと並んで、メアリのギルドの製品も販売した⁴⁵。さらにそれらは、グラフトン・ギャラリー（Grafton Gallery）で1904年に開催された「今日のケルト装飾展」⁴⁶で展示された。グラフトン・ギャラリーは、時代はやや下るが、美術批評家のロジャー・フライ（Roger Eliot Fry, 1866 -1934）⁴⁷が名付けた「ポスト印象派」の展覧会開催でも知られたところである。新たな芸術動向を表明するギャラリーの一つである。

こうした場で、製品が公表されているということは、ギルドにおける営みが、単なる製造業としてもものづくりではないということ、つまり、そこにおける労働が、つくることに主体的に関わり、表現性をもった労働と化していることを意味するのである。

⁴⁴ リバティーは、ノックスのデザインによるケルト・スタイルの銀製品等に「クムリック（Cymric）」、ピューター等を用いた製品には「テュドリック（Tudric）」という語をつけシリーズ化して販売し、世紀転換期のリバティーを代表する製品となった。後者は、テューダー王朝の名の由来となったウェールズ語からとったものといわれている。

⁴⁵ リバティーのカタログ（Liberty & Co., Book of Garden Ornaments, 1904）にもメアリのギルドの製品と特定できるものが掲載されている。リバティーは、店頭および商品カタログでは、デザイナー名は表示しない方式をとっている。

⁴⁶ 次の正式名から、諸工芸が展示されたものであることがわかる。“An exhibition of modern Celtic ornament as applied to gold and silver plate, pewter, jewelry, carpets, garden pottery, sundials, etc. : a revival of one of the earliest and most beautiful forms of art” この前年に同ギャラリーで開催された、アイルランドのカーペットをテーマとした展覧会（Founding a National Industry - Irish Carpets）でも、メアリの《ペリカン》が展示された。このデザインは、はじめスコットランドのアレクサンダー・モートン社（Alexander Morton & Co.）に提供され、アイルランドのドニゴール（Donegal）で手織りにより制作されたもので、そのカーペットは、リバティーを通して販売された。

⁴⁷ 画家で美術批評家のフライは、1904年からグラフトン・ギャラリーのアドヴァイザーにもなり、彼が企画・命名した「マネとポスト印象派」（Manet and the Post-Impressionists）展は、マネの他、ゴッホ、ゴーガン、ルドン、セザンヌ、マティス、ドラン、プラマンク等を美術史上「ポスト印象派」と位置付ける指針となった。

おわりに

以上のような、労働や労働環境の改善は、既に、ロバート・オーウェンによるニュー・ラナーク (New Lanark)⁴⁸ やキャドバリーによるボーンヴィル (Bournville)⁴⁹ などの例があり、ここでは、福利厚生施設のはじまり等がみられるが、大規模な工場経営の中でのそれであったことに対し、アーツ・アンド・クラフツ運動にみるような組織では、小規模であり続けることが意識されている⁵⁰。つまり、それぞれが目配り可能な規模で協働により成り立つことができる組織規模である。ヒューマン・スケールともいえるような、人間が人間の能力を超えた、換言すれば、人間がつくり出したものに、人間が責任をとれないモノやコトはないのである。また、ここでは、メアリのギルドにみるように、労働の成果を表現的な意味でも経済的な意味でも実感できる、そして、明日への労働へと向かう循環が形成されている。美術家としてのメアリによるデザイン監修はあったが、そのもとで、それぞれの役割を理解し、製品が完成されるしくみとなっている。このギルドは、社会情勢の変化により解散を余儀なくされるも、1951年まで続いた (ギャラリーは今日まで運営されつづけている)。その後も、スタッフの何人かは制作を続け、その中には当時から提供されていた工房近隣の住宅で、亡くなる 1992 年にまで住み続けた人物もいる。

今日、ここでは、ワッツ夫妻の住まいリムナスリースを含めて、社会福祉の活動拠点とするプロジェクトが進められている⁵¹。メアリのギルド

⁴⁸ オーウェン (Robert Owen, 1771-1858) の社会福祉思想により改良を進めたスコットランドのサウス・ラナークシャーの紡績工場。

⁴⁹ ジョン・キャドバリー (John Cadbury, 1801-1889) 創業のチョコレート製造を息子達が引き継ぎ、従業員の福利厚生の充実化をはかった。その過程でガーデン・ヴィレッジ「ボーンヴィル」を完成させた。

⁵⁰ 例えば、アート・ワーカーズ・ギルドは「理想的な会員数は各メンバーが全メンバーを知りうる範囲内と考えられて」おり、今日まで存続している。

⁵¹ “Hope Project” そして “Limnerslease & Great Studio Project” などの複数のプロジェクトをつくり、

で培われた精神が 21 世紀にまた開花しようとしている。

宝くじ基金や王室の支援等を受け、再生が進行している。

エイルマーの掲げる「高貴な」目標
 ——ナサニエル・ホーソーンの「痣」に
 おける精神と物質の問題をめぐる[†]

田島 優子

ナサニエル・ホーソーンが 1843 年に出版した「痣」¹の主人公エイルマーについては、従来その評価が二分されてきた。美しい妻ジョージアナの頬にある痣を、自らの擁する科学的知識と実践によって取り除くという高い理想を掲げ、その「高貴な」試みに失敗した科学者であるエイルマーは、「悲劇のヒーロー」なのだろうか、それとも死すべき人間の宿命を、いいかえれば自分自身が神の領域に到達することができないという象徴性を妻の痣に見出し、これを除去せんとして彼女の人生を身勝手に翻弄した「悪人」なのだろうか²。また、作品の結末で実験の失敗を揶揄するかのよう

[†] 本稿は宮城学院女子大学 2015 年度特別研究助成の援助を受けている。

¹ Nathaniel Hawthorne, "The Birth-mark," *Mosses from an Old Manse. The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, Volume X, Ed. William Charvat (Columbus: Ohio State UP, 1974) 36-56. 日本語訳は、國重純二訳『ナサニエル・ホーソーン短編全集 II』（南雲堂、1994 年）76-100 頁を参照し、必要に応じて変更を加えた。

² 例えば Heilman は "Aylmer, the overweening scientist, resembles less the villain than the tragic hero . . ." と述べる。Robert B. Heilman, "Hawthorne's 'The Birthmark': Science as Religion," *The South Atlantic Quarterly* 48 (1949):575. Turner は "In the 'Birthmark' he applauded Aylmer's noble pursuit of perfection, in contrast to Aminadab's ready acceptance of earthiness, but Aylmer's achievement was tragic failure because he had not realized that perfection is not of this world" としている。Arlin Turner, *Nathaniel Hawthorne: An introduction and interpretation* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1961) 88. また Brooks と Warren は "We are not, of course, to conceive of Aylmer as a monster, a man who would experiment on his own wife for his greater glory. Hawthorne does not mean to suggest that Aylmer is depraved and heartless. . . . The element of pride is there, but the kind of pride, it is suggested, is that which enters into and colors many of man's nobler purposes" としている。Cleanth Brooks and Robert Penn Warren, *Understanding Fiction* (New York: Appleton Century-Croft, 1943) 104. 上記はい

アミナダブのしゃがれた笑い声に直面するとき、読者は主人公の高尚な企図の失敗を自業自得であるとして、アミナダブと一緒にあざ笑えばいいのだろうか、それとも「可哀想なエイルマー」という深い慈愛に満ちた言葉を最期に天へと昇っていくジョージアナとともに (55)、崇高な理想を叶えることのできなかつたこの人物に同情すべきなのだろうか。

この問題に決着をつけることの難しさは、ひとつには作者ホーソーンに特有のアンビヴァレンスに起因すると言えるだろう。作中で「土くれ」、「凡俗」(55) と呼ばれる獣のような助手、アミナダブの、「俺の女房だったら、あの瘧を取り除いたり絶対にはしないのだが」(43) という発言の正しさをホーソーンは認めているように思われる一方で、作者は語り手に「分野が何であれ、天才の誰もが、エイルマーの記録の中に自分の経験と同じ例を見出すのではないか」(49) と述べさせ、「天上的な精神性」を極めるという高邁な目標を常に「地上的な物質性」によって挫かれる運命にあるエイルマーに、同情と共感を寄せているようにも思われるのである。

しかしここで考えてみたいのは、こういったエイルマーの「崇高さ」というものが、そもそも利己性を孕んだものではなかったかという問いである。「美しい女性が人目を避けて暮らすにふさわしい」と称してジョージアナが実験を待つ部屋に施された模様変えは、豪華なカーテンが「その部屋を無限の空間から遮断しているように見える」とされているように (44)、エイルマーは妻を外界や実験室から隔離しているかのようである。彼女が過去の数々の実験の失敗を記録したエイルマーの書物を読んでいると、それに気づいたこの科学者は「不安と不快」を示し (49)、また突然実験室に足を踏み入れたジョージアナに、二人でいるときの朗らかさとはずれもエイルマーの「高貴さ」に言及した上で程度の差はあれエイルマーを賞賛する。反対にエイルマーを批判的に見る批評としては、Taylor Stoehr, *Hawthorne's Mad Scientists: Pseudoscience and Social Science in Nineteenth-Century Life and Letters* (Hamden: Archon, 1978) 118-19. や William Bysshe Stein, *Hawthorne's Faust: A Study of the Devil archetype* (Gainesville: Florida UP, 1968) 91-92. など。

うってかわって必死の形相をして実験の成り行きを見守っているところを目撃されてしまうと、彼は怒りを露わにして妻を罵倒する。これらの場面が示唆するように、エイルマーは危険性の高い実験の内実を被験者であるジョージアナから隠そうとする。こういったエイルマーの秘密主義や利己性というものは、痣を除去する実験においてのみ観察されるものではない。実はエイルマーはジョージアナやアミナダブといった周囲の人間との間の在り方においても、科学を手段として「天上的な精神性」を追求するため、そして自分自身の「精神性」を担保するために、自分にとって都合のよい関係性を巧みに構築しているように思われるのである。

本論は、「痣」におけるエイルマーのアミナダブやジョージアナに対する振る舞いとその関係性に着目することで、この科学者の特性について基本的な解釈を試みるというものである。そして「世俗的な物質性」に対立する概念である「天上的な精神性」を追い求めるエイルマーの「高貴」な志が、はたして本当に「高貴」と言えるものであるかどうかを検証し、一つの叩き台としてその答えを呈示してみたい。

I. 痣が意味するもの——エイルマーが超越しようとする物質性／世俗性

「痣」はジョージアナという美しい女性の左の頬の真ん中にある、人間の手の形をした奇妙な痣をめぐる物語である。この痣は肌の表面だけでなく、内部にも深く織り込まれているように思われ、ジョージアナが健康的な赤味を帯びた顔色のときには輪郭がぼやけているが、顔色が青白くなったときにはくっきりと現れるという。語り手は、「他のところはあまりにも完璧」であるこの美しい女性の顔に現れた痣を、「たったひとつの欠点」であり「<自然>が刻印した、けっして消すことのできない人間に内在する避けられない欠陥」であると述べる（38-39、強調は引用者）。ただし、語り手やエイルマーが繰り返し「欠点」（“flaw”）（37）や「不完全性」（“imperfection”）（38、39、44、56）として言及するこのジョージアナの痣

には、見る人によって異なる評価が与えられている。主に彼女の同性からなる「気難しい人たち」は、ジョージアナの痣を「血みどろの手」と呼んで、この痣のためにジョージアナの顔が美しいどころか恐ろしいものに見えると言い、また男性の場合には、「欠点のかけさえない理想的な美を体現したただひとりの生きた見本」を見てみたいがために、痣がなくなっほしいと願いはしたという。しかし、「ジョージアナを愛した男たち」は、この痣はジョージアナがまだ赤ん坊だった折に、妖精が自分の手を押し付けてできたもので、「彼女に魔法の資質が備わっている印」であり、「あらゆる人の心を支配する力を与える」ものであると口々に述べたと言う。またジョージアナ自身も、「この痣は魅力的だ魅力的だとしょっちゅう言われたので、そうかもしれないと単純に思い込んでしまっ」と述べているし、エイルマーも、「結婚するまでは痣のことを殆んど、いや全く考えたことがなかった」(38) のである。

このように痣はジョージアナの魅力であるとも考えられるにも関わらず、なぜエイルマーは夢に見てしまうほど、ほとんど脅迫的なまでに、この痣を除去しなければならないと考えるようになるのか。このことについて、語り手は次のように述べる。

もし彼女が今より美しくなれば……彼 [エイルマー] は……この可愛い小さな手形 [痣] によって、自分の愛情が高められたとおもったことだろう。ところが、ほかのところはあまりにも完璧に思えたので、このたったひとつの欠点が、結婚生活の一瞬毎にますます耐え難いものに思えてきたのだ。それは<自然>が刻印した、けっして消すことのできない人間に内在する避けられない欠陥だった。<自然>は……すべての創造物に何らかの形で欠陥を刻印するのだ。……このようにして痣を、妻には罪を犯したり、悲しんだり、衰えたり、死んだりする可能性があることの象徴だと思い定めたものだから、エイル

マーの陰気な想像力はまもなく痣を恐るべきものにしてしまい、魂の美しさであれ、見た目の美しさであれ、ジョージアナの美しさがこれまで与えてくれた喜びを上回る苦しみと恐怖を引き起こした。(38-39)

エイルマーはジョージアナの痣に、単なる一人の人間の特性を超えた、人類の不完全性や死すべき運命の象徴を読み取る。このとき、若いときから科学研究に深く傾倒してその真髄を追求しようとし、「ヨーロッパ中のあらゆる学会から称賛」(42)されてきた天才的な科学者であるエイルマーにとってジョージアナの痣は、自分が解明しなければならない最大の謎として、目の前に立ち現れてくる。

作中では、「偉大なる創造の<母>は、白日の下で創造の仕事をしているふりをして研究者を喜ばせるくせに、自分自身の秘密は漏らさぬように厳重に警戒している、そして隠し事など一切していないふりをしているくせに結果以外は何も見せないという真実」をエイルマーは「不承不承認めた」とされ、また「実際に<母>は、人間が壊すことを許しても、修復することは滅多に許さないし、嫉妬深い特許権者と同じで作ることは決して許さない」と語り手は続ける(42)。ここでは、人間には決して創造主になることはできないことが示されている。しかしながらエイルマーには、これを受け入れることができないのであり、彼は科学の力によって、痣を除去しようとする。「非常に高尚で清らかな感情」から「高い目標を目指した」(55)とされるとき、エイルマーの「高尚さ」はこういった人間の宿命に懸命に抗おうとする点にあると言えるのだろう。

ジョージアナの頬にある奇妙な痣については、これまで多くの解釈がなされてきた。上で述べたように人間の不完全性を示唆するものであることから、キリスト教の文脈においては、痣は原罪を暗示するものであると解釈されてきたほか、フェミニズムや精神分析の観点からはジョージアナの

セクシャリティーを象徴するものとして論じられる³。しかしそれ以上に作品で前面に描き出されているイメージとして見落とすことができないのは、エイルマーやジョージアナ、そして語り手が時折言及する「精神性」と「物質性」——あるいは「天上性」と「地上性（世俗性）」——という相反する概念であるように思われる。

語り手が、「彼は自然界に存在するもの……すべてを精神化するばかりでなく、無限なるものに対する強烈で熱い思いによって物質主義に墮すのを免れていた。彼の手にかかると、全くの土のかたまり（“the veriest clod of earth”）が魂を獲得するのだ」と述べているように（49）、またジョージアナが、夫は「理想より地上的な部分のまさるものに満足するような、そんな屈辱には耐えられない」だろうと推測しているように（52）、エイルマーは長年の研究と実験において常に、人間の宿命や動物性や世俗性、人間の限界を示すような地上性というものに抗い、崇高な精神性という理想を求め続けてきた。瘡を取り除こうとするエイルマーの試みは、精神世界の物質世界に対する闘いであり、世俗性に対する戦いであるとも言える⁴。人間の手の形をしたジョージアナの瘡について、阿野が「手が人間的属性、あるいは人間臭さを表すのに打ってつけのイメージであることは、例えばシャーウッド・アンダーソンの『ワインズバーグ・オハイオ』（1919）の冒頭の短編、「手」に描かれた、主人公の忌まわしい手を思い浮かべても頷けるだろう」としていることから分かるように⁵、ジョージアナの瘡

3 例えば Heilman は、瘡に原罪の象徴を読み込む（579）。女性のセクシャリティーを読み取る批評としては、ジュディス・フェタリー『抵抗する読者——フェミニストが読むアメリカ文学』鶴殿えりか・藤森かよこ訳（ユニテ、1994）55-69頁。や、Frederick Crews, *The Sins of the Fathers* (New York: Oxford Press, 1966) 156-57. など。

4 エイルマーが高い「理想的なもの」を目指すあまり、「世俗的なもの」を受け入れることができないことについては、Chester E. Eisinger, “Hawthorne as Champion of the Middle Way,” *The New England Quarterly* 27 (1954): 50-52. など。

5 阿野文朗「訳者あとがき」『ラパチーニの娘——ナサニエル・ホーソーン短編集』（松柏社、

は世俗性を想起させるものであり、ほとんど完璧な姿に近いとされるジョージアナの頬の上にこれが現れるということは、彼にとってはほとんど冒瀆的なまでに許しがたいことであつたのだと言えるだろう⁶。

このように、この上なく高い理想を掲げて精神的な高みを追求するエイルマーに従順に寄り添うかのように、ジョージアナは手術の過程においてますます彼を尊敬するようになる。作品終盤、エイルマーが作りあげた溶液を飲む直前に一人になったジョージアナは、夫について考えを巡らせる。

彼女の心臓は、彼の高潔な愛を思つて震えながらも勝ち誇つた。彼の愛は、あまりにも清らかで気高く、そのため完璧なものでない限り受け入れられず、理想より地上的な部分のまさるものに満足するような、そんな屈辱には耐えられないのではないだろうか。そういう愛の方が、彼女のためと称して不完全なもので我慢したり、完璧な理想を現実のレベルにまで貶めて聖なる愛に裏切りの罪を犯すような俗っぽい愛より遥かに価値があると、彼女は感じた。(52)

ジョージアナはエイルマーの高い理想、つまり精神性の探求を、そのほとんど死の直前と言える瞬間において賛美する。このように、この実験の被験者／犠牲者であり、「君の心に不完全なところは全くない」と言われるジョージアナによって賛美されることによって、痣を取り除こうとするエイルマーの必死の取り組みや、それを支える彼の高い理念そのものは、崇

2013) 213 頁。

6 他でもない新婚の時期にエイルマーが痣の除去に執着するというのは、新婚というものが想起させる性的行為を持つ世俗性をエイルマーが排除せずにはいられないということを示唆しているとも言えるだろう。また、ジョージアナが溶液を口にしたらと痣が次第に消えていき、実験が成功したかに思えた場面においてエイルマーが最後に痣にキスをするのは、彼がこの世俗性から結局は完全には解放されえないことを意味するようにも思える。

高であるのかもしれないという印象を読者に与えると言えるだろう。このジョージアナのエイルマーに対する敬意（やその変化）についての細かい分析は後の章に譲りたいが、ひとまずここではジョージアナが夫の理想と愛の「高貴さ」に感銘を受け、それがエイルマーが悲劇のヒーローなのか、それとも悪人なのかという問いにおいて前者を強調するものである可能性があることを確認しておきたい。

II. アミナダブの「物質性」によって担保されるエイルマーの「精神性」

本作品における「精神」と「物質」の対比関係について考える際に考慮に入れておかなければならないのは、エイルマーと彼の助手のアミナダブの対比性である。エイルマーが「物質性」に優越するものとして追い求めている「精神性」について、ある箇所では「彼は物質的なものひとつひとつ（“physical details”）を……すべて精神化するばかりでなく、無限なるものに対する強烈で熱い想いによって物質主義に墮すのを免れていた。彼の手に掛かると、全くの土のかたまり（“the veriest clod of earth”）が魂を獲得するのだ」と述べられ、さらにその少しあとに続けて、精神性の物質性との関係について「土くれを背負わされ、物質の中で働く精神」（“the spirit burthened with clay and working in matter”）といった表現もなされている（49、強調は引用者）。これらの二つの引用箇所に共通するのは、「物質性」が地面や地上や世俗性を暗示する「土」の比喩で語られているということであるが、作中でアミナダブが「土」を表す語を使用してしきりに「土くれ」（“clod”）、「土くれ人間」（“man of clay”）と呼ばれているのは決して偶然ではないだろう（55、51）。背が低く、がっちりした体格で、もじゃもじゃの髪の毛をして、「人間というより獣の唸りか吠え声」のような下品で気味の悪い声をあげるアミナダブは、「土くれ人間」のほか、「機械人間」（51）と呼ばれ、体全体を筆舌に尽くし難い俗悪さが覆っていたというが、この助手は「原理など唯のひとつも理解できない」が、主人の

実験の実質面なら、途方もなく早く機械的に処理する能力があり、「人間の物質的な本性を代表している」と述べられている(43)。一方「華奢な体つき」をし、「青白くて知的な顔立ち」のエイルマーは、「人間の精神的要素の典型」であるとされる。エイルマーも、アミナダブと自分自身を指して「〈物質〉と〈精神〉、〈地上的なるもの〉と〈天上的なるもの〉」であると名言する(55)。

エイルマーとアミナダブについてはその対照性が顕著であるため、肯定的に読まれるにせよ、否定的に読まれるにせよ、アミナダブはエイルマーの精神的／非現実的／理想主義的な性癖を強調しているということに焦点が当てられがちであるように思われる。しかしながらここで考えてみたいのは、アミナダブというこのあまりに複雑性を欠いたキャラクターはエイルマーの対極に位置づけられるというよりも、むしろエイルマーという一人の登場人物の一属性を担っているのではないかという問いである。換言すれば、エイルマーは不都合な(しかし無くてはならないはずの)「物質性」を自分自身の中から排除し、それを全て助手のアミナダブに背負わせているにすぎないのではないか、ということである。

痣を取り除く手術が成功したかと思われた瞬間に、エイルマー自身が「〈物質〉と〈精神〉——〈地上的なるもの〉と〈天上的なるもの〉——今度のことではこれらのものがそれぞれの役割を果たした！」(55、強調は引用者による)と認めているように、「精神性」はそれだけで機能することはできないのであり、「物質性」が存在することで初めてその役割を果たすことができるものはずである。ジョージアナに求婚するにあたって彼が「整った顔から溶鉱炉の煤を払い、指から酸の汚れを洗い流」して、「実験室を助手に任せ」たという事実が端的に示すように(36)、また痣を除去するための手術の日、失神したジョージアナのためにドアを開けて香を焚いたり、注視するエイルマーの前で実際に溶液を蒸留する作業をしているのはアミナダブであるということからも明らかであるように、エ

エイルマーは自分自身を「知的」で「繊細」で美しくしておくために、実験に伴う必要な物質の一面をすべてアミナダブに押し付けなければならなかったのである。

エイルマーは頭の鈍く野性的なアミナダブを「機械人間」であり「土くれ」であるとして侮蔑するが、それはエイルマーがアミナダブの〈物質性〉、〈地上性〉を言葉にすることによって、自分自身の〈精神性〉を確認する振る舞いに他ならないと言えるだろう。エイルマーの実験の失敗が記録された書物を、語り手は「土くれを背負わされ、物質の中で働く精神」が「地上的な部分よって惨めに挫かれた……悲しい告白」（49、強調は引用者）であると述べているが、この「悲しさ」は、精神と物質がお互いに果たすべき役割があることを確認したあとでは、いささか空虚に響くと言えるかもしれない。このエイルマーの研究の記録は、「精神」が宿命的に「物質性」を背負わなければならないことを強調するのみで、「精神」が「物質」に負わせるものについては言及しないのであり、このことは、エイルマーが自分の物質性をアミナダブに引き受けさせ、その上でこの助手を揶揄し軽蔑することで自分の精神性を担保していることの独善性と共鳴するとも言えるように思われる。

人間がほとんど到達しえないような精神的な高みをめざすというエイルマーの試みは一見すると「高貴」（55）⁷であるようにも思える。しかしながらそれがアミナダブを生み出すことによって担保されているということを考えてみれば、彼のこの「高貴さ」というものはたちどころに脱構築されてしまうのである。

Ⅲ. エイルマーの「高潔な」愛と、それを内面化するジョージアナ

先に挙げた引用でも確認したように、ジョージアナはエイルマーが自分に向ける愛を「高潔な愛」と呼び、「完璧な理想を現実のレヴェルにまで

⁷ 例えば Brooks & Warren も、エイルマーを「高貴」（“noble”）であるとしている（105）。

貶めて聖なる愛に裏切りの罪を犯すような俗っぽい愛より遥かに価値がある」(52)とまで述べている。しかしながら、アミナダブとの関係性においてエイルマーの「高貴さ」が括弧付きのものであったことを勘案すると、エイルマーの妻に対する愛が純粋に「高潔な」ものであるのかどうかについても、判断を保留する必要があるだろう。

作品冒頭において語り手は、天才科学者であるエイルマーの新妻に対する愛について説明するにあたって、彼の科学に対する愛を引き合いに出している。電気や自然界に存在する謎が解明されるようになってきた当時であって、「科学を愛する気持ちが、男心を夢中にさせる具合と激しさの点で、女性への愛に劣らないというのはそれほど異常なことではない」とした上で、「新妻と科学を比べれば、妻への愛が優っているかもしれない、しかしそれは妻への愛と科学への愛を縋り合わせ、科学への愛を妻への愛に結びつけることによって、初めて可能になったのではないか」と述べている(36-37)。エイルマーは「その痣はこの地上の不完全さを示す目に見える印に思える」と述べ、「ショックを受ける」と言う一方で(37)、「ぼくはたったひとつあるこの欠点を喜んでいるくらいなんだ、これを取り除く喜びは何物にも勝るのだから」とも話してもいるが⁸、このエイルマーの発言は、さきほどの作品冒頭の語り手の説明を裏付けるものであると言えるだろう。ゴブレットに入った液体を飲み干したジョージアナが眠りに落ちた際、語り手が「エイルマーは彼女の傍らに座り、自分の存在価値の全てが、いま試されている薬の作用次第にかかっている男に相応しい感情を籠めて、妻の様子を見つめていた。しかしながら、こうした気分、科学者

8 この発言に対して、ジョージアナは直接的に返答せず、代わりに「ああ、許して！……お願い、二度とこれを見ないで。さっきの引きつったようなあの身震い、絶対に忘れられないわ」(86)と述べる。ジョージアナが手術において望むのは、痣がなくなるということとそれによって夫の願いが叶えられることだけであり、この欠点を喜ぶ余地は全くないということと比較すれば、エイルマーの科学に対する愛と妻に対する愛が「縋り合わせ」られた上で成立しているものであることは分かりやすいと言えるだろう。

に特有の学問的探究心が混じっていた」と述べて強調するように (54)、エイルマーのジョージアナに対する愛は、彼の科学への愛と結びつくことで可能となっているのである。

またジョージアナは科学実験の被験者としてエイルマーの研究意欲を掻き立てることによってだけでなく、ヴィクトリア朝的な「家庭の天使」を体現するような妻として科学者であるエイルマーの精神的な支えとなることによって夫の科学への愛をサポートしてもいることが示唆されている。ジョージアナに投与する薬を作るにあたって、エイルマーは「研究と化学実験の合間を縫って、疲れ切り紅潮した顔を彼女のところに運」んだというが、「彼女を前にすると元気が出るらしく、学問的な蘊蓄の深さを熱く語」ったという (46)。また、「君の朗々たる声を聴きたくて探していたんだ。ジョージアナ、歌ってくれないか！」と言い、実験で疲れて「渴きを訴える夫の心を癒すために」ジョージアナは夫の前で歌ってやり、その結果エイルマーは「子どものようにすっかり上機嫌」になって実験室へ作業をしに戻っていく (50)。このように、ジョージアナは科学者エイルマーを鼓舞する。作品の結末の死の直前においてジョージアナが、エイルマーの研究人生最大の失敗を許すだけでなく、夫を憐れみ、慰めるのが最も顕著な例だといえるが、過去の研究を記した書物にどれだけの失敗が記録されているようにも、手術で不安になっている彼女を喜ばせるために見せようとした実験が逆効果をもたらそうとも、結局はエイルマーは常にジョージアナによって受け入れられるのである。頬にある瘡を取り除きたいという衝動がエイルマーの彼女への愛を高めているのであり、ジョージアナは上記のようにとすれば幼稚⁹ともいえるエイルマーの研究へのモチベーションを強い母性でもって支える。上記の、ジョージアナが話を聞いたり

9「子どものようにすっかり上機嫌に」(50)なる場面が描かれているほか、ジョージアナが実験室の敷居を跨いだ際に気を失うと、エイルマーは「激しく床を踏み鳴らして」即座に助手のアミナダブに助けを求める (43)。

歌を歌ってやることでエイルマーを元気づける場面は、エイルマーが手術を受けるジョージアナを「元気づけよう」とした瞬間に真っ赤に燃え上がる痣を見て身震いし、ショックを受けた彼女を元気づけるどころか失神させてしまったり（84）、魔法の写真や花を操って喜ばせようとして失敗するのは対照的であるという点においても興味深い。このことはエイルマーがジョージアナに依存を示しながら、彼女を支配し、コントロールしていることの証左となっているとも言えるだろう。

エイルマーのジョージアナに対する愛が利己的であるがゆえにと、ジョージアナの夫に対する愛があまりに献身的であるがゆえにともいえるだろうが、ジョージアナは夫が痣に向ける嫌悪感を次第にはっきりと内面化していくことになる。作品冒頭で、「頬の痣を消せるかもしれないと思ったことはないのかい？」とエイルマーに尋ねられた際、「ええ、全然……正直なところ、この痣は魅力的だ魅力的だとしょっちゅう言われたので、そうかもしれないと単純に思いこんでしまって」と話していたはずの彼女は、自分はその痣にショックを受けるのだという夫の返答を聞いて涙にくれ（37）、やがて「彼に見詰められると身震いする」ようになり（39）、そしてエイルマーが夢の中で痣を取り除く手術をし、「もう〔痣は〕彼女の心臓のなかだ——こいつを取り出さないと！」という彼の寝言を耳にしてしまうと（40）、「どんな危険があっても」、「〔エイルマー〕自身の心を沈めるために、そして哀れな〔ジョージアナ〕を狂気から救うために」、豊富な科学の知識を持ってこの痣を取り除いてくれるよう、自ら懇願するようにまでなる（41）。手術当日、実験室の敷居をまたいだとき、「痣が白い頬の上で真っ赤に燃え上がっていた」といい、エイルマーが動転して身体を激しく震わせるのを見て、ジョージアナは「許して！……お願い、二度とこれを見ないで。さっきの引きつったようなあの身震い、絶対に忘れられないわ」と述べるが（44）、もともとはエイルマーだけが抱いていたはずの痣への敵意はいつの間にかジョージアナ自身のものとなり、彼女の

中で膨れ上がって、「痣を憎む気持は、エイルマーでさえいまの彼女には勝てない」(48)と述べられるほどになるのである。このように、「家庭の天使」を体現するジョージアナは、エイルマーの痣への嫌悪感を敏感に察知してこれを従順に内面化していくのだ。

ジョージアナが自らの痣を強く敵視するこの状況がエイルマーにとって好都合であることは、言を俟たないだろう。そもそも痣の手術について、エイルマーは自らははっきりとその提案をすることはないが、新婚直後と思われる冒頭の場面で「頬の痣を消せると思ったことはないのかい」と質問して、手術で除去できる可能性があることをエイルマーは予め示しておいたと言えるだろう。そしておそらく無意識的とはいえ彼女の痣に対する嫌悪感をその言動にじませることによって、ジョージアナ自身から手術を提案させるよう導いているとも言えるかもしれない。ジョージアナが夫の価値観を素直に受け入れ、彼の利己的な期待に完璧に答えようとする人物であるのは、アミナダブが自分の物質性を引き受けてくれる人物であったのと同じように、エイルマーにとっては都合がよいことなのである。

ジョージアナは痣を除去するための溶液を口にする直前に次のような謎めいた言葉を残す。

「ああエイルマー、愛するあなたのためでなかったら……他のどんな方法よりも、死すべき身体自体を投げ捨てて、死すべき人間の象徴であるこの痣を消し去りたいと願ったかもしれません。……わたしがもっと弱くてもっと理性に欠けていたら、命は幸福と同義語かもしれません。もっと強ければ、希望を持って耐えられたかもしれません。けれども私の見るところ、私はあらゆる人間の中で一番死ぬのに相応しい人間に思えます¹⁰」。(53、強調は引用者)

10 Stein も “The girl’s final statement to her husband signifies her willingness to sacrifice to his science” としてこの場面に注目するが、エイルマーの反応については “The scientist fails to heed her words”

「死ぬのに相応しい」という言葉から、ジョージアナは自分の死というこの実験の結末をすでに見取っているようだが、ここでジョージアナは自分の「強さ」と「弱さ」が、そのどちらか極端に走ることがないために、痣を除去する溶液を飲むほかはないのだと考えている。「わたしがもっと弱くてもっと理性に欠けていたら」と述べるとき、痣を除去できれば、夫の望みに答えることができる可能性があるのならば、たとえ命を失うことになっても構わないと考えるほどの「強さ」を彼女が持っていることが分かる。エイルマーは「気高く、愛しく、優しい」(41)として作中で何度もジョージアナを賛美するが、この賛美はこういった妻の「強さ」に対して向けられたものであると言えるだろう。

しかしながら、この場面で注目すべきなのはむしろ、エイルマーが彼女の「強さ」を賛美する一方で、彼女が同時に持っている「弱さ」に目を向けようとはしていないという事実の方であると言えるだろう。ジョージアナはここで「もっと強ければ、[痣を取り除かなくとも] 希望を持って耐えられたかもしれません」と述べて、エイルマーの視線を内面化せずにはいられないような自分の「弱さ」に言及してもいるのであり、彼女は自分を死に至らしめることになる溶液を口にする直前に、まるで助けを求めるかのように、夫に対して自分の「弱さ」を示しているのである。しかしエイルマーは、彼女の死の間際の微かな訴えに対して同情を示すことはなく、「君は死を味わうことなく天国に行くに相応しい」(53)とだけ答え、ジョージアナの「弱さ」、すなわち痣を除去したいという夫の衝動に従順に答えずにはいられない哀れな状況とその訴えを、彼女の強さと美しさへの賛美によって隠蔽し、これを黙殺するのである。

と述べるにとどまる(92)。

結論

ナサニエル・ホーソーンの「瘡」は、エイルマーという科学者が、世俗性／物質性からは決して逃れることができないという人間の宿命を象徴するかのような瘡を、妻の頬から除去することによって精神性の高みを目指そうとする「高貴な」試みを描いた作品であるが、そもそもこういったエイルマーの「高貴さ」というものは、彼が宿命的に持っているはずの／持っていなければならないはずの物質性の大部分を助手のアミナダブに背負わせることによって獲得されるものであった。

そして同様のことはジョージアナに対する彼の振る舞いに関しても言える。助手のアミナダブを「土くれ人間」の位置に据えることで自分の精神性を担保したのとちょうど同じように、彼は妻であるジョージアナに対しては自分と同様に世俗性を超えた存在であることを求めて彼女の精神と肉体をコントロールし、自らの精神性を支えてもらおうとするのである。

ただし、エイルマーの犠牲になるジョージアナは、単にこの夫の理想主義を内面化してコントロールされる「弱い」女性とも言い切れないということは付言しておかなければならない。ジョージアナ自身が自分の「強さ」を認めてもいることから分かるように、彼女はエイルマーの愛の「高貴さ」が孕む欺瞞性に気づいており、ジョージアナは一人の人間であるエイルマーの限界／欠点を見取っている。だからジョージアナは死の間際にエイルマーが科学者として「高い目標を目指した」ことを評価するのであり(55)、瘡を除去しようと奮闘するほどに彼女を純粋に愛してくれたことに感謝の言葉を向けるわけでは決してない。ジョージアナはそういったエイルマーの「高貴さ」の限界を認識した上で彼の理想に全身で答えようとし、そして死の間際においては「人間の持ちうる優しさを超えたような」優しさで(55)、しかし彼女が生前から持っていた優しさによって、実験に失敗したエイルマーに深い思いやりを示し、高貴にも彼を深い母性

と愛情で包み込むのである¹¹。このように、作品の終盤へと向かうにつれて前景化されるのはエイルマーの高貴さではなく、むしろジョージアナの高貴さである。ジョージアナの欠点をエイルマーが消去する試みを描いていたはずのこの物語は、エイルマーの欠点をジョージアナが包み込み、受容していく物語へと昇華されていくと言えるだろう。

しかしながら「瘡」は、高貴な女性が犠牲となる「美しい」物語として幕を下ろすのではない。作者が結末で強調するのは、やはりエイルマーの「高貴さ」に潜む独善性と利己性の方であったのだろう。エイルマーがアミナダブの中にあらかじめ抑圧しておいた物質性／世俗性は、結末において高貴な試みの失敗を揶揄するこの助手のしゃがれた笑い声とともに、エイルマーの眼前に回帰してくるのである。

11 「どんな薬であろうと、あなたが持ってきて下されば飲み干します。それと同じ信念に基づいて、私はあなたに飲めと言われれば、毒だって飲む気になるといことです」とジョージアナが述べると、エイルマーは「君は気高い人だ（"My noble wife"）……僕には今の今まで、君の高貴さと奥深さが分かってなかった」と返答している（94）。

Reading Activity Rollout: Year-One Implementation of the English Department's New Curriculum

Cory J. Koby

Introduction

Extensive Reading (ER) has emerged over the past two decades as a popular and well-researched approach to second language acquisition so much so that today ER is widely recognized amongst language educators as a viable and effective means of supplementing at least, and underpinning at best, second language education programs throughout the world. As part of a more general overhaul of MGU's English Department curriculum which commenced in 2016-17, the teaching and learning of "reading" at the first- and second-year levels was divided into what might be generally characterized as intensive reading, or *seidoku* (精読) in Japanese, and extensive reading, or *tadoku* (多読). Over a two-year period, all English Department freshmen and sophomore students will participate in these core components of our curriculum. This paper reports on the design, implementation, first-year results, and plans for the second year of the ER component this program and beyond.

After briefly describing the student profile and existing resources of this particular program, as well as the ER background of the author, this paper will take the reader through the various steps taken and factors considered as this new ER program was established. These factors included the assessment and selection of the various book options available, the structure and content of the syllabus—including reading (readability) levels and reading volume targets, student orienta-

tion and introduction to ER, selection and student progress monitoring by way of an ER-specific Learning Management System (LMS) platform, and student performance assessment criteria. This paper concludes with a discussion of areas identified as in need of improvement in light of the results from the first year of the program's administration—most notably student compliance and motivation issues.

It should be noted from the outset that much of this program's design and implementation was based on the principles established by Day and Bamford (1998) in their seminal work in ER, *Extensive Reading in the Second Language Classroom*. This extensive publication, along with its companion summary (Bamford, 2002) are viewed in the ER community as essential reading and serve as a perfect introduction for anyone new to ER. In addition, the program follows several of the pioneering ER principals established at a very successful cram school in Tokyo, the Scientific Education Group (SEG) by its founder Akio Furukawa.

Setting the Stage

Students participating in this program are in the English department of Miyagi Gakuin Women's University (MGU). As a required component of the new (2016-17) curriculum, all first- and second-year students must successfully complete all four semesters of this ER program as part of their undergraduate degree.

Existing Resources

Prior to the start of this new ER program in the 2016-17 academic year, the previous curriculum included a 1-semester ER module in the second year. Thus, previous instructors had amassed a collection of approximately 1,000 English readers. Many of the readers were labelled on the front cover with word-count and

yomiyasusa level (see detailed discussion below), as well as labelled on the spine with coloured tape indicating broadly-based beginner, intermediate, or advanced reading levels.

The books were situated in three distinct locations within the English Department. The first was a pair of mobile carts that ER instructors would bring to their weekly classes and, when not in use, park in what we call our “English Library” which is akin to a common space for students in the department. Students had free, unmonitored access to these books, which were divided into several bins by their respective reading levels. The second location, where a majority of the advanced-level readers were placed on bookshelves, was a conversation room that we call the “English Speaking Lounge” or “ESL” that students had free access to when not in use by instructors for one-on-one free-conversation with students. The third location, where approximately 250 unprocessed readers were located, was the office that I was assigned to occupy beginning in the 2016-17 academic year.

In addition to the English Department’s readers described above, the university’s main library houses a collection of over 3,000 graded readers organized into six reading levels somewhat akin to the Extensive Reading Foundation’s (ERF) first six reading levels (Waring, n. d.). These books were ordered and organized over the past quarter-century by Marc Helgesen and his Intercultural Studies (now Modern Business) Department colleagues. While the books do have word counts affixed to each cover, the lack of *yomiyasusa* level indication and disparate leveling system have, until now, rendered them outside the purview of the English Department’s program.

After a brief inspection of the existent resources of both the main library and the English Department I was able to determine that, while a great number of

intermediate and advanced readers were on-hand, there was a noticeable lack of beginner-level books which are, in my experience, essential in building readers' foundational reading skills and confidence levels. I therefore determined to focus my initial purchases and resource allocation on books targeted at lower stages of readability.

Program Administrator

The 2016-17 academic year was not only a new beginning for MGU's ER program, but also for me. After working in a private Japanese secondary school for the previous seven years whilst completing my Master of Arts degree in English language teaching, I began my career at the tertiary level. While working at the secondary school, I took it upon myself to establish an ER program (see Koby, 2015) which provided me with both the experience and knowledge that I carried with me into the next chapter of my career.

Designing the New Program

Book Selection and Organization

ER practitioners do not all agree on the most appropriate material for readers. Some believe that graded readers, written specifically for second-language (L2) learners are most appropriate and should exclusively form the contents of an ER library collection. Others, including myself, believe that a wider selection of reading material including (but not limited to) levelled readers written for native-speakers (L1) offers L2 learners opportunities to experience English language and English-based culture in a wider variety of authentic contexts. In addition to graded and levelled readers, in the spirit of Day and Bamford's (2002) second principle for teaching ER which calls for a wide variety of reading materials, I have also

included a number of popular L1 books and series such as *Curious George*, *Magic Tree House*, *The Frog and the Toad*, and *Peter Rabbit*.

In order to build our collection of readers that are brought to the ER classrooms, we were provided with a faculty research grant of 670,000 yen, which we have used almost exclusively for the purchase of books to supplement our mobile library.

One of the great challenges in organizing an ER library is dividing the books into levels that aid students in selecting material that they can read with ease. Historically, publishers have maintained their own proprietary levelling systems that have had little relation to one another. In recent years there has been a more coordinated levelling system because of the Council of Europe's work in the 1990's on the Common European Framework of Reference for Languages (commonly referred to as CEFR). However, as the CEFR levels are rather broad-based, totaling just six, this system is, in my opinion, not particularly helpful for organizing an ER library. More appropriate for extensive reading, the ERF has synthesized dozens of publisher levels into a comprehensive 20-level ERF Graded Reader Scale (Waring, n.d.).

While highly informative, the ERF Scale is based on publisher-reported headword levels which are derived from wordlists inconsistent between the various publishers, and not generally available to the public. Therefore, in my view, a more consistent readability index is desirable. I first looked at the various L1 readability indexes such as The Flesch-Kincaid grade-level readability scale (Flesch, 1979), which do offer scientifically formulated readability scores based on sentence and paragraph word length and syllabic complexity, but fail to address L2 reading concerns such as word frequency and grammatical complexity.

What I found to be most useful is an L2 reader-derived readability scale cre-

ated specifically by Japanese, for Japanese learners of English called the *yomiyasusa level* (YL) index first developed in 2002 (Furukawa, 2006). Now in its fourth edition, *英語多読完全ブックガイド (The Complete Book Guide for Extensive Reading in English)*, Furukawa et al., (2013) provides ER practitioners with a rather comprehensive list of YL levels as well as recommendation levels (reader ratings) for over 14,000 books ranging from YL 0.1 to 9.9. All of the information contained in the aforementioned guide, as well as a little more recent information, can be found online for free at Furukawa's school website (https://www.seg.co.jp/sss/YL/YL_tables.html). A very brief summary of the YL scale is contained in Table 1 below. This scale facilitates easy to understand organization of L2 readers.

YL 0.0: Readable without knowledge of the English language.
YL 1.0: Readable to learners of English with more than 80 hours of studying.
YL 3.0: Children's books of about 10,000 words in length.
YL 7.0: Paperbacks (stories) for adults.
YL 8.0: More difficult paperbacks.

Table 1- *Yomiyasusa* benchmark indicators (Furukawa et al, 2013)

Because of the ease of students' understanding the YL scale, I decided to use it, along with word counts for each book, as my method for labelling every book in our library collection. Thus, each book now has a label affixed to its front cover indicating both YL and word count. This serves as the foundation for the reading progression that students must follow in our ER program. At this point, I have not attempted to affix YL information to the main library collection, but do have plans to make use of many of the books in the coming academic year. For a more detailed explanation of this plan, refer to the discussion below regarding the online Learner Management System (LMS), *Xreading*, which is an essential component of our ER program.

A second, but complementary component of our reading program is also derived from Furukawa's (2006) Start with Simple Stories (SSS) approach, also adapted from Eichhorst and Shearon's (2013) ER program at Tohoku University, requires all students to read a prescribed number of words at designated YLs before having the option of reading at higher YLs (Table 2).

YL 0.0-0.9	10,000 words
YL 1.0-1.9	100,000 words
YL 2.0-2.9	150,000 words
YL 3.0-3.9	200,000 words
YL 4.0-4.9	250,000 words
YL 5.0+	As much as possible

Table 2- Required reading volume at each YL before advancing

Reading Volume and Targets

As Table 2 indicates, the required reading volume for our ER program may be considered by some to be somewhat high, but it is my firm belief that the expectations are entirely reasonable. In order to achieve a minimum passing grade, students must read a progressively rising volume in each of the four consecutive semesters. I estimated that most students should be able to read a minimum of 80 words per minute (WPM) in semester 1, rising to 100, 120, and 150 WPM in the successive three semesters. Thus, an increase of approximately 20% in reading speed would enable students to read 20% more volume each semester with the same amount of time engaged in the reading activity.

With the above figures in mind, I estimated that students should be able to read, mostly within the 15 90-minute classes in a semester, at least 70,000, 90,000, 115,000, and 140,000 words respectively in the four consecutive semesters of the 2-year program. Thus, in order to achieve a minimum passing grade, students are

required to read no less than 415,000 words total throughout their first two years of university.

Of course, some students will vary from these rough WPM estimates, and all students will be slowed by images contained within the books, particularly at the lower YLs, which typically contain more visual support for the texts. So these are simply thumbnail estimates. Needless to say, some reading outside of class is expected of students in order to earn passing grades, particularly when they are required to take short quizzes to verify their comprehension of the books (see discussion below).

In-class Activities

The main focus of this program is to engage students in ER of English texts in order to improve their reading speed and comprehension, as well as expand their grammatical, lexical, and cultural knowledge of English in its natural context. Developing positive and productive reading habits are paramount to this goal, thus much of the time in each of the 15 90-minute classes each semester is devoted to silent, sustained reading (SSR).

Over the course of the four semesters, in order to maintain motivation and provide additional support for the main goal of the program, a number of in-class activities are being introduced to enhance the program. In the first semester, the students are asked to read a self-selected 300-word passage out loud to the instructor, who then provides both written and oral feedback intended to aid in the development of reading fluency. A specific focus on chunking—reading blocks of words together rather than sounding out individual syllables and words—is provided by the instructor in both of the two oral reading sessions each student participates in during the semester. Additional activities including timed reading,

speed reading, book discussion groups, book reviews, and book presentations are, at the discretion of the instructor, being introduced in the second through fourth semesters.

Student Orientation and Introduction to ER

Buy-in is Key

Reading extensively in their L2 is something that very few, if any, of our students have experienced in their learning prior to entering the ER classroom. During their high school English education, all have experienced *intensive reading*, which is an entirely different, but complementary exercise. Getting students to understand and accept these as two different pursuits is essential at the outset. Spending much of the first class introducing students to the purpose and methods of ER is, in my experience, time very well spent.

In order to successfully prepare new students for the ER task to come, I distribute a printed A3-sized bilingual introduction which contains the essential information that I deliver in a PowerPoint presentation at the beginning of the first class. This information includes why, how, and what is expected of students in terms of time, reading levels, and volumes throughout the following four semesters. I also present several samples of the books that they will encounter. Four essential rules of ER are repeated three times during the presentation: 1) Choose books that you enjoy and feel free to change them if you lose interest; 2) Read at a level that you can completely or almost completely comprehend the text's vocabulary without the use of a dictionary. Guess the meaning of unknown words and, if you wish, make note of these words and confirm their meaning after you have completed reading the entire book; 3) Read as fast as you can while still following the general meaning of the story—placing an emphasis on general meaning rather

than complete, discrete-point comprehension (as is the focus in *intensive* reading); and 4) Read often and read as long as you can, without losing concentration.

Student Performance: Monitoring and Assessment

Learning Management System and Online Library: Xreading

One of the central criticisms I have experienced regarding ER in an academic context is the issue of verification that reading, and comprehending, has actually taken place. In order to confirm this, there are a number of options available to ER practitioners including the use of book reports, reading diaries, student interviews, and two somewhat similar digital platforms—*MReader* and *Xreading*. As a researcher and data fan, I especially like the latter two, particularly in light of the somewhat voluminous expectations I have of our students. *MReader* is a fee-free system that contains over 5,500 quizzes on English readers. ER practitioners can register and monitor their students' reading online, and capture data for assessment and analysis purposes. *Xreading* is a paid platform that offers all of the *MReader* features, plus a digital library of over 600 popular English readers and quizzes that students can access anywhere, at any time. Data provided to the instructor for the physical books is identical on both platforms, but digital reading data provided by *Xreading* also includes reading speed and rate of completion. Instructors can set quiz passing rates on both platforms.

Rather than charging a fee for books or a text, I have opted to require students to subscribe to *Xreading*. At approximately 200 yen per month, the fee is, in my view, very reasonable and provides students with the added flexibility and convenience of accessing books on-demand and in a format that some prefer, and all have at least tried. *Xreading* also provides audio for the books they offer, but this is a feature I have yet to make use of as I do not focus my lessons on listen-

ing.

It may be of interest to the reader to know that quiz formats differ greatly between *MReader*, which is considered an open-book quiz as students are expected to have the physical book in-hand, and *Xreading*, which is considered a closed-book format with students not having the physical book to reference during the quiz. Whereas *MReader* quizzes are complex, multiple choice 10-item quizzes derived from a question bank of 15 to 25 possible items, and typically allow students 15 minutes to complete, *Xreading* quizzes are simple 5-item quizzes that students must complete within 5 minutes. While the item number and complexity cannot be adjusted, instructors do have control over the time allowance and passing score threshold for both quiz formats.

Because I have elected to make use of the *MReader* quizzes, those existing resources inherited from the previous curriculum had to be sorted, and books not included in the 5,500 quiz bank were pulled from circulation. At present I have approximately 400 books out of circulation, and awaiting quiz composition. As the *MReader* platform is fee-free, it relies on volunteer contributions of quizzes from various community members. Therefore, at some point in the future I expect that a portion of my research budget and/or time will be allocated to this task.

Individual Student-Teacher Meetings

One of the hallmarks of this particular program is the personal contact students have with the instructor whilst in class. Class size is limited to 24, so during each of the 15 90-minute lessons the instructor meets briefly with each student to review their weekly progress and provide feedback and support where needed. During these meetings, students are provided with data that helps them gauge whether or not they are on-track to pass the class, and what pace they will need to

maintain to semester-end in order to earn particular final grades in the class. The discussion in the following section will inform the reader of the specific assessment criteria that students are provided with during orientation and repeated during each of these weekly meetings with the instructor. These weekly one-on-one meetings were omitted during the first two classes of the second semester, where a very low rate of reading volume was recorded, and a significant spike in reading was observed once these meetings restarted. I am, therefore, firmly convinced that personal contact with each student positively influences their motivation and thus effort in ER participation.

Assessing Student Performance

This particular program is intended specifically to focus on ER as its main activity. With this in mind, I have allotted 80% of overall student assessment to be based on reading volume, with the remaining 20% to be based on in-class activity. As noted previously, each semester the passing threshold rises by approximately 20% from a baseline in Semester 1 of 70,000 words, to a high of 140,000 words in Semester 4. By reading these baseline amounts students will earn the minimum of 50% of a possible 80%, with the remaining 10% of an overall passing score to be earned from in-class participation in the various activities selected for the semester. Table 3 provides of the various reading volume thresholds for the four semesters.

Reading volume data is taken from the student records stored on *Xreading*, with only successfully passed quizzes being credited to the reading diaries. For online reading, I have set the passing grade at 3/5 (60%), but for physical books, which have more complicated quizzes with variously weighted items, I have set the quiz pass threshold at a somewhat generous 50%, and will adjust any quiz

Grade	Semester 1	Semester 2	Semester 3	Semester 4	TOTAL
50%	70,000	90,000	115,000	140,000	415,000
55%	90,000	105,000	130,000	160,000	485,000
60%	115,000	125,000	145,000	180,000	565,000
65%	145,000	150,000	175,000	200,000	670,000
70%	170,000	170,000	200,000	230,000	770,000
75%	210,000	210,000	240,000	260,000	920,000
80%	250,000	250,000	300,000	300,000	1,100,000

Table 3- Reading volume requirements by semester

score of 47% or higher up to a passing score of 50%.

As the reader can see in Table 3, the various thresholds rise each semester by only a marginal amount above the previous semester's levels. This was intended to increase motivation throughout the 4-semester program and allow more students to achieve a higher degree of success as their reading speed and overall ability improves. It is my belief that my role as an educator is to foster and facilitate student success, so despite what some consider ambitious reading volume expectation, I dedicate a good deal of time and effort to support students in their individual achievements.

Looking Back at Year One to Inform the Future

First-year Successes and Challenges

Student-participants in the first year of this program consisted of the entire freshman class of 67 English majors at Miyagi Gakuin Women's University. In the first semester, students read a total of approximately 9.3 million words, at an average of approximately 140,000 words and a mean of 122,769 words per student. I consider the first semester of this program successful because all of the participants passed, with the lowest volume recorded as 71,648 words, and five managing to

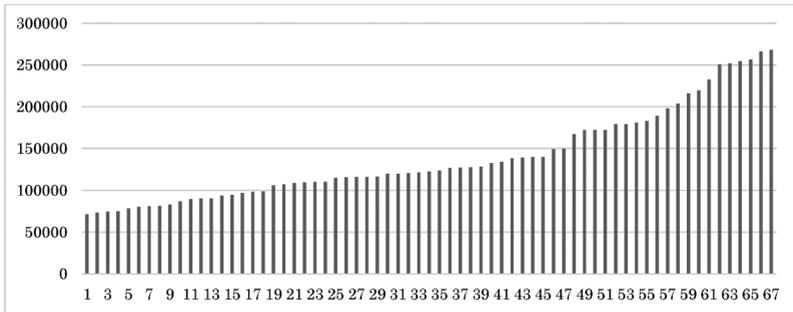


Table 4- First semester reading volume (n=67)

surpass the quarter-million word mark. Table 4 summarizes these results.

With the help of student-participants I was able to sort the entire library of existing books, and remove from circulation all books that did not have corresponding quizzes. In addition, all of the unprocessed books left by my predecessor have been processed, and books on the *MReader* list have been added to our collection. With the faculty grant, I have purchased and added over 800 books this year to our mobile collection. And at the end of the academic year I was allocated the department's remaining library budget, with which I have added approximately 500 new titles to the library.

Semester two results are preliminary, but indicate that all students will reach the minimum reading threshold of 90,000. However, motivation does appear to be waning with some of the students, so I am currently collaborating with the instructor who will take over this first cohort next year on strategies to increase reading motivation in their second year of the program, whilst I will remain focused on next year's first-year students.

One of the only real complications that I have identified is with the two different quiz format options. A small number of current students have realized that

there are e-book quizzes available for some of the physical books in our collection, and have attempted to leaf through the online version of the book then take the easier 5-item quiz with the physical book in-hand, which significantly increases their chance of success on the quiz. By limiting the acceptable reading speed of the digital books, which instructors are able to do on *Xreading*, I have managed to curtail this, but it is certainly an issue in need of further consideration. Fortunately, the students at MGU are, by and large, honest, thus I expect few students will attempt to manipulate the system. However, the chance for “working the system” does still exist.

Looking Forward to Year Two and Beyond

As the program moves into its second year, the number of participants will double. Two instructors will be involved, so I will engage in collaboration and have less direct control than in the first year. We will continue to build our collection of physical books, and move forward with *Xreading* as well. I have enjoyed an excellent working relationship with the developers of both *Xreading* and *MReader*, who have both praised the exceptional achievements of our students. I expect that *Xreading* in particular will continue to adapt and improve based on feedback provided by me and my colleague in the years to come.

I am also planning to work closely with the school’s main library to integrate the existing readers into the English Department’s program by identifying which of the on-hand books are listed in *Xreading* with a label, and also affixing a YL sticker to those books. In addition, I am experimenting with a library management software package that may assist in monitoring and managing the books we keep in the English Library, and may lead to some sort of self-checkout system in the future in order to minimize the loss of resources.

As this program is still under development, I am sure that in the coming year and beyond there will be more fine-tuning and, of course, more to report on in future volumes of our department's research journal.

Disclaimer

Portions of this paper are based on presentations given at JALT2016 and JALT's Extensive Reading 2016 SIG Forum, both held in Nagoya, Japan. Some of the above information may appear in alternate forms in the respective conference proceedings for the aforementioned events.

References

- Bamford, J. (2002). Top ten principles for teaching extensive reading. *Reading in a Foreign Language*, 14 (2), 136-141.
- Day, R. & Bamford, J. (1998). *Extensive reading in the second language classroom*. Cambridge language education, Language Education Series. Cambridge: Cambridge University Press.
- Eichhorst, D., & Shearon, B. (2013). *ER@TU-Tadoku no susume* [Extensive reading recommendation]: *The Tohoku University extensive reading manual*. PD Bukureto [Booklet] vol. 4. Sendai: Center for the Advancement of Higher Education, Tohoku University.
- Flesch, R. (1979). *How to write plain English: Let's start with the formula*. Retrieved from <http://pages.stern.nyu.edu/~wstarbuc/Writing/Flesch.htm>
- Furukawa, A. (2006). *SSS Extensive reading method proves to be an effective way to learn English*. Retrieved from www.seg.co.jp/ss/information/SSS-ER-2006.htm
- Furukawa, A., Kanda, M., Mayuzumi, M., Nishizawa, H., Hatanaka, T., Sato,

M., & Miyashita, I. (Eds.). (2013). *Eigo tadoku kanzen bukkugaido* [The complete book guide for extensive reading in English] (4th ed.). Tokyo: CosmoPier.

Koby, Cory J. (2015). ER Start-up in Junior and Senior High School: Taking on the Challenge. In P. Clements, A. Krause, & H. Brown, *JALT2014 Conference Proceedings*. Tokyo: JALT.

Waring, R. (n.d.) *The Extensive Reading Foundation grading scale*. Retrieved from http://www.robwaring.org/er/scale/ERF_levels.htm

2016 年度 英文学科生の活動



ESL (English Speaking Lounge)

ESL と英語力

2年 菊田 詩織

私が ESL を習慣的に使う理由は、英語はアウトプットが大事だと考えているからです。英語を学んでいる以上、学外で外国人の方と話す機会があった場合、実践的に英語を使える力を養いたい!! という気持ちが原動力となっています。具体的には、ESL の利用で (1) 発音 (2) 英語特有 (単語 / 文法) の言い回しの 2 点の伸びを実感しました。これは、机上学習では学べない力です。単語を知っていても、発音が不適切だと伝わりません。また、伝えたい文章をすぐに英文に置き換える力も、実際に話さなければ身につけません。より実践的 (日常的) な英語力を伸ばしていきたいので、私は ESL で、日本人の先生や友人と話すような「世間話」を題材として



Kyle 先生と ESL で話す菊田さん (写真左)

選ぶようにしています。ESLで、出来なかった点や見つかった自分の欠点は、机上の学習に繋がります。このようにして、アウトプット・インプットの関係を大事にして卒業までに、理想的な英語力を磨いていきたいです。

私を変えてくれた15分

2年 三上 紗季

私は、英語を話すのが苦手で、それを克服するためにESLに通っている。通い始めた頃は、先生の質問にYesかNoで答えるだけだったが、今ではそれに加えて自分の考えも言えるようになった。その成果が、今年の夏に参加したカナダ研修でも表れた。ホームステイ先のホストファミリーはもちろんのこと、中国人の方とも英語でコミュニケーションをとることができた。英語が話せることで、世界が広がったような気がした。



Kyle先生とESLを行う三上さん（写真右）

また、ESL では英検の2次対策をして下さるのも魅力的である。先生が面接官役となり、本番と同じシチュエーションで練習して下さい。2次試験は英語での面接なので、自分1人では対策しづらいが、ESLに通うことで、先生が正しい発音や表現についてのアドバイスをして下さい。そのおかげで、私は無事合格することができた。先生には、本当に感謝している。

ESLを通して、私は以前よりも英語が好きになった。ESLで得た知識を、日常生活でも生かしていきたい。

海外長期留学報告

オーストラリアでの生活

3年 河野 美咲

クイーンズランド工科大学 (オーストラリア)

(2016.10.10-2017.3.17)

2016年10月10日から2017年3月17日までの予定で、クイーンズランド工科大学に留学しています。留学を決めたのは2016年4月で遅めでしたが、学生として行ける最後のチャンスだと思い、行くことに決めました。ここでは、クラスについてと今ぶつかっている問題について書きたいと思います。

私の通うコースは、英語を学ぶコースなので世界中から様々な人が集まっています。私のクラスには中国、フランス、ブラジル、サウジアラビア、カタールからの学生がいて、国際色豊かです。皆英語を学ぶことに積極的なのでクラスは、とても明るくアクティブです。5週間1セッションの括りで、その間のテストの結果で、次のセッションで上のクラスに上がれるかが決まります。今のところ順調にクリアしていますが、次のクラスは上級クラスなので、このホリデー休暇のうちに出来るところまで力をつ

けて挑みたいと思います。

留学してみても一番の問題は訛りの強い英語です。もちろんアメリカ英語ともイギリス英語とも違うオーストラリア英語で、さらにクイーンズランド訛りが入っています。私はホームステイで生活をしているのですが、ホストマザーの訛りが強く言っていることが理解できないことが多々あります。分からないときに「今なんて言った？スペル教えて」と言うと知っている単語だったということも。この問題に関しては慣れるしか解決策はないので、積極的にホストファミリーや先生、現地の友達と話して徐々に慣れようとしているところです。

オーストラリアでの生活は日々勉強です。お店でオーダーするときもより自然な言い方はなんだろう？と周りの人がオーダーするときに聞き耳を立ててみたり、クラスメイトやホストファミリーと文化の違いで生まれる誤解で口論になったり。小さな問題にぶつかり、解決するたびにそれが自信に繋がっています。あと約3か月、精一杯吸収するつもりです。



クイーンズランド工科大学で学ぶ河野さん（後列右から五番目）

英語を話すことが自信になる

2年 後藤麻柚子

リーズ大学（イギリス）

（2016.10.3-2017.3.17）

「やりたいと思ったことには挑戦してみる。叶うまで諦めないこと。」これは、留学した私が一番伝えたいことです。誰もが聞いたことのあるありきたりな言葉ですが、簡単にできることではありません。しかし、これを達成したときに得るものは、必ず自信になります。私にとってそれが留学でした。

小学生の頃から教師になるのが夢で、進学するにつれ進路を中学校英語教諭に決めました。留学を決意したのは高校生のときで、海外での生活に憧れていたことがきっかけです。両親に反対された時もありましたが、必死に説得しました。

留学中の授業はただ先生の話聞くだけでなく、与えられたトピックに対して、生徒同士がお互いの意見を交換しあうことが多いです。意見はあっても英語で伝えるということが難しく、もどかしい思いもしましたが、練習すればできるようになります。課題は、ブログやビデオ撮影、プレゼンテーションなど様々なものがあり、幅広い英語表現を学びました。選択授業では演技を学び、言語の垣根を超えた感情の表現方法を習得しました。何よりも担当の先生がユーモアに溢れていて、毎日授業に行くのが楽しみでした。素敵な先生に出会い、新しいことを学ぶことができて幸せです。

寮では、毎日英語で会話をする機会があり、他愛もない会話がスムーズにできるようになりました。こういった会話の中で文化の違いを感じることも多々あり、日本では同年代の学生と英語で話すことが少なかったため、新鮮でした。週末や長期休暇中に、バス・電車をつかって気軽に観光でき

ることも、留学の魅力です。

留学する前は英語で話すことに不安を感じ、先生に英語で話しかけられるだけで慌てていましたが、今は英語に対する恐怖感がなくなり、楽しむことができます。大学で英文学を学んでいるからには、自信を持って英語を使えるようになりたかったので、この留学経験は自分を変える大きなきっかけになりました。



学期の終わりにお世話になった先生と撮った写真。充実した毎日をお過ごしました（写真右）

カナダ留学を振り返って

3年 佐藤 亜海
ウィニペグ大学（カナダ）
(2016.5.2-8.12)

大学入学前から、海外留学することを目標としていたこともあり、今回

の留学は、私にとってとても貴重で充実した3か月半でした。現地ではホームステイをし、ホストファザー、マザーと3人で生活をしていました。朝はそれぞれ仕事、学校へ行き、帰ってからは、その日1日のことを話しながら夕食を食べ、夕食の後と一緒に映画や日本のドラマを見たり、ボードゲームやテレビゲームをしたりするのが1日の流れです。毎週土曜日の夜は、ホストファザーの実家に行きます。みんなでデザートとコーヒーを用意して、映画を観るのが恒例でした。

学校は、ウィニペグ大学付属の語学学校に通いました。月曜日から木曜日は9時から15時、金曜日は9時から12時まで授業を受け、午後は自由参加のソーシャルアクティビティーがあり、ウィニペグにある社会施設など様々な場所を訪れました。具体的に言うと、午前中は、レベルごとに分けられた少人数のクラスでリスニングとスピーキングを中心に学び、午後のクラスは選択制のクラスで、月と水はリーディング、火木はIELTSの授業を選んで英語の4技能をバランスよく学べるように工夫しました。

英語を英語で学ぶ環境は、とても充実していたと思います。学ぶ過程においても、ネイティブの発話から学ぶことや気づくことが多くあり、また、基本的にクラスでは英語でしか話さず、英語で発言する機会や、発言せざるを得ない状況に置かれていたため、アウトプットの時間は日本にいる時とは比べられないほど多くありました。学校にいる時のみならず、家に帰ってもどこへ行っても、見るもの聞くものすべてが、もちろん英語なので日々が学習の毎日でした。ホームステイをしたことにより、より多くの人と関わることができ、たくさんの場所に出かけ、たくさんの経験ができました。貴重な時間を過ごせたことに感謝し、これからも英語の勉強に励んでいきたいと思っています。



最終日空港にてホストファミリーと（写真右）

リーズ大学での活動を通して

2年 佐藤 唯
リーズ大学（イギリス）
(2016.10.3-2017.8.6)

リーズでの生活が3ヶ月経過し、様々な活動を通して発見や学んだことがあります。特に有意義だと感じているのは、Intercultural Ambassadorでの活動と日本語を勉強している学生達と一緒に、プレゼンを行う活動です。

Intercultural Ambassadorでは、リーズ大学にいる先生方を含めて全ての人達の異文化理解を深めたり、交流を図ったりする為に調査を行い、どのようにすれば様々なバックグラウンドがある人達とお互い上手くやっていけるかを、提案します。私達のグループは5人のグループで、国籍ごとに考え方や感情の表現する方法が違うため、意見を1つにまとめる事が難しいと日々感じています。しかし、それは、私にとってとても貴重な経験だ

と思っています。そのおかげで、話し合いをするスキルが少しずつ上がっているような気がします。

日本語学科の学生とのプロジェクトでは、日本の文化を見直す機会が増えたり、グループのメンバーと友達になれたり、といったメリットがありました。その上、日本語を教える機会ができたことにより、将来日本語教師になるのも1つの選択肢として視野に入れたいと思うようになりました。

ミーティングがない休日や放課後は、いつもイギリスの友達と時間を過ごしており、そのことによって、リスニング力や授業では習わないような英語、またスピーキング力も上がって来たような気がしなくもありません。しかし、まだはっきりとした実感はありません。今後も沢山お喋りをして、英会話力を鍛えたいと思っています。そのイギリス出身の友達との会話は、皮肉や政治、社会に起こっている問題などについてなどが多く、会話について行くのが大変です。幸いにも優しいみんなに囲まれて、私がいけない度に、イギリスの政治制度や皮肉に込めた思いなどを丁寧に教えてくれます。最近新聞をチェックしたり、ニュースを見て世界で起こっているこ



Intercultural Ambassador のメンバーと

とを理解したりしようと心がけています。

残りの7カ月も積極的に様々な活動に参加して、新しい知識や考え方に触れていきたいと思います。

カナダ研修報告

発見の毎日だった海外研修

3年 橋本 楓

私が海外研修に参加した理由は、大きく分けて3つある。1つ目は、海外経験が少なかった為、もっと異文化を知りたいと思ったことだ。海外研修は、友人や家族と行く旅行と違い、観光だけでなく、語学学校に通い勉強しながら自分で実際にカナダの文化に触れることが出来る点や、ホームステイが出来るということに興味を持ったからだ。そして2つ目は、留学経験のある友人から刺激を受けたからである。留学経験のある何人かの友人に感想を聞いたところ、全員が共通して言ったことは「価値観が変わった」ということだった。私は、その「価値観が変わる」という感覚を自分で実際に訪れて、目で見て、肌で触れて経験したかった。最後に3つ目は、進路選択で悩んでいたため、この海外研修を通して何かを得たいと思い参加した。

3週間滞在したホームステイ先のホストファミリーは、今まで様々な国籍の留学生を100人以上受け入れてきた経験のある、とても明るく温かい家庭だった。ホストファザーは、幼少期から留学生を受け入れてきた家庭で育ってきたため、様々な国籍の人と関わり、異文化に触れることの大切さを自分の子供達にも教えてあげたいと思い、留学生を受け入れていると教えてくれた。ホストファミリーと関わる中で、何事にもまずはチャレンジしてみるという考え方を学んだ。ホストファザーが子供達に日頃から、

“Let's try. You can do it.”と言っていたように、私も“I can do it.”の精神で何事にも挑戦したい。

この海外研修を通して、語学学校で出来た友人、先生、そして3週間お世話になったホストファミリー、助けて頂いた現地の方々など、沢山の人のに出会うことが出来た。そして、何事もトライすれば出来るという考え方や、慣れない土地でも自ら言葉を発し、会話をすることでコミュニケーション能力の向上にも繋がった。ここで得た経験を生かし、どのような場所でも自分の力を最大限に発揮していきたい。



ホストファミリーと（写真右端）

カナダ研修

2年 渡邊 彩香

私が今回のカナダ研修に参加した理由は、自分が今まで勉強してきた英語がどこまで通じるのかを知りたかったからです。私は、出発の数日前から体調を崩し、当日までに回復しなかったため、約1週間遅れて1人でカナダまで行きました。病み上がりのままカナダへ行くことは、とても不安でした。しかし、具合が悪いことを忘れるくらい新鮮で、たくさん発見がある毎日でした。

私のホストファミリーは、明るく元気な家族でした。マザーもファザーも若く、いつも笑顔で話してくれました。特に、2人の兄弟はとてもやんちゃで、いたずらが大好きでした。ホストファミリーはベジタリアンだったので、肉料理はあまり出ませんでした。基本的に一品で、物足りないときもありました。カナダに行く前は、肉料理ばかりなんだろうなと思っていたので、こういう家庭もあると知ることができて良かったと思います。

語学学校の授業では、カナダの多文化社会や歴史などのテキストを音読し、設問を解いたり、文法やスラング、単語を勉強したりしました。ディベートをする時間もあって、たくさん英語を話す時間がありました。また、授業中には、みんなより1週間遅れた分を取り戻そうと、答えが間違っていたとしてもどンドン自分の考えを言うようにしました。なので、帰ってきた後は、リスニングとスピーキングが少し伸びた気がしました。授業の後のアクティビティでは、ヴィクトリアの街を歩いたり、アフタヌーンティーをしたり、毎日様々な場所に行きました。一番覚えているのは、バンクーバーからヴィクトリアに帰るフェリーから見たサンセットです。とてもきれいで、将来また自分で来てみたいと思いました。

たった2週間でしたが、たくさんのことを学びました。一番は、英語を



ヴィクトリアのダウンタウン

話すときには、イントネーションや音のつながり、リズムが大切だということ。これからは、文法だけではなく、発音も意識しながら英語を勉強したいと思います。

英語ボランティア活動報告

Reflections on the Seminar by Professor Paul Nation

Risako Senzaki

I took part in a seminar titled “How to Improve Vocabulary Learning in a Language Classroom,” led by Prof. Paul Nation, an emeritus professor of Applied Linguistics at Victoria University of Wellington, New Zealand. The seminar was

held on 10th September at Miyagi Gakuin Women's University. Students taking "English Seminar I & II" helped with the event as volunteers. We guided people who came to our university for the first time and welcomed all the participants at reception.

Through the presentation I learnt what is important in improving the quality of vocabulary learning. Prof. Nation promoted the idea of "the four strands"—meaning-focused input, meaning-focused output, language-focused learning, and fluency development—to make our learning well-balanced. Each strand should receive roughly equal amount of time in any language course.

Prof. Nation also mentioned that "linked skills activities" are important to make our learning effective. In a linked skills activity, the learners work on the same material or topic applying at least three successive skills. For example, learners (1) read the material, (2) listen to it, and then (3) write about it. There are several other combinations. The activity in each series ends with a fluency development activity, based on the previous practice in the other skill areas. The same words, expressions, and patterns are repeated. A benefit for teachers is that these activities generally require very little work to prepare and organize learning materials, while students do a lot of work. Linked skills activities can provide useful conditions for language learning and even for content learning.

Now I'm a university student, so I can take and choose classes to study English. However, after I graduate, my learning situation will change. I will have to think of ways to study English by myself. Attending this seminar at this point in my life was a very good opportunity for me.

I will use English for my job, so improving my English vocabulary skills is essential. I would like to occasionally get back to what I learned in this seminar in order to continue studying English after my formal education ends.

(4年 先崎りさ子)

JALTに参加して

1年 村上野乃香

私は11月25日から28日までの4日間、名古屋で開催されたJALT（The Japan Association for Language Teaching：全国語学教育学会）という学会の国際大会に、ボランティアで参加してきました。この国際大会では、研究発表、パネルディスカッション、ワークショップなどのプログラムがあり、全国の大学生約100名が、ボランティアとして運営の手伝いをしました。私がこのボランティアに参加しようと決めた理由は、全国から来る様々な国の外国人教員と交流したい、という漠然とした思いがあったからです。今回のボランティアは、期間は短かったものの、多くのことをインプットしアウトプットできた、とても良い機会だったと思います。



JALT名古屋大会に参加した宮城学院女子大学英文学科・国際文化学科のメンバーと村上さん（最後列右端）

私は、“Sings”というチームで道案内をする係を担当しました。“This way”と書かれた紙を持って名古屋駅前に立ち、会場までの道を案内したり、何階で何が行われているかを教えたりという仕事をしました。案内をする時はもちろん、学生の中での連絡も、英語で行われました。ネイティブスピーカーとの英語での会話や英文でのやり取りを通じて、自分の英語力に足りない部分を知ることができたと共に、これまで知らなかった表現を学ぶことができたと思います。また、他大学の学生の英語力の高さにも刺激を受けました。伝えたいことをうまく英語にすることができない私に対し、流暢に英語を使っている学生を見て、悔しい思いをすることもありました。しかし、その経験こそが、もっと勉強して話せるようになろうと思わせてくれるきっかけにもなりました。

「ネイティブスピーカーと交流したい」という、漠然とした理由から参加した今回のボランティアでしたが、私が思っていた以上に、英語を話す楽しさや英語の必要性を学ぶことができました。また、学内では決して学ぶことができなかった経験をする事ができたと思います。今後は、英語の勉強に励むことはもちろん、様々な国際ボランティアに参加し、視野を広げていこうと思います。

2016 年度英文学科活動報告



2016 年度研究・教育活動報告

遊佐典昭

研究活動

今年度は、科学研究費補助金による研究として、関係節の言語処理に関する実験の準備を行っている。また、言語の社会性、言語学と語学教育に関する論文を国外の専門誌に投稿中である。また、研究成果として、共著 3 冊、学術論文 1 本、専門事典 1 冊を出版した。また、分担者として参加している科研に関しても、科研メンバーと意見の交換を行い、次年度以降に研究成果を発表したいと思っている。

論文・著書

1. 遊佐典昭 (印刷中). 「濃厚味ネーミングの秘密」. 高見健一他 (編) 『〈不思議〉に満ちた言葉の世界』 226-230. 開拓社.
2. 遊佐典昭 (2016) 「ヒトは構造が大好き:ことばの習得」. 中島平三 (編) 『ことばのおもしろ事典』 75-85. 朝倉書店.
3. 遊佐典昭 (2016). 「第二言語習得」. 小泉政利 (編) 『ここから始まる言語学プラス統計分析』 162-165. 共立出版.
4. Snape, N., M. Umeda, J. Wiltshier and N. Yusa. (2016). "Teaching the complexities of English article use and choice for generics to L2 learners." *Proceedings of Generative Approaches to Second Language Acquisition Conference*. 208-222.

辞書項目執筆

遊佐典昭 (2016) 原口庄輔・中村捷・金子義明 (編) (2016) 『増補版 チョムスキー理論事典』 項目執筆、研究社.

学会口頭発表

Neal Snape, Noriaki Yusa, Mari Umeda and John Wiltshier "Do SLA findings on meaning translate to the L2 classroom? The case of articles." (oral presentation as part of the MiLL Network colloquium entitled *Routes into meaning: L2 acquisition and the language classroom*) *European Second Language Acquisition 2015*, Aix-en-Provence, France. 2015.8. 28.

社会活動

1. 日本学術振興会より特別研究員等の審査に係る顕彰をうける
2. リーズ大学（英国）、教授昇任外部評価者
3. 日本英語学会評議委員
4. 日本第二習得学会顧問
5. 言語科学学会企画委員
6. *Journal of Neurolinguistics* 論文査読者
7. *Generative Approaches to Language Acquisition–North America (GALANA)* 発表論文査読者

科学研究費の受領

1. 挑戦的萌芽研究（代表）
2. 基盤研究（A）（分担）
3. 基盤研究（B）（分担）

教育活動

今年は、例年通り英文学科の『ことばと人間』『英語音声学』『英語学基礎セミナー』『英語学講読』『心理言語学』『卒業論文セミナー』に加えて、他学科で『基礎演習』を担当した。『基礎演習』では、大学において必要な技術の習得を身につけることに力点をおき、レポート作成法、プレゼンテーションの基本を教授した。英文学科の科目は、すべての科目において、思考を鍛えることに意識をしながら講義を行った。前期の授業評価によると、どの科目も受講生からの評価は高く、英語に対して新しい視点を獲得することができたという好意的な評価が多かった。また、『英語学基礎セミナー』では、本年度の試みとして、英文レポートを締め切りの一ヶ月前に完成してもらい、一ヶ月間を推敲にあてることで、英文を客観的にみる訓練を行っている。

学外非常勤

東北大学文学部・文学研究科「現代言語学各論Ⅰ」「現代言語学各論Ⅱ」（集中講義）

増富和浩

研究活動

英語名詞句の派生過程に関して、ミニマリスト統語論的なアプローチを用いて得られた前年度までの研究成果をさらに発展させ、Chomsky (2013) 等が問題提起している統語構造におけるラベリング・アルゴリズムの観点から名詞句の派生過程を再検証し、従来のフェーズ理論において問題であったフェーズ不可侵条件を支持する理論的根拠について新たな知見を示し、『人文社会科学論叢』第 26 号（宮城学院女子大学人文社会科学研究所）において発表することとした。

論文

増富和浩「統語構造におけるラベリング・アルゴリズムと英語名詞句の派生について」『人文社会科学論叢』第 26 号、宮城学院女子大学人文社会科学研究所、2017 年 3 月。

社会活動

桜の聖母学院高等学校からの要請に応え、出張講義を行い、受験勉強では経験することの少ない言語現象としての英語の面白さについて紹介した。また、大学での英語学習の狙いや進め方に関して、高校までの英語学習との違いなどを例示しながら、大学進学への具体的なイメージ作りに役立つようにという点にも配慮して指導を行った。

教育活動

今年度より英文学科 1 年生を対象とした GT (grammar test) プログラムを担当することとなり、英文学科生に要求される英語運用能力を保証するために、その基礎となる英文法力を 1 年次に養成することを狙いとしたカリキュラムの運営を行った。本プログラムでは、『マーフィーのケンブリッジ英文法 (初級編)』を 1 年次の共通教材として使用し、学生の自律的な学習を前提としながら、「Grammar 1・2」(1 年次必修科目) の授業を通して、学年全体の英文法基礎力を一定以上のレベルにすることを目指して指導を行った。さらに、GT プログラムを AO 入試合格者や推薦入試合格者の入学前学習、入学時の placement test による成績別クラス編成、および前期末の GT テスト結果による後期クラス編成とも連動させることで、

個々の学生の学習状況に合わせた効率的な指導ができるように配慮した。

「Advanced Grammar 1・2」(3年次必修科目)では、入学後2年間で身に付けた英文法力を実際の英語運用に応用できるように、正確さに加えて表現の幅を広げることを狙った指導を行った。また、「英語学基礎セミナーⅠ・Ⅱ」(3年次必修科目)では、英語学で取り扱われる研究テーマを概観した上で、各学生が自ら設定したテーマで学年末の研究レポート(英文)が書けるように、具体的・個別的な指導を行った。さらに、各学生への指導においては、今年度の学習成果が4年次の卒業論文作成への意欲に結びつくようにも配慮した。

John Wiltshier

研究活動

This year's main projects were researching the use of Learning Catalytics on mobile phones in the classroom and developing a Read-Listen-Write-Speak approach to classroom teaching which makes reference to The Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) and Global Scale of English (GSE) objectives. I am currently using the results of both of these projects to write materials for a new four level textbook series due to be published in summer 2017.

研究発表

Wiltshier, J.M. (2016, July). "Practical Ways to Implement Active Learning in the Classroom". Nellies Teacher Training Workshops, Tokyo and Osaka.
 ----, & Helgesen, M. (2016, November). "Activities with Principles". JALT International Conference, Nagoya.
 ----. (2016, February). 「理解可能なインプットの創作及びタスクとの供用、日本の小学校英語クラスにおいて」山形 JALT 学会。

教育活動

In December 2016, as fieldwork for the British Life and Culture course, Ms. Yoshimura, Mr. Kobayashi and I took all 1st year students on an educational visit to British Hills in Fukushima. The visit had three purposes: 1. to learn about British life; 2. to be an orientation to study abroad; 3. to help students make new

friendships. Over the weekend the students learnt about British table manners, tried some traditional cooking and acted out a shortened version of Shakespeare's *Romeo and Juliet*.

“Reading Activity”: a new course was started in April as part of the new curriculum. The main component of the course is Extensive Reading. The course is designed to help students to improve their reading fluency while receiving increased amounts of comprehensible input.

社会活動

This year from October through to December as part of my 児童英語 course, I continued the tradition of inviting students from Sakuragaoka Elementary School to attend English classes in the English department. One class of 1st year and one class of 2nd year primary school students were taught by eight English department students. The 45 minute classes were held on nine consecutive Tuesday evenings and ended with a Christmas party on the final day. It was pleasing to see how well the student-teachers developed and how much English the children learnt in such a short time.

Earlier in the year a most enjoyable Summer College was held during which I ran an active learning English class for primary school children.

Cory Koby

研究活動

In my first year here at MG, I have focused on two main areas of research. First, I completed the quantitative and qualitative data analysis from my study of Japanese teachers of English in high school, which formed the basis of the dissertation submission for my Master of Arts. I expect to publish the results of this study in 2017. Secondly, I have been involved in the development, implementation, and evaluation of a new Extensive Reading (ER) program, “Reading Activity”, as part of our new curriculum which commenced in April of this year. This is a major undertaking by our department, involving the purchase of hundreds of new books, and the introduction and maintenance of a Learner Management System (LMS) to collect and verify student reading activity which,

over the course of the two-year program, requires student to read a minimum of 415,000 words. This core curriculum component is designed to help students to improve their reading fluency and speed while receiving increased amounts of comprehensible input.

研究発表

- Koby, C. (2016, October). "The Anatomy of an Extensive Reading Syllabus". JALT Extensive Reading Special Interest Group 2016 Seminar, Nagoya.
- (2016, October). "Communicative Language Teaching in Japanese High School: Where are we now?" KoTESOL 2016 International Conference, Seoul, Korea.
- (2016, October). "Communicative Language Teaching in Japanese High School: Where are we now?" 2016 Tohoku ELT Expo, Sendai.
- (2016, November). "Happiness is a Warm Pen: Creative writing in an EFL classroom". Positive Psychology in ELT Conference, Sendai.
- (2016, November). "The Anatomy of an Extensive Reading Syllabus". JALT2016 42nd International Conference, Nagoya.
- (2016, November). "Writing Outside the Box: Creativity in the EFL classroom." JALT2016 42nd International Conference, Nagoya.

論文

- Koby, C. (2016). "Writing Outside the Box: Creativity in the EFL classroom". In P. Clements, A. Krause, & H. Brown (Eds.), *Focus on the Learner*. Tokyo: JALT.

教育活動

In August 2016, as part of the Overseas Study class, Ms. Tashima and I escorted a group of 20 students to Victoria, Canada. The aim of this study tour was to immerse students in Canadian culture and an English environment with the expectation that they will rapidly improve both communicative and linguistic skills. Additionally, in December 2016, as fieldwork for the British Life and Culture course, Ms. Yoshimura, Mr. Wiltshier and I took all 1st year students on an educational visit to British Hills in Fukushima. Whilst on this short trip, students engaged in a variety of activities designed to improve both English language skills and cultural awareness of British life. In addition, an overarching

goal of improving group cohesion amongst the freshmen was achieved.

社会活動

In September 2016 MGU hosted a language teaching seminar featuring Paul Nation, a world-renowned English education expert, which was open to the general public. I was, along with Ms. Kimura and Mr. Helgesen, one of the principal organizers of this event, which was attended by 110 language professionals from within MGU, as well as all over Japan.

鈴木 雅之

研究活動

この数年、東北6県と新潟県を含む7県に住む17世紀—19世紀イギリス文学・文化研究者の会——東北ロマン主義文学・文化研究会 (Tohoku Association for Romantic Studies, 略称 TARS) ——の運営に携わっています。毎年、7月にシンポジウムを、12月にはふたつの研究発表を行い、時には海外の研究者の講演会も開催します。TARSの研究誌『東北ロマン主義研究』(Tohoku Romantic Studies, 略称 TRS) 第3号 (2016.12) を刊行しました。新しく開設したHPのサイトは下記の通りです。<https://sites.google.com/site/tohokuromanticstudies/>

論文

1. 「イギリス・ロマン主義時代の『古典観』」 逸身喜一郎・田邊玲子・身崎壽編著『古典について、冷静に考えてみました』岩波書店、2016年9月。61-78頁。
2. 「顕微鏡的博物学とシャーロット・スミス——『詩の手ほどきについての会話集』(1804)を中心に」『西山清先生退職記念論文集』、音羽書房鶴見書店、2017年3月。256-74頁。
3. 「蒐集・分類された巡礼たち—《チョーサーのカンタベリーへの巡礼者》を読む」『英文学会誌』第45号、宮城学院女子大学英文学会、2017年3月。

講演 (Keynote speech, invited)

“War and the Origin of Painting in Felicia Dorothea Hemans”. The Forty-Fifth

Wordsworth Summer Conference. Rydal Hall, Cumbria, England. August 17 2016.

研究発表（招待）

“Somewhat in the Shandean vein” —ブレイクの “An Island in the Moon”. 日本英文学会第 88 回大会、京都大学、2016 年 5 月 29 日。

社会活動

日本学術会議連携会員

日本英文学会東北支部理事

イギリス・ロマン派学会理事

東北ロマン主義文学・文化研究会（TARS）代表

科学研究費の受領

博物学とイギリス・ロマン主義文化の研究（基盤研究 C、代表）

教育活動

「英米文学作品講読」では、*Christina Rossetti: Selected Poems*, ed. R. W. Crump (Penguin Classics, 2008) を、毎回数名の担当者を決めて発表してもらいました。作品を声にだして読み、英語を文法的に正しく読み日本語訳を付すことを基礎作業としました。19 世紀イギリスを代表するこの早熟な女性詩人の 10 代から 20 代にかけての才気あふれた作品に舌を巻き、自己韜晦する宗教詩に頭を悩ました。英語の基礎的文法力を鍛えるだけでなく、英語という言葉の豊穡性・多義性に気づきさらに優れた詩とはどのようなものかを身体で感じてもらうことを発表者には求めました。「英文学史 I, II」では、時代の流れ（政治・経済・宗教）と文学作品の相関関係に注意を払いながら、時折 DVD による文学作品の映画を挟み、Chaucer から T. S. Eliot までを前期と後期とに分けて講義しました。前期・後期、それぞれ試験を 2 回行うことで 1 回の試験範囲を短くしました。また *Gulliver's Travels* (1726) を読み、日本語によるレポート（A4 で 3 枚）を課しました。「英米文学・文化研究セミナー」では、昨年、一昨年度に引き続き Charlotte Smith, *Conversations Introducing Poetry* (1804) を精読しました。英語が難しい作品なのでまずは文法的に正確に読む訓練をしました。詩と科学（博物学 Natural History）というふたつの文化の衝突と融合がどのような表現を生むかを学生とともに考えました。

吉村典子

研究活動

ウィリアム・モリス没後 120 年にあたる 2016 年は、その記念講演等を各所で行った。また、ウィリアム・ド・モーガン没後 100 年にあたる 2017 年にむけては、彼とヴィクトリアン・アートに関する著書出版のための追加調査と執筆、および、この 15 年の原稿の加筆修正を中心に進めた。これについては、宮城学院女子大学出版助成を受け、2017 年 3 月に淡交社より出版を予定している。

論文

吉村典子「イギリス 19 世紀の芸術と社会 ―社会主義にむかう工芸家たち―」、『変革のアソシエ』、社会評論社、2017 年 1 月

吉村典子、「メアリ・セトン・ワッツとサリー州の「ギルド」―慈善から社会的企業へ―」『英文学会誌』第 45 号、宮城学院女子大学学芸学部英文学会、2017 年 3 月

吉村典子、「19 世紀イギリスのステンド・グラス―モリス商会の仕事を中心に―」『宮城学院資料室年報 信・望・愛』第 22 号、宮城学院資料室、2017 年 3 月

学会口頭発表・招聘講演会

吉村典子、「ウィリアム・モリスとイギリスの室内装飾」、ウィリアム・モリス没後 120 年&フォーライフ 40 周年記念展・講演会、盛岡赤レンガ館、2016 年 11 月

吉村典子、「19 世紀のデザイン改革運動とステンドグラス」、国際公開シンポジウム（宮城学院 130 周年記念企画）「ステンドグラスとはなにか照らされる歴史・時代・空間」、宮城学院礼拝堂、2016 年 12 月

吉村典子、「モリス商会の仕事」、意匠学会デザイン史分科会、大阪大学、2016 年 12 月

社会活動

- ・ 意匠学会、国際交流委員
- ・ The International Conference on Design History and Design Studies 査読委員
- ・ 河北新報連載「食の泉」に関する講演会 / レクチャーの実施と出版協力
(東北大学医学組織培養室同窓会・2016年8月、せんだいメディアテーク・2016年11月、宮城学院女子大学編『食の泉』河北選書より出版・2016年11月)

教育活動

本誌巻末の担当授業での教育活動を中心に行った。その中で、本年度は「イギリスの生活と文化」の授業の一環として、1年生全員が参加する国内英語合宿を行った。英国演劇や食についての英語講座での学習、英語母語者との交流を通してのアクティヴ・ラーニング、一学年全員参加の合宿形式により学生間の親睦をはかること等を主な目的とした。実施後には、本年度の担当教員 (Wiltshier, Koby, 吉村) と参加学生とで意見交換を行い、概ね満足度が高いことを確認し、改善を加えながら、次年度以降も、1年次の行事の一つとして継続することとした。

田島優子

研究活動

前年度に引き続き、19世紀アメリカン・ルネサンスの作家ナサニエル・ホーソーンの作中にみられる病の隠喩に着目して研究を進めているほか、来年度より学内の人文社会科学研究所において共同研究を開始することを見据え、モダニズム作品における「ノスタルジー」という観点からの研究にも着手しているところである。

論文他

1. 「エイルマーの掲げる「高貴な」目標—ナサニエル・ホーソーンの「瘧」における精神と物質の問題をめぐる」『英文学会誌』第45号、宮城学院女子大学学芸学部英文学会、2017年3月。
2. 書評：成田雅彦、西谷拓哉、高尾直知編『ホーソーンの文学的遺産—ロマンスと歴史の変貌』、『フォーラム』第22号、日本ナサニエル・ホ

ーソーン協会、2017 年 3 月。

社会活動

1. 日本アメリカ文学会東北支部役員（会計）
2. 日本英文学会東北支部役員（大会準備委員）

教育活動

今年度の「英米文化・文学基礎セミナー」では、19 世紀-20 世紀の主要なアメリカ文学の作家（Kate Chopin, Nathaniel Hawthorne, F. Scott Fitzgerald, Truman Capote など）によって執筆された短編小説を取り上げた。精読を通してそれぞれの作品を深く味わうようにしたことに加え、今年度は学生同士で作品内容に関するグループ・ディスカッションによる考察をしてもらい、それをテキストにある内容を根拠として示しながら論理的に説明／発表してもらおうという取り組みも重点的に行った。今年度の基礎ゼミでは議論が活発に行われ、高い積極性と意欲が見られたのが印象的で、説得的に順序だてて説明するという一年を通して進歩が感じられた。

「英米文学研究（19-20 世紀）」では Ernest Hemingway の短編小説を購入した。作品の内容についていくつか考察すべき論点をあげ、授業の終わりにその問いに対する各自の考えをコメントシートという形で記し、提出してもらおうようにした。さらに評価（採点）をして次の授業で返却するとともに、学生の中から出てきた重要な指摘や優れたコメントを紹介するようにした。そうすることで学生が集中して授業に取り組むようになったことに加え、根拠を示して論理的に文章を構成するという点に関して、一定の成果が見られた。学生が出した優れたコメントを含め、授業の中で教員が解説したことを、上手く咀嚼して自分の言葉でまとめることができるようになってきた学生が多いと感じたが、学生自身で論点とすべきものを見つけれられるようにすることは、これからの課題だと感じた。

2016 年度 英文学科講義題目

英文学科専任教員

遊佐典昭

ことばと人間
英語音声学
英語学講読
心理言語学
英語学基礎セミナー

増富和浩

Grammar
Advanced Grammar
英語学基礎セミナー

鈴木雅之

文学作品講読
イギリス文学史
英米文化・文学基礎セミナー
英米文化・文学研究セミナー

吉村典子

イギリスの生活と文化
Intermediate Reading
イギリス文化史
英米文化・文学基礎セミナー
英米文化・文学研究セミナー

田島優子

Intensive Reading
Intermediate Reading
Overseas Study Preparation

Overseas Study

英米文学研究 (19-20 世紀)
英米文化・文学基礎セミナー

John Wiltshier

Listening & Vocabulary
イギリスの生活と文化
英語学基礎セミナー
児童英語教育

Cory Koby

Reading Activity
Intermediate Reading
Intermediate Writing
Intermediate Listening
Current English

非常勤教員

阿部裕美

英米文化・文学研究セミナー

岡田毅

語法研究
コーパス言語学

金丸英美

Writing
Intermediate Writing

金子義明

Advanced Grammar
英語学セミナー

菅野幸子

文化交流論

木口寛久

生成文法

木村春美

英語学セミナー

久保田佳克

Intensive Reading
Intermediate Writing

熊谷優克

英米文化・文学研究セミナー

小泉政利

日英語比較文法論
英語学セミナー

越川芳明

英米マスメディア論

佐々木誠逸

Writing
Intermediate Reading

佐藤 恵

英米小説の世界

島 越郎

Advanced Grammar

清水菜穂

アメリカ文化史
アメリカ文学史
英米文化・文学研究セミナー

杉山 恵

Writing

鈴木美津子

英米文化論講読
英米文学研究 (17-18 世紀)
英米文化・文学研究セミナー

千種眞一

英語の歴史
英語学セミナー
社会言語学

那須川訓也

社会言語学

坂内昌徳

Intensive Reading
英語科教育法 (2 年生)

福地和則

Grammar
英語教材研究
英語科教育法 (3 年生)

藤田 博

英米演劇の世界

英米文化・文学研究セミナー

劉 寧

外国語としての日本語

Daniel Eichhorst

Intermediate Speaking

Robert Green

Speaking

アメリカの生活と文化

Translation

Barry Kavanagh

Speaking

Intermediate Speaking

Bruce Leigh

Writing

Intermediate Writing

Adrian Leis

Speaking

Intermediate Writing

Jerry Miller

Speaking

Discussion Seminar

Gerald Muirhead

Intermediate Listening

Intermediate Speaking

Anne Thomas

Writing

Discussion Seminar

Matthew Wilson

Intermediate Speaking

文化研究（オーストラリア・カナダ）

2016 年度 英語英米文学専攻講義題目

✎ 英文学科専任教員 ✎

遊佐典昭

英語学演習（心理言語学）

木口寛久

英語学特殊講義（統語論・意味論）

鈴木雅之

英米文学特殊講義（戯曲・詩歌）

吉村典子

英米文化論特殊講義（文化論）

John Wiltshier

英語学特殊講義（児童英語教育）

✎ 非常勤教員 ✎

Bruce Leigh

英語コミュニケーション

2016 年度 卒業論文題目

※ 遊佐ゼミ (英語学)

- 佐浦 理穂 …… Passivized Unaccusatives and Universal Grammar
柳田 真里 …… Extraposition from the Subject: Left-handed Analysis
小向 志歩 …… Sound Symbolism in Japanese and English
斉藤 友梨 …… English Articles Choice by Japanese Learners of English:
Speciality and Presuppositionality

※ Wiltshier ゼミ (英語学)

- 浅場 理佳 …… Vocabulary Learning and Teaching
小林 絵里 …… Effective Extensive Reading Programs in the Classroom:
Case Studies

※ 鈴木ゼミ (英米文化・文学)

- 高橋あず紗 …… 詩人と鳥たち—19 世紀詩人たちが鳥に託した思い
村岡 菜奈 …… *Alice's Adventures in Wonderland* における “Nonsense”—
意味をなさない面白さとは
渡辺 成美 …… イギリスの四季の詩

※ 吉村ゼミ (英米文化・文学)

- 倉 瑞希 …… 英国茶文化の成立過程と多面的発展
栗田芙生香 …… イギリスのタウンハウス—18-19 世紀中産階級の暮らし
高橋このみ …… 『草花紋様の装飾』から見る A・W・N・ピュージンの
思想と実践
千田 怜弥 …… 執事という存在—19 世紀のイギリスの社会と文化

- 渡部莉緒菜 …… コルセットとは—19 世紀イギリスの女性と社会
- 岩間 香南 …… 真珠と男性服—女王をめぐるチューダー朝の宮廷文化
- 植木 みほ …… 喫茶と空間—18 世紀から 19 世紀のイギリスにおける
茶文化が室内装飾に与えた影響とは
- 岡本 彩音 …… ヴィクトリア時代のファッション—シャルル・フレデリック・ウォルトの人生と表現
- 齋藤日花里 …… English Country Houses in the Eighteenth Century: Through the Noble Lifestyle and the Adam Style
- 齋藤 美咲 …… Henry Holiday, Stained Glass, and the Gothic Revival
- 佐々 春菜 …… Georg Friedrich Händel—イギリスにおけるヘンデルの音楽
- 佐々木晴菜 …… The Relation between Tea Tableware and the British People in the Eighteenth Century
- 渋谷 侑樹 …… ジョン・ウォーターハウスの世界—絵画の中のモチーフが作り出す関係性
- 鈴木佳菜絵 …… William Hogarth and London's Children: What Did He Leave Us?
- 高橋 奈央 …… ウィリアム・モリスのデザイン—「デイジー」におけるパターンの考察
- 東海林垂季 …… ガートルード・ジーキルとコテージガーデン

★ 田島ゼミ (英米文化・文学)

- 大久保美涼 …… 友情という選択—『ハックルベリー・フィンの冒険』における Huck の良心をめぐる
- 鹿又 朱夏 …… エドナの正体—ケイト・シヨパンの『目覚め』における女性の解放
- 亀井 優果 …… ナサニエル・ホーソーン『ロジャー・マルヴィンの

埋葬』における悪事への共感

佐々木麻衣 ……エドガー・アラン・ポーの“The Black Cat”と“The Tell-Tale Heart”における恐怖

佐藤 葵 ……トルーマン・カポーティの『ティファニーで朝食を』におけるホリー・ゴライトリーの価値観の変化

高橋 幸代 ……ディックの人生—『夜はやさし』に読む「生」を諦めないことの大切さ

長谷川文字 ……ナサニエル・ホーソーンの『緋文字』におけるパールの人間性—父親コンプレックスを抱くパール

日野 聖子 ……早熟なホリーに隠された本当の姿—トルーマン・カポーティの『ティファニーで朝食を』を読む

山口 結加 ……F・スコット・フィッツジェラルドの「冬の夢」におけるデクスターの夢と絶望

桔梗 可菜 ……The Death of Edna in *The Awakening* : A Woman Who Become Aware of Her Independent Spirit and Love

佐々木美帆 ……The Message of Gatsby's Death in *The Great Gatsby* : Why Gatsby and Daisy Could Never Be Together

佐々木莉奈 ……F. Scott Fitzgerald の *The Great Gatsby* におけるデイジーの決断

村上うらら ……F・スコット・フィッツジェラルドの *The Great Gatsby* におけるギャッビーとデイジーの関係

英文学会活動報告

6月7日、1月5日、1月12日

声と話し方講座「伝える・伝わる声と話し方基本講座」
(1年生対象) 赤間裕子氏

6月22日 英文学科 OG による講演会

シリーズ「航空業界①」—グランドスタッフ編
壇崎希氏

9月26日 TOEIC セミナー

鈴木真太郎氏

10月7日 英文学科 OG による講演会

シリーズ「航空業界②」—キャビンアテンダント編
佐藤由紀氏

11月7日 英文学科 OG による就職講演会—英会話学校編

大内亜梨沙氏

12月1日 スペシャリスト講演会①

「アニメ『黒執事』『英国戀物語エマ』にみる 19 世紀イギリス」
村上リコ氏

スペシャリスト講演会②

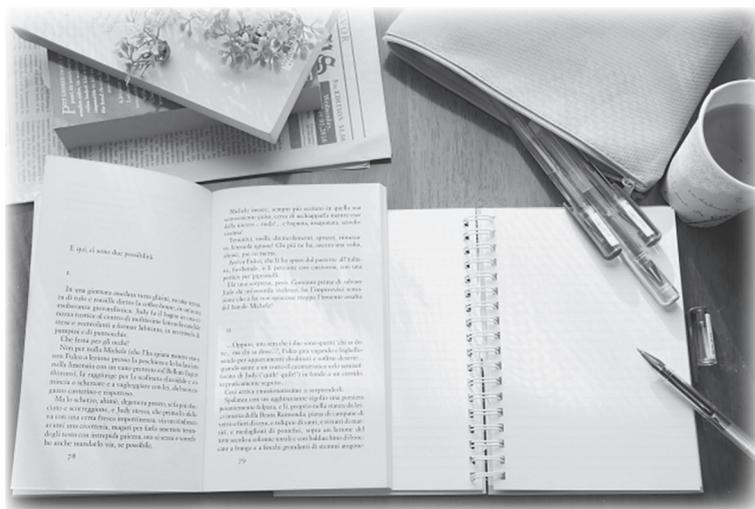
「英国カントリーハウスと家事使用人」 村上リコ氏

12月6日、12月13日、12月20日

声と話し方講座「面接対策・話し方実践講座」
(2・3・4年生対象) 赤間裕子氏

TOEIC

—私の勉強法—



「ながら」勉強でスコアアップ

4年 桔梗 可奈

TOEICスコア：755

私は地道に机に向かい勉強することが苦手です。TOEICの試験が近づいても、集中して勉強することが出来ませんでした。そんな私がここまでスコアを伸ばすことが出来たのは、留学経験を経てからでした。私は、大学三年生の夏からおよそ一年間、アメリカ合衆国にある大学へ通いました。普段の会話はもちろん、授業やテストも全て英語でした。そんな中で私の英語力は向上したのだと思います。

まず、英語を理解するためには、出来るだけたくさんの単語を覚えなければいけません。教科書を読みながら、分からない単語にはこまめにマーカーを引き、ノートにそれを書き写し覚えました。また、ネイティブスピーカーの友人と話しながら、分からない単語が出てきた時には、単語のスペルと意味を尋ね、その単語を会話の中で使えるように考えながら話をしました。そのようにしている内に、語彙数が増えていったように思います。また、私は文学のクラスを受講しており毎日英米小説を読んでいます。初めは分からない単語をひとつひとつ拾って読んでいましたが、それでは完読するのに時間がかかりすぎると分かり、ある程度文章を推測しながら読むようになりました。それが速読能力に繋がったと思います。

そして何より、英語は毎日聞いていたので、リスニング力はかなり向上していました。しかし今私が思うのは、聞くだけでは向上しないということです。聞いて覚えたフレーズを、実際に自分で使えるまで発音することも、実に大切です。どれだけ頭で覚えていると思っていても、実際にTOEICテストで「聞いたことはあるが、意味が思い出せない」では意味がありません。聞いて覚えたことも書いて覚えたことも、何度も口に出し

て自分に定着させると良いと思います。

私は、常に英語が飛び交う生活の中で学習していたので、日本で勉強するのはとでは少し違いますが、自分自身の意識を変えたり環境を整えるだけで、TOEIC の学習ははかどると思います。例えば、大学の授業で使っているテキストから分からない単語を拾ったり、洋書を読んでみるのもいいと思いますし、洋画を英語音声、日本語字幕で何度も観たり、洋楽を聴いてそこからフレーズを学び ESL で実際に使ってみることも、良い学習になると思います。毎日インターネットで CNN ニュースや BBC ニュースをチェックし、常に英語に触れる環境を作ることも大切です。

最初に述べた通り、私は机に向かって勉強することが苦手です。だからこそ、教科書を読みながら本を読みながら友達と話しながら、といった「ながら」勉強でより楽しく、効率的に勉強する方が合っているのだと思います。もし私と同じく机に向かうことが苦手な方は、是非「ながら」勉強を試してみてください！

自分なりの勉強法

1年 高橋あかり

TOEIC スコア：755

私は、今回初めて TOEIC を受験しました。あわよくば 600 点くらい取れたらいいな、という程度だったため 755 点という点数にはとても驚きました。ここでは、僭越ながら私の TOEIC 勉強法を書かせていただきたいと思います。

まず、TOEIC に向けて本格的に勉強を始めたのは夏休みでした。それまでは授業や課題で精一杯だったため、まとまった時間が取れるように

なってから、少しずつ対策を行っていきました。具体的には、パート別に問題や勉強法が載っている参考書に取り組み、TOEICの特徴をつかんでいくという感じです。リスニングにおいては、音声の速さに圧倒されて慣れが必要だと痛感し、リスニングだけの問題集を使って練習を重ねました。夏休みの間、なるべく毎日これらに取り組むことで、パートごとの解き方を身につけられたと思います。

リーディングとリスニングを通して2時間で行う、本番形式の問題を実際に始めたのは10月頃でした。が、時間内に解き切る練習をするためにはもう少し早めに取り組んだ方がいいと感じました。何回か本番と同じように解くことで、「何分までにこのパートを終わらせよう」という方針が見えてくると思います。

ここまで、私がTOEICを受験するまでの勉強の流れを振り返ってみました。このような勉強法は、あくまで一例なので、他にもたくさんのやり方があると思います。ずっと続けられるような、自分に合った勉強法を見つける必要があります。

しかし、何よりも大切なのは、「やるべきことをやる」ということだと思います。宮城学院の英文学科には、英語力を高めるためには十分な授業が揃っています。ですから課題や小テスト、期末考査にきちんと取り組むことで、自ずと英語力は身についてくると考えています。まずは、目の前にある「やるべきこと」をこなしたうえで、TOEICに向けて自分なりに勉強していくのが理想的かもしれません。

私は今回のTOEICを一つの通過点として、さらなるスキルアップを目指し英語学習に励んでいきます。

わたしの TOEIC 学習法

3年 丹治 瑞穂

TOEIC スコア : 740

私は元々英語がすごく好きなわけでもなく、得意なわけでもなく話せるわけでもなく、成績もごく普通でした。そんな私が TOEIC を意識し始めたのは、大学 2 年生の冬でした。ドイツに留学することを考えていた私に、父は英語ができなければ通用しないと言ったのです。そこで私は、TOEIC を初めて意識するようになりました。今まで全く良いスコアを取得したことがない私が、まず目標にしたスコアは 700 点、期間は次の 6 月の試験までの 3 か月弱でした。今までしっかりと TOEIC 対策をしたことがない私は、何から手を付けるべきなのか全く見当もつきませんでした。そこで、まずは本屋さんへ行き TOEIC 問題集を一冊買い、そしてそれを丸々解いてみたのです。結果はぼろぼろでしたが、同時に私に足りない部分もたくさん見えてきました。それから、私の足りない部分（特に語彙力とイディオム分野）を強化しようと考えたのです。この分野は、言語を学ぶ基礎であるため、知識が増えるほど長文読解やリスニングにも役立ちました。さらに、基礎文法も授業等で使った英文法書を一通り確認しました。全てに共通して言えることは、インプットだけではあまり意味がないということです。インプットしたものをアウトプットする、そうやって循環を作った方が、脳はより早く正確に覚えてくれます。幸いなことに、私はたくさんの留学生の友達や、外国に住む友達がいたので、多くのアウトプットの機会を得られました。ある時はメールをしたり、ある時は電話をしたり、そんなことをしているうちに、スピーキングやリスニング能力は、向上したのだと思います。また会話の時、英語→日本語→英語という変換をいちいち脳の中でせずに、英語→英語という変換もできるようになりました。これは、

机にただ向かっていては身につかないことだと思います。私は、できるだけ机とただ向き合うことを避けたかったので、インターネットを利用しました。現代では、どこにいても、動画サイトで簡単に字幕付きの外国の番組を鑑賞できます。ドラマ、映画なども有効だとは思いますが、私が利用したのはニュースです。正しく丁寧な言葉遣いで、しっかりと組まれている文章は、英文法を理解するときにとっても役立つと思います。さらに時事ニュースも知ることができたので一石二鳥だったと思います。もっとも言語の勉強は、楽しむことが一番です。ストレスが溜まっている状態では、脳が快く情報収集をしてくれません。私は、TOEICの勉強を楽しみながら行いました、それが今回の結果につながったのだと思います。その後、無事にドイツに留学することもでき、ドイツ語の学習もより捗り、ますます言語を学ぶ楽しさを知りました。

TOEIC600 点以上を取得し、単位を申請した人は他に次の方々があります。
佐々木華（1年）、松木紀花（1年）、阿部沙彩（2年）、阿部優香（2年）、
小西美希（2年）、斉藤梨香（2年）、菅井理沙（2年）、渡邊彩香（2年）、
大友里穂（3年）、草薨さくら（3年）、高橋泉水（3年）、佐藤亜海（3年）、
工藤佳奈子（3年）

編集後記

『英文学会誌』第
45号をお届けします。
ご寄稿いただいた方々には心
より御礼申し上げます。今年は宮
学の130周年ですから本誌でも何かを
という吉村学科長の言葉を受け、「英文学
科の『現在・過去・未来』—過去10年間の歩み」
と題した小特集を組んでみました。2006年には
120周年を記念してそれまでの英文学科の歩みをま
とめた立派な冊子『Beautiful Smiles since 1886』が
出ましたので、今号はその後の10年間に起こった出来
事や変化、トピックスを思いつくままに書きだしその
なかからご覧の項目を選び、事実とデータを中心にまと
めました。なかでも最大の事件、東日本大震災の影響を
ひとことと言いつくことはできません。ただ、あの日
以来、わたしは学生のことばが変わった、以前に比べ
てことばを大切にするようになったと感じていま
す。今号も副手室の阿部ひとみさんと小室利沙
さんには、編集とくにデータの収集・解析の
段階でひとかたならぬお世話になりました。
有り難うございました。
編集委員 鈴木雅之

執筆者紹介

飯塚久栄	宮城学院女子大学名誉教授
Barbara Bourke	宮城学院女子大学元客員教授
増富和浩	宮城学院女子大学准教授
遊佐典昭	宮城学院女子大学教授
鈴木雅之	宮城学院女子大学特任教授
吉村典子	宮城学院女子大学教授
田島優子	宮城学院女子大学准教授
Cory J. Koby	宮城学院女子大学特任助教

編集委員

吉村典子
鈴木雅之
阿部ひとみ
小室利沙（編集補助）

英文学会誌 第45号

発行	2017年3月10日
編集	代表 吉村典子
発行所	宮城学院女子大学 学芸学部 英文学会 仙台市青葉区桜ヶ丘9丁目1番1号 電話 (022) 279-1311 (代)
印刷所	プリントコープ KOPAS 電話 (022) 727-1760